

浅川扇状地遺跡群
桐原宮北遺跡

— 「桐原牧の里」住宅地造成工事に伴う発掘調査報告書 —

2012・3

長野市教育委員会

序

遺跡や遺物などの埋蔵文化財は、「土地に刻まれた歴史」ともいわれるように、郷土の成り立ちと文化を理解するうえで欠くことのできない貴重な遺産です。肥沃な善光寺平の中央部に位置する長野市においては、その悠久の歴史を物語るように、現時点で800箇所を超える遺跡が周知されていますが、各種の開発事業に伴って現状での保存が困難となったものについては事前に発掘調査を実施し、記録保存という形で後世に伝えていく措置を講じています。

ここに長野市の埋蔵文化財第130集として刊行いたします本書は、「桐原牧の里」住宅地造成工事に伴って実施した桐原宮北遺跡に関する発掘調査報告書であります。調査地は、藁馬奉納の行事で知られる桐原牧神社の北側にあたり、この地に、平安期に見える牧場「桐原牧」が所在したとする説があるとおり、古い来歴を有した一帯に位置することが示唆されておりました。調査の結果、縄文時代から中世にわたる各時代の遺構と遺物が確認され、その歴史の一端が明らかとされたものであります。この調査成果を、地域史解明の一助として、多くの皆様にご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力を賜りました長野電鉄株式会社を始めとする事業関係者各位並びに、発掘作業に際して多大なご尽力をいただきました地元の皆様方に厚く御礼申し上げます。

平成24年3月

長野市教育委員会
教育長 堀内 征治

例 言

- 1 本書は、長野電鉄株式会社を事業主体とする「桐原牧の里」住宅地造成工事に伴って、埋蔵文化財の記録保存を目的として実施した発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、事業主体と長野市長との間で発掘調査委託契約を締結して実施し、調査業務は長野支教育委員会文化財課埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 発掘調査の所在地は、長野市桐原一丁目字宮北853-1であり、字名を冠して周知の埋蔵文化財包蔵地「桐原宮北遺跡」と命名する。なお、調査地には桐原二丁目字村北943・963の一部が僅かに含まれている。
- 4 発掘調査期間は、平成22年8月2日から10月22日までの間に発掘作業を実施し、以降、平成24年1月まで整理作成作業を実施して報告書作成に至った。
- 5 本書での資料提示の要領は次のとおりとした。
 - ・概要について、Ⅲ章で路線毎に遺構・遺物の概要等を記述し、全体図を掲載した。
 - ・遺構について、Ⅳ章で個別に記述し、一覧表、実測図及び写真を掲載した。
 - ・遺物について、Ⅴ章で個別に記述し、一覧表、観察表、実測図及び写真を掲載した。
- 6 本書に掲載した遺構測量図は、平面直角座標系第Ⅷ系（日本測地系2000）座標値及び日本水準原点標高に基づいて作成した。
- 7 本書の執筆分担は、Ⅴ章を平林大樹が、その他を青木和明が担当した。
- 8 出土遺物及び調査に係る諸記録は、長野市教育委員会（埋蔵文化財センター担当）で保管している。なお、遺物注記や調査記録等に用いる略号は『AKMK』とした。

目次

例言・目次	2 掘立柱建物	19
I 調査経過	3 土坑（井戸状遺構）	20
1 調査の契機	4 溝（方形周溝墓）	23
2 調査の経過	5 不明遺構（溝状遺構）	24
3 調査の体制	[遺構一覧表] [遺構実測図] [遺構写真]	
II 遺跡と環境	V 遺物	
1 遺跡周辺の環境	1 土器	41
2 遺跡周辺の発掘調査状況	2 その他の遺物	45
III 調査概要	3 1号不明遺構出土の須恵器	46
[調査区・遺構全体図]	[遺物実測図] [遺物一覧表]	
IV 遺構	[遺物観察表] [遺物写真]	
1 竪穴住居	抄録	
16		

挿図目次

図1 発掘調査の位置と範囲	1	図11～23 遺構実測図	28～40
図2 遺跡の位置	4	図24 食膳具における寸法の分布	46
図3 遺跡周辺の字名	4	図25 食膳具における各器種の割合	47
図4 遺跡周辺の旧地形図	5	図26 双耳坏と銅椀	48
図5 調査区全体図	10	図27～39 遺物実測図	49～61
図6～10 遺構全体図	11～15		

表目次

表1 遺構一覧表	26・27	表3 土器観察表	63～69
表2 遺物一覧表	62	表4 その他の遺物観察表	69

I 調査経過

1 調査の契機

長野電鉄桐原駅に隣接する(株)よしのや桐原工場の跡地において、長野電鉄(株)を事業主体とする宅地造成事業(開発面積約9,980㎡、宅地38区画)が計画された。事業計画地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「浅川扇状地遺跡群」範囲内に位置するため、長野電鉄(株)から平成22年5月24日付けで土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書(文化財保護法第93条第1項)が県教委宛に提出され、合わせて試掘調査依頼書が市教委宛に提出された。市教委埋蔵文化財センターでは、依頼に基づき6月7日に試掘調査を実施し、事業地のほぼ全域において埋蔵文化財包蔵の可能性が高いことを確認し、着工に際しては記録保存のための発掘調査を実施する方向で事業主体との協議をすすめた。発掘調査の対象範囲は、地下に影響の及ぶ開発道路約2,200㎡とし、造成工事9月着工を見越して8月から発掘調査に着手する運びとなった。7月30日付けで長野電鉄(株)と長野市との間で発掘調査実施に係る協定及び契約を締結し、8月2日をもって発掘調査を開始するに至った。

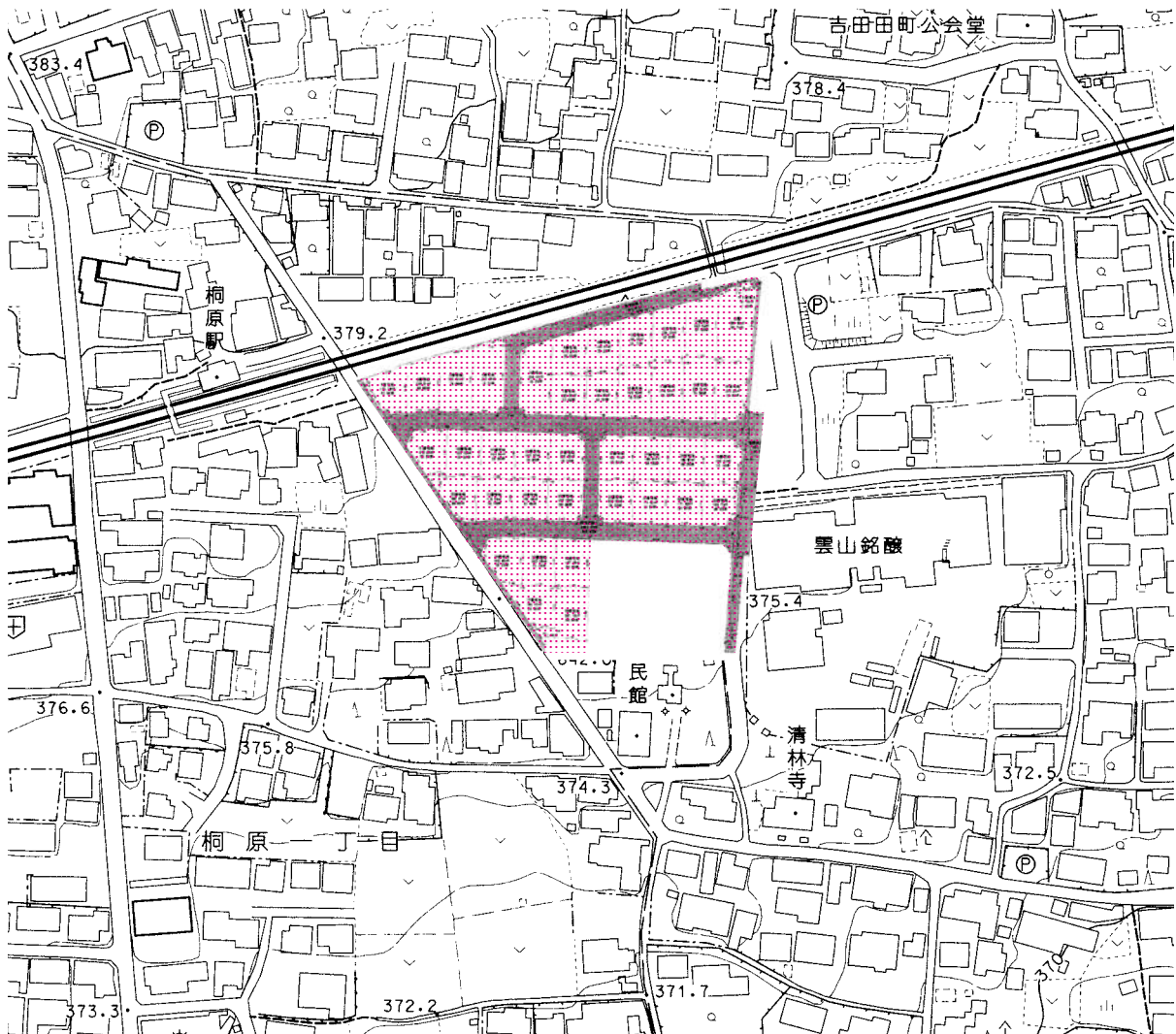


図1 発掘調査の位置と範囲 (1:2,500)

2 調査の経過

8月2日 調査開始、機器材を搬入し、重機による表土除去に着手。

3日 2号道路に関する遺構検出作業を開始。
(写真：8月11・20日、測量：9月2日)

19日 1号道路に関する遺構検出作業を開始。
(写真：8月26・31日、測量：9月2日)

9月6日 3号道路に関する遺構検出作業を開始。
(写真：9月22日、測量：9月31日)

10日 4号道路西半に関する遺構検出作業開始。
(写真：9月30日、測量：9月31日)

10月5日 4号道路東半に関する遺構検出作業を開始。
(写真：10月7・14日、測量：10月14日)

13日 5号道路に関する遺構検出作業を開始。
(写真：10月20日、測量：10月21日)

22日 機器材を撤収し、調査に係るすべての現地作業を完了。



2号道路 表土の除去



2号道路 遺構の検出



1号道路 遺構の掘削



2号道路 遺構の掘削



1号道路 遺構の測量



3号道路 遺構の掘削

3 調査の体制

調査主体者 長野市教育委員会 教育長 堀内征治
調査機関 文化財課 課長 金井隆子 (H22) 山口 明 (H23)
埋蔵文化財センター 所長 青木和明
庶務担当 係長 北村嘉孝 職員 大竹千春
調査担当 係長 千野 浩 (H22) 飯島哲也 (H23)
主査 小林和子 主事 塚原秀之
専門員 遠藤恵実子 (H22) 山野井智子 木村夏奈 (H22)
塚原由実 (H22) 山本賢治 柳生俊樹
高田亜紀子 平林大樹 田中暁穂 (H23)

調査員 青木善子 池田寛子 鳥羽徳子 武藤信子 矢口忠良
調査補助員 中嶋昭二郎
発掘作業員 上原律江 金子多恵子 後藤一雄 塩入洋子 田村秀之 寺島直利 宮澤周子 宮下美代子
山口勝己 和田五男
整理作業員 小泉ひろ美 清水さゆり 関崎文子 西尾千枝 待井かおる 三好明子
測量業務委託 株式会社写真測図研究所
報告書データ編集業務委託



4号道路西半 遺構の掘削



5号道路 遺構の検出



4号道路東半 遺構の検出



5号道路 遺構の掘削

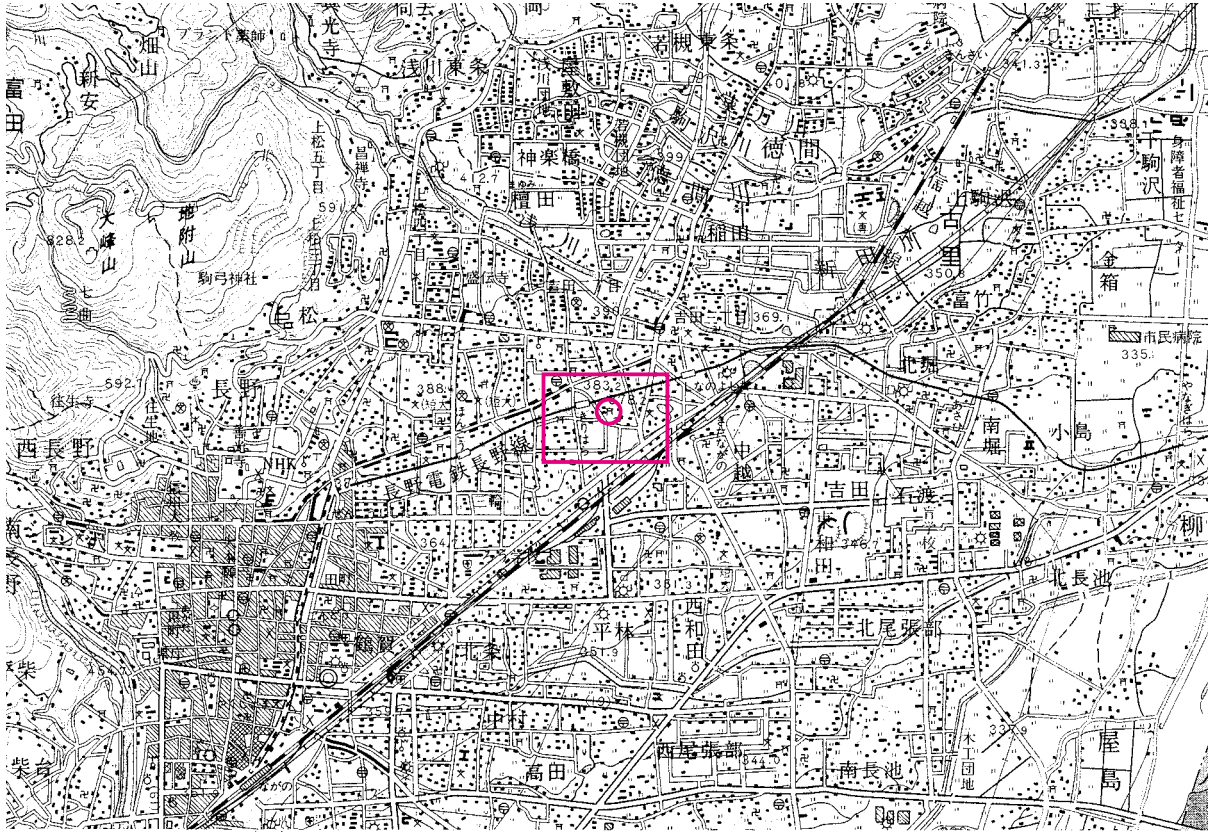


図2 遺跡の位置 (1 : 50,000)

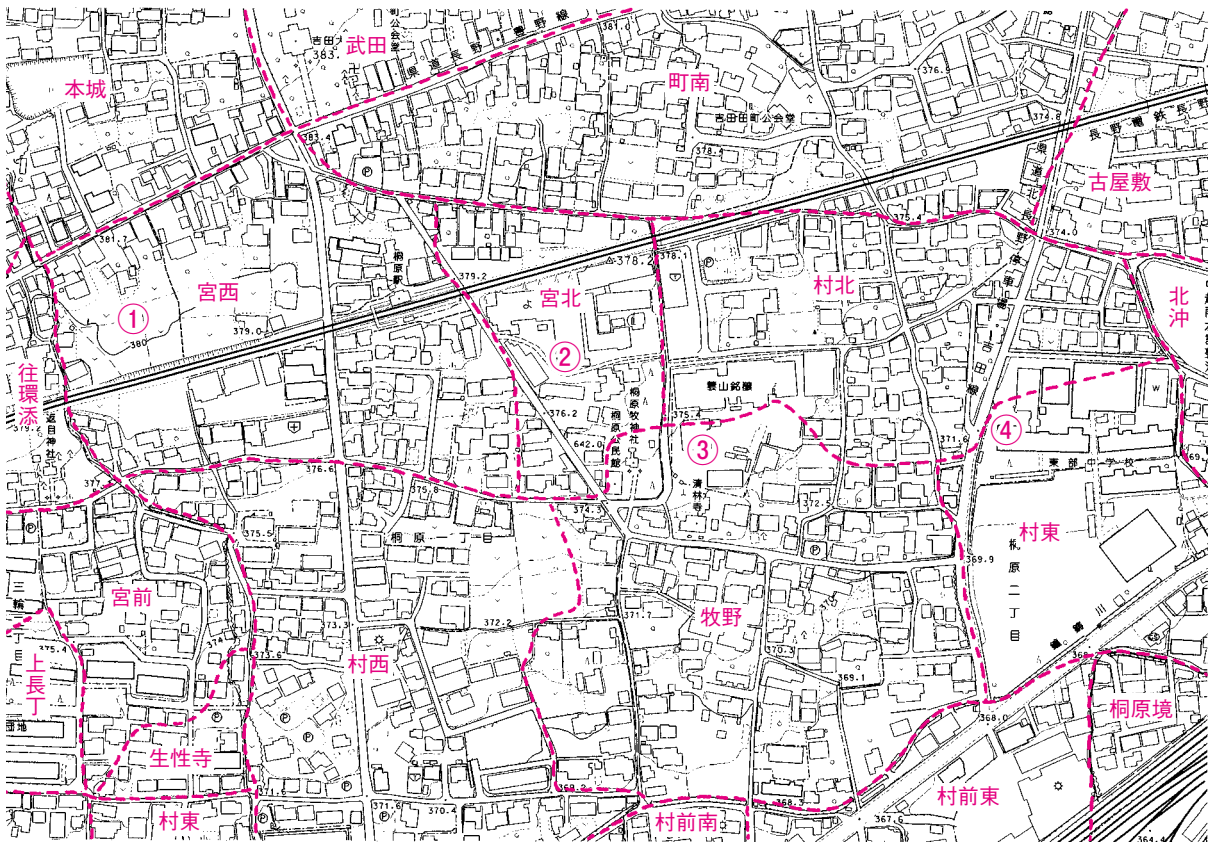


図3 遺跡周辺の字名 (1 : 5,000)

- ① - 桐原宮西遺跡 ② - 桐原宮北遺跡 ③ - 桐原要害 (高野氏館跡) ④ - 東部中学校遺跡

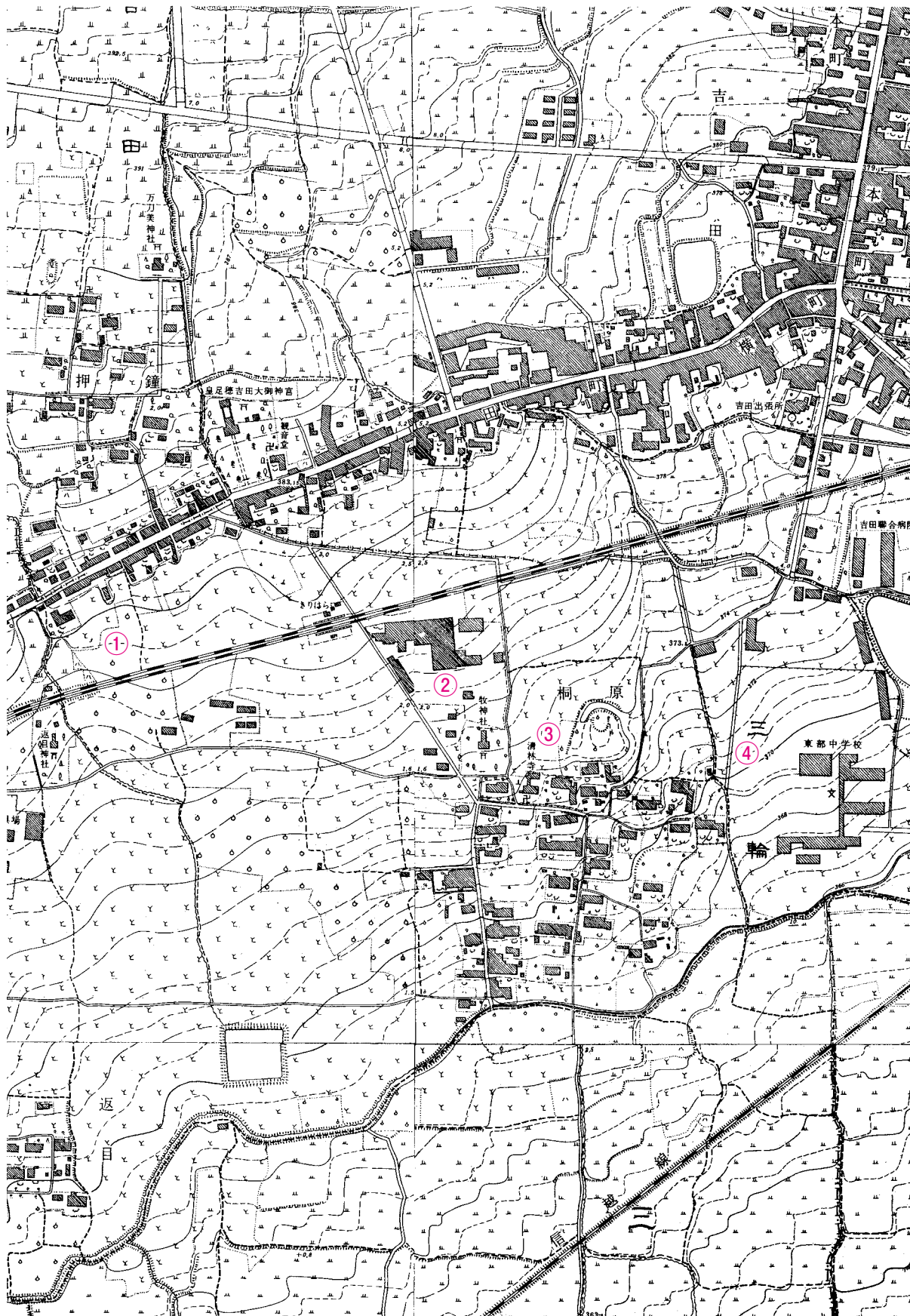


図4 遺跡周辺の旧地形図 (大正14年測量・昭和27年修正、1:5,000)

- ①- 桐原宮西遺跡 ②- 桐原宮北遺跡 ③- 桐原要害 (高野氏館跡) ④- 東部中学校遺跡

Ⅱ 遺跡と環境

1 遺跡周辺の環境

遺跡が所在する桐原地区は、江戸期の水内郡桐原村を前身とする。明治9年に同郡返目村との合併によって古野村となり、明治22年の三輪村への編入を経て、大正12年に長野市編入後に大字古野となり、平成10年の住居表示施行によって現行の桐原一・二丁目となったものである。なお、桐原の地名は、室町期の文献に見え、以降、水内郡内の村名として用いられてきたものであるが、平安期に見える「桐原牧」をこの地にあてる説もある。

地理的には、浅川扇状地の扇央部の南東に向かう緩やかな傾斜地に属す一帯にあり、宅地化が進行した現在では詳細に地形を視認することが困難となっているが、大正15年に測量された地形図（図4）からは、桑畑の広がる畑作地帯として利用されてきた旧来の地形を窺い知ることが可能である。また、同地形図の等高線から微地形としての起伏を観察することができる。遺跡の位置する桐原集落の北側には、かつての河川流路の痕跡を示す谷筋が100～150mの間隔をもって並列し、それに挟まれた尾根筋が微高地として帯状に形成されている。この度の調査所見に照らせば、尾根筋の堆積土壌は砂礫質、谷筋の土壌は粘土質に傾き、尾根筋を居住域として遺跡が構成されているらしいことが読み取れる。さらに同地形図には、桐原神社の東隣に約一町四方の方形区画と土塁の痕跡が明瞭に記されている。現状では削平されてその痕跡を留めてはいないが、中世居館跡と認定して誤りない。この居館跡に関しては、応永11年に信濃国代官細川氏が高梨氏を討った際に攻落されたと伝えられる「桐原要害」とする説があり、また、『長野県町村誌』においては「高野氏古城址」と記載している。ちなみに、市教委作成の遺跡一覧表においては「桐原要害（高野氏館跡）」と命名しているものである。

最後に、事業地に転用された(株)よしのや桐原工場の沿革について付記しておきたい。長野電鉄長野線開業と同年の大正13年に、市内大字長野西之門町の吉野屋藤井伊右衛門の桐原分工場として開設され、昭和21年に株式会社として改組、昭和35年には、隣接地に関連会社である雲山銘醸(株)が設立された。この度、両社が統合して(株)よしのや犀川蔵と改称し、市内大字川合新田（アークス）へ移転することとなったものである。

（本稿については桐原区誌編纂推進特別委員の長澤要氏のご教示によるところが大きい。記して感謝申し上げます。）

2 遺跡周辺での発掘調査状況

当該調査によって命名された「桐原宮北遺跡」は、字村北及び牧野所在の「桐原要害（高野氏館跡）」、字村東所在の「東部中学校遺跡」、字宮西所在の「桐原宮西遺跡」に続いて地区内5箇所目の遺跡であり、発掘調査としては次に紹介する「桐原宮西遺跡」に続いて2件目の調査となったものである。

桐原宮西遺跡の発掘調査

桐原一丁目字宮西793他（文献：長野市教委2005『桐原宮西遺跡 他』）

平成15年4月に、宅地造成事業に伴って約400㎡の発掘調査を実施し、古墳時代後期の竪穴住居4軒、平安時代の竪穴住居5軒、掘立柱建物1棟などを検出した。調査地は、今回の調査地から西に200m離れているが、地形的には連続した一連の環境内に位置するものであり、微細な起伏によって谷筋と尾根筋が形成される中で、尾根筋を中心として竪穴住居等の遺構が分布する状況が確認されている。同所見は今回の調査でも追認されており、扇状地内における遺構分布についての微視的な具体例となるものである。

Ⅲ 調査概要

約1haの事業計画地は、(株)よしのや桐原工場の敷地として長く利用され、敷地造成や建物建設あるいは解体撤去によって大きく改変を受けた状態にあったものの、事前の試掘調査から、ほぼ全域に遺構が残存することが確認された。このため、事業に伴っては計画地の全体について保護措置を講じる必要が生じたが、盛土によって造成される宅地部分に関しては地下への影響が僅少と判断し、記録保存のための発掘調査範囲は約2,200㎡の開発道路部分に限定した。調査に際しては、工事計画との円滑な調整によって期間及び経費の縮減を図ることとし、道路築造工程に沿って、2号道路→1号道路西→1号道路→3号道路→4号道路→5号道路の順に、路線毎に発掘作業を進めたものである(図5)。

検出遺構と遺物の概要は、次章の表1にまとめているが、総体として、竪穴住居12軒、溝10本(うち5本は方形周溝墓の可能性あり)、土坑21基、掘立柱建物1棟及び性格不明遺構2基を数える。所属時期不明のものを除き、竪穴住居の時代別内訳は、弥生～古墳時代1軒、古墳時代後期2軒、平安時代8軒。土坑の時代別内訳は、弥生～古墳時代1基、古墳時代後期1基、平安時代11基、中世3基となる。出土遺物には縄文時代に遡るものが含まれている点を考慮すれば、縄文時代から中世に至るまでの各時代にわたって、断続的ながらも長期間営まれてきた集落遺跡であると位置づけることができる。

ただし、遺構分布の密度からすると、調査面積1,800㎡に対しての検出遺構としては少数にとどまるものであり、遺構間での重複関係も認められない。造成及び攪乱によって失われている遺構の存在を考慮しても、遺構の分布状態は疎で散在的な傾向にあるといえよう。このことから、当該遺跡の居住域としての利用状況は、むしろ消極的であったと判断することの方が妥当と思われる。また、周溝墓の存在から、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての時期には、集落域としてよりも墓域としての利用が優先された状況を想定することもできる。

次に、路線別にその概要をまとめる。



1号道路全景(西から)



1号道路西全景(北から)



2号道路全景(東から)



2号道路全景(西から)

1号道路の調査と検出遺構

事業計画地の北辺、長野電鉄線路沿いに計画される東西路線が1号道路であり、幅員5m、延長69mを測る。また、路線西端から2号道路に接続する延長22mの南北路線については1号道路西とする。

当該路線は扇状地の上流側に位置し、工場敷地の造成と建物解体撤去後の整地に伴って切土されているため、地表から遺構検出面までの深さが10~40cmと浅い。また、植栽や建物基礎等の解体撤去に伴って攪乱を受けた範囲が多く、遺存状態は不良である。

遺構検出面の標高は、路線東端で調査範囲の中で最高値を示す377.54m、西端において377.89mを測り、比高差65cmで西側へと傾斜する。路線中央から東側にかけての範囲には砂礫層が分布しているが、同範囲では上部土層が削平されたものと想定され、旧来は尾根状地形としてさらに高まりを有していた可能性が考えられる。検出遺構は竪穴住居4軒、溝3本、土坑6基であり、標高を減じた路線西側ほど分布密度が高い傾向がある。

2号道路の調査と検出遺構

事業計画地の中央に計画される東西路線が2号道路であり、幅員6m、延長120mを測る。工場建物基礎等の攪乱を受け、路線の東半ではほとんどの範囲が攪乱されており、遺存状態は悪い。

地表から遺構検出面までの深さは60~70cmとやや深く、遺構検出面の標高は、路線西端で377.11m、東端で376.19mを測り、比高差92cmで東側に傾斜する。検出遺構は路線の途中に集中し、竪穴住居1軒、溝（方形周溝墓）3本、土坑7基が確認できる。この遺構集中部分を挟んで東西の範囲が砂礫層となり、同範囲においては遺構分布が確認できない。1号道路の例と同様に、上部土層が削平されている可能性があり、旧来は尾根状地形を呈していたと想定することができる。

3号道路の調査と検出遺構

2号と4号の中間点において両路線を接続する南北路線が3号道路であり、幅員5m、延長30mを測る。路線の南半が工場建物基礎等による攪乱を受け、遺存状態は



2号道路遺構集中範囲（東から）



3号道路全景（北から）



3号道路全景（南から）



4号道路（西から）

不良である。

地表から遺構検出面までの深さは60～80cmとやや深く、遺構検出面の標高は、路線北端で376.74m、南端で375.97mを測り、比高差77cmで南側に傾斜する。2号道路から連続して遺構が集中分布し、竪穴住居1軒、溝(方形周溝墓)4本、掘立柱建物1棟が確認できる。なお、路線南側ほど砂礫質が強まり、4号道路の砂礫層分布範囲へと連続している。

4号道路の調査と検出遺構

事業計画地の南辺に計画される東西路線が4号道路であり、幅員6m、延長91mを測る。当該路線は工場建物が疎らであった敷地南側に位置しているため、攪乱を受けた範囲は少なく、遺存状態は良好である。

地表から遺構検出面までの深さは40～80cmとやや深く、遺構検出面の標高は、路線北端で375.89m、中程で375.81m、南端で375.34mを測り、比高差55cmで東側へと傾斜する。路線中程の範囲には砂礫層が分布し、尾根状地形を呈するものと考えられる。検出遺構には竪穴住居3軒、土坑7基、性格不明遺構1基があり、性格不明遺構を除いて路線の東半に分布が偏在する。

5号道路の調査と検出遺構

事業計画地の東辺において2号と4号を接続する南北路線が5号道路であり、幅員6m、延長49mを測る。なお、この路線は、事業計画に東側で建設が予定されている都市計画道路「高田若槻線」の側道に該当する部分であるが、当該宅地造成に付帯して事業者によって先行実施(自営工事)されることとなったものがある。

当該路線の一带は、工場敷地の造成に際して50cm前後の盛土が施されていることから、地表から遺構検出面までの深さは110～120cmと深く、遺構検出面の標高は、路線北端で375.77m、南端で374.93mを測り、比高差84cmで東側に傾斜する。路線は尾根状地形から谷筋へと向かう斜面に位置しているものと思われ、検出面における土壌は事業計画範囲の中でもっとも粘土質に傾いている。検出遺構には竪穴住居3軒、土坑2基があり、路線南端の性格不明遺構は中世居館の堀跡とも推定される。



4号道路全景(東から)



4号道路遺構集中範囲(南西から)



5号道路全景(北から)



5号道路全景(南から)

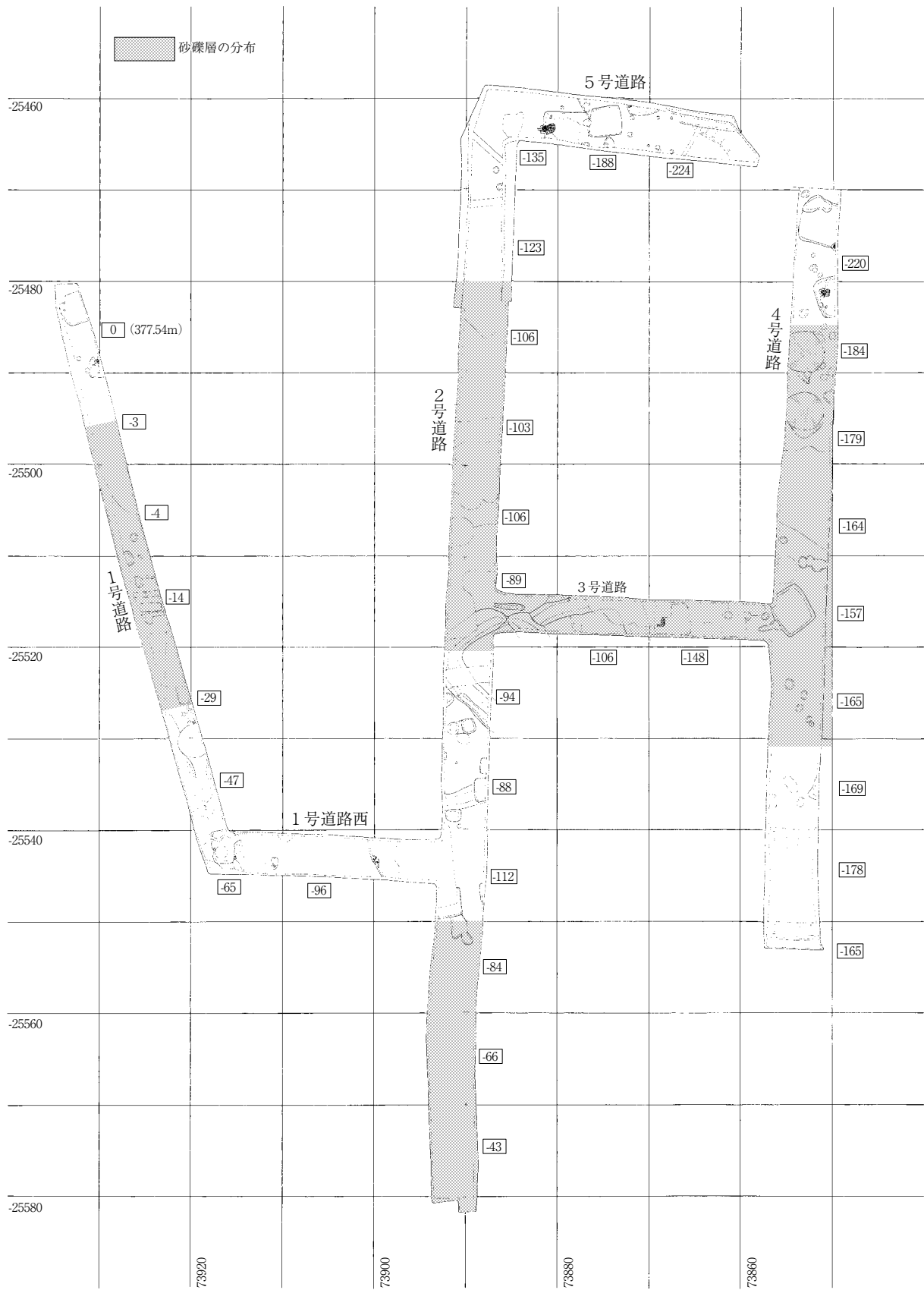


図5 調査区全体図 (1 : 600)

□内数字は、1号道路東端を0とした場合の標高差 (-cm)

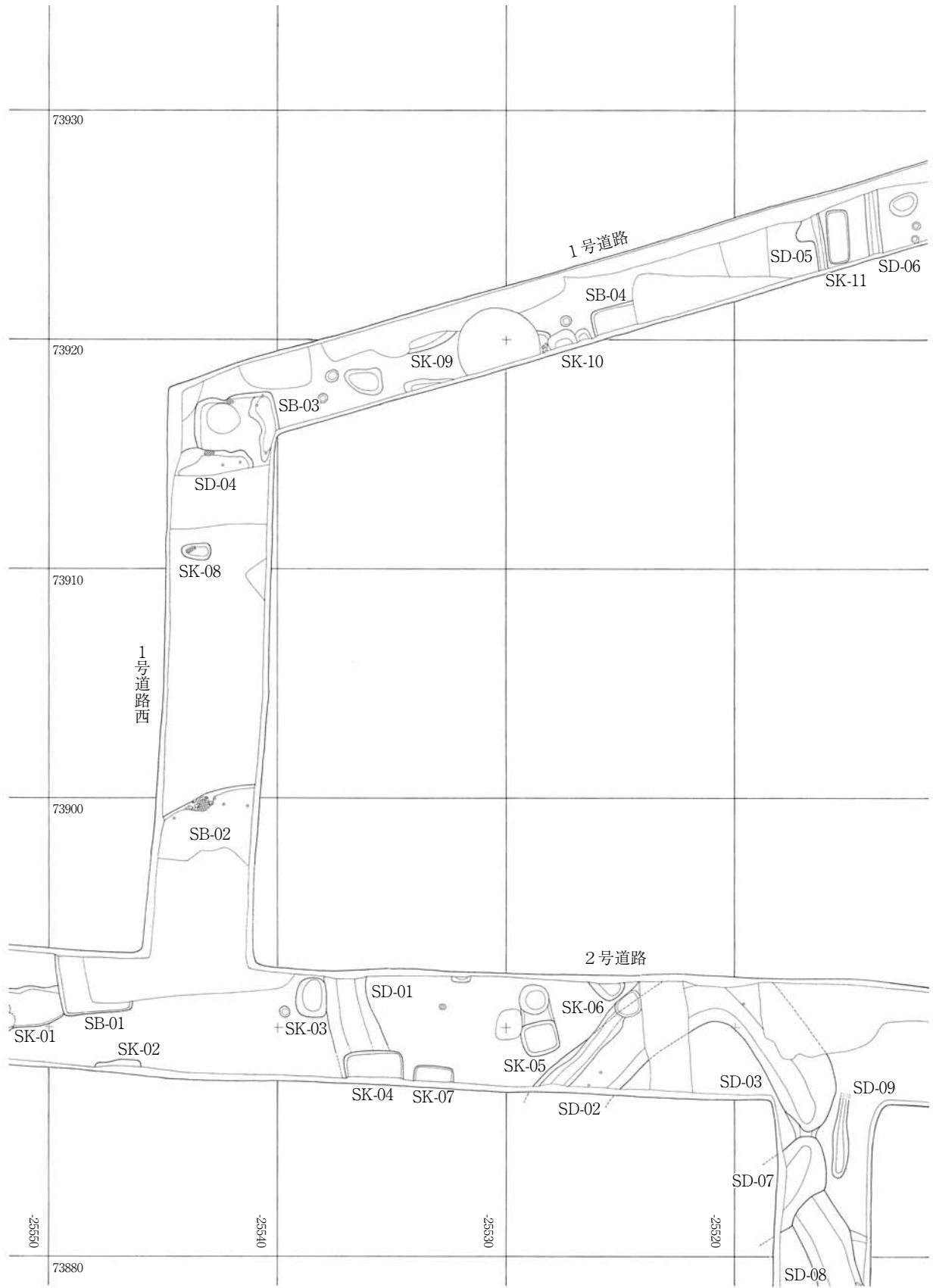


图6 遺構全体図① (1 : 250)

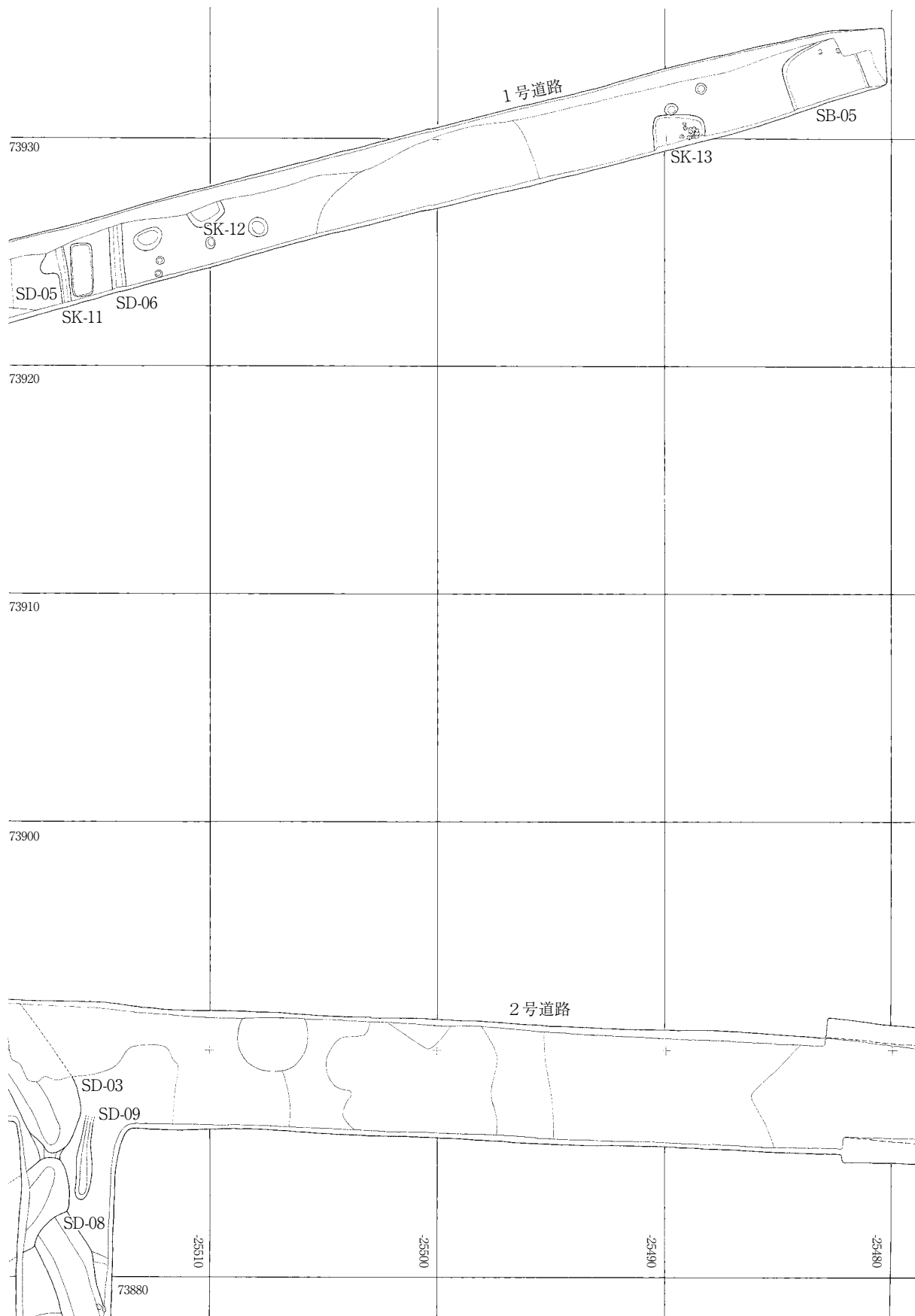


图7 遺構全体図② (1 : 250)

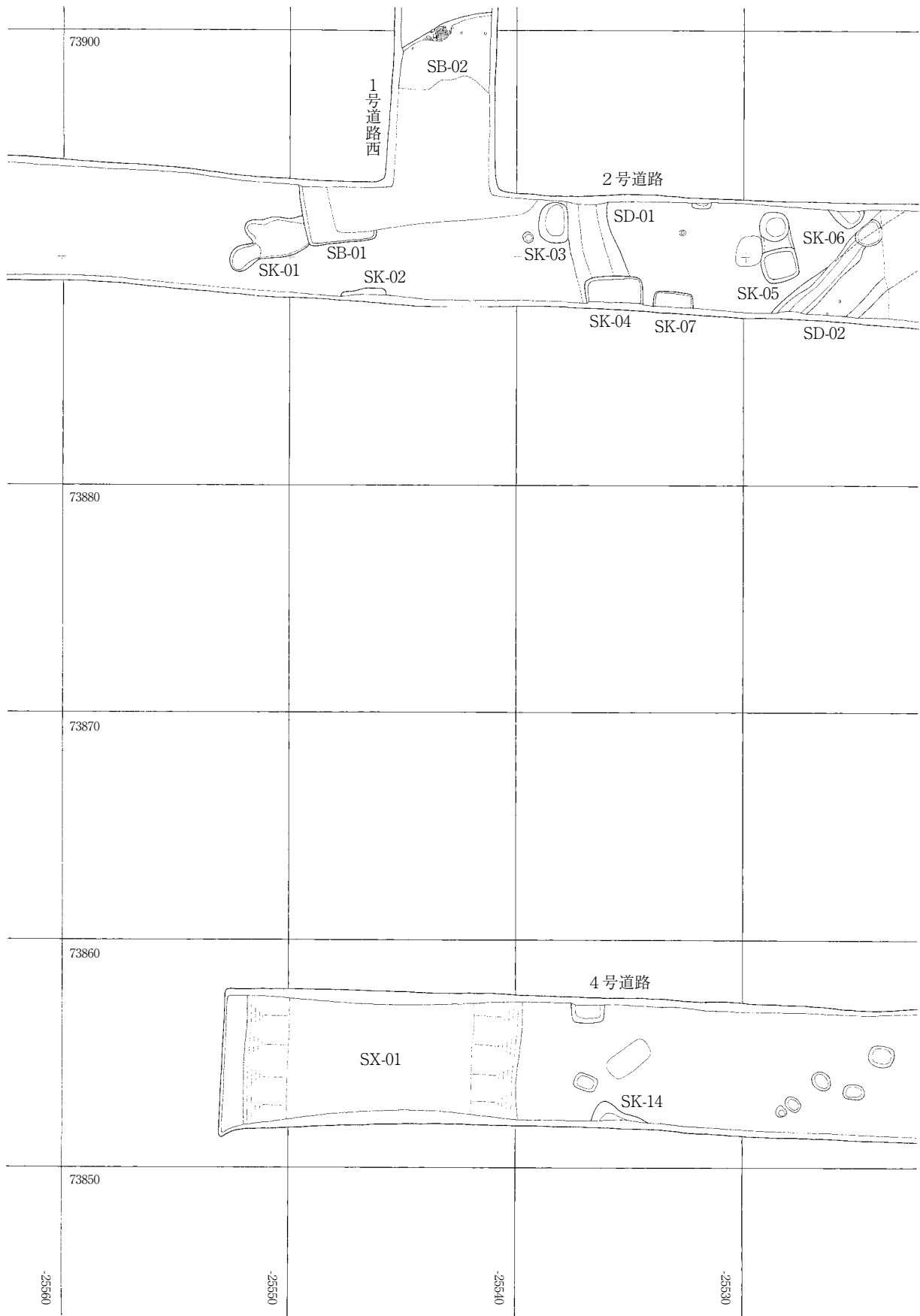


图8 遺構全体図③ (1 : 250)

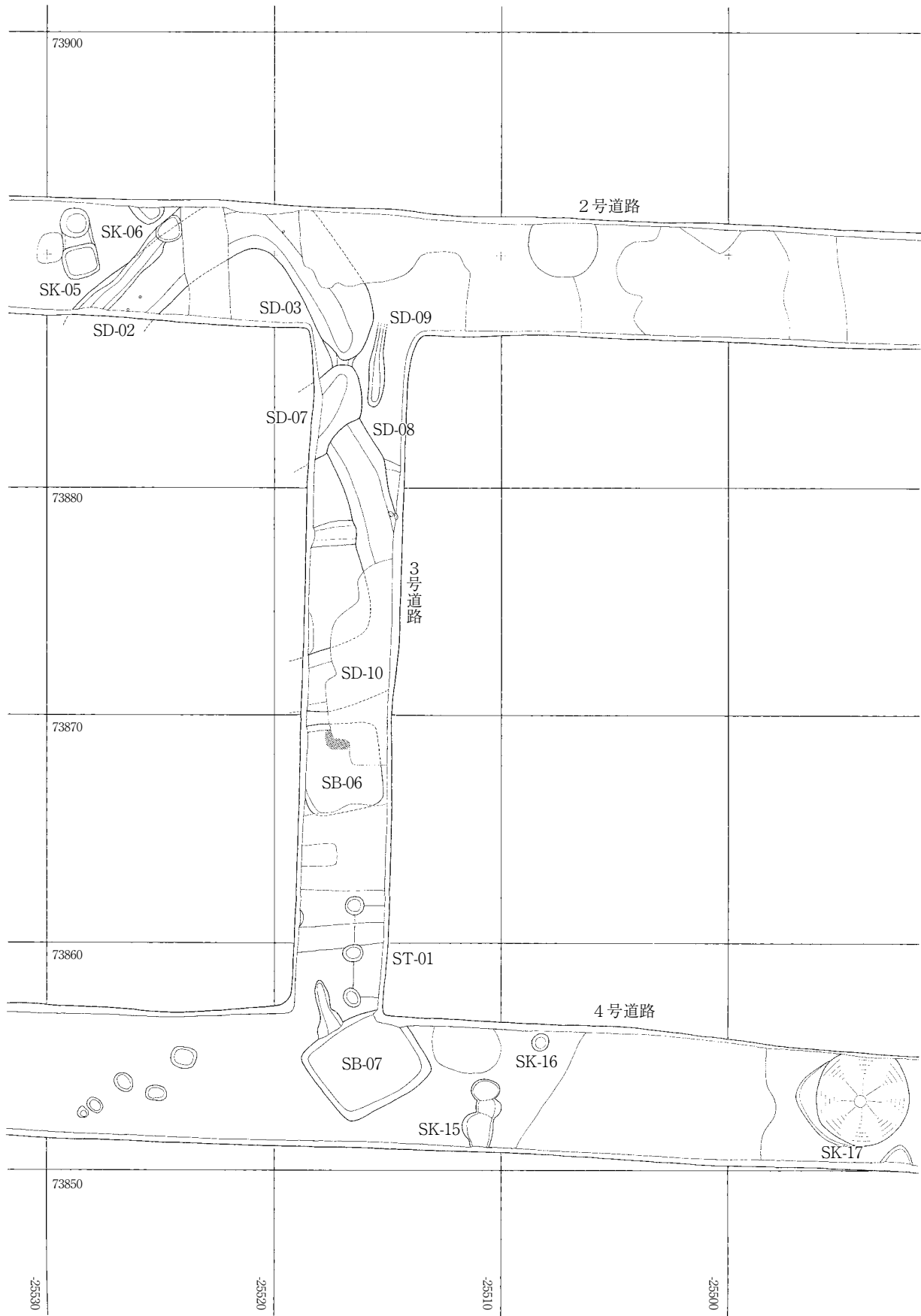


图9 遺構全体図④ (1 : 250)

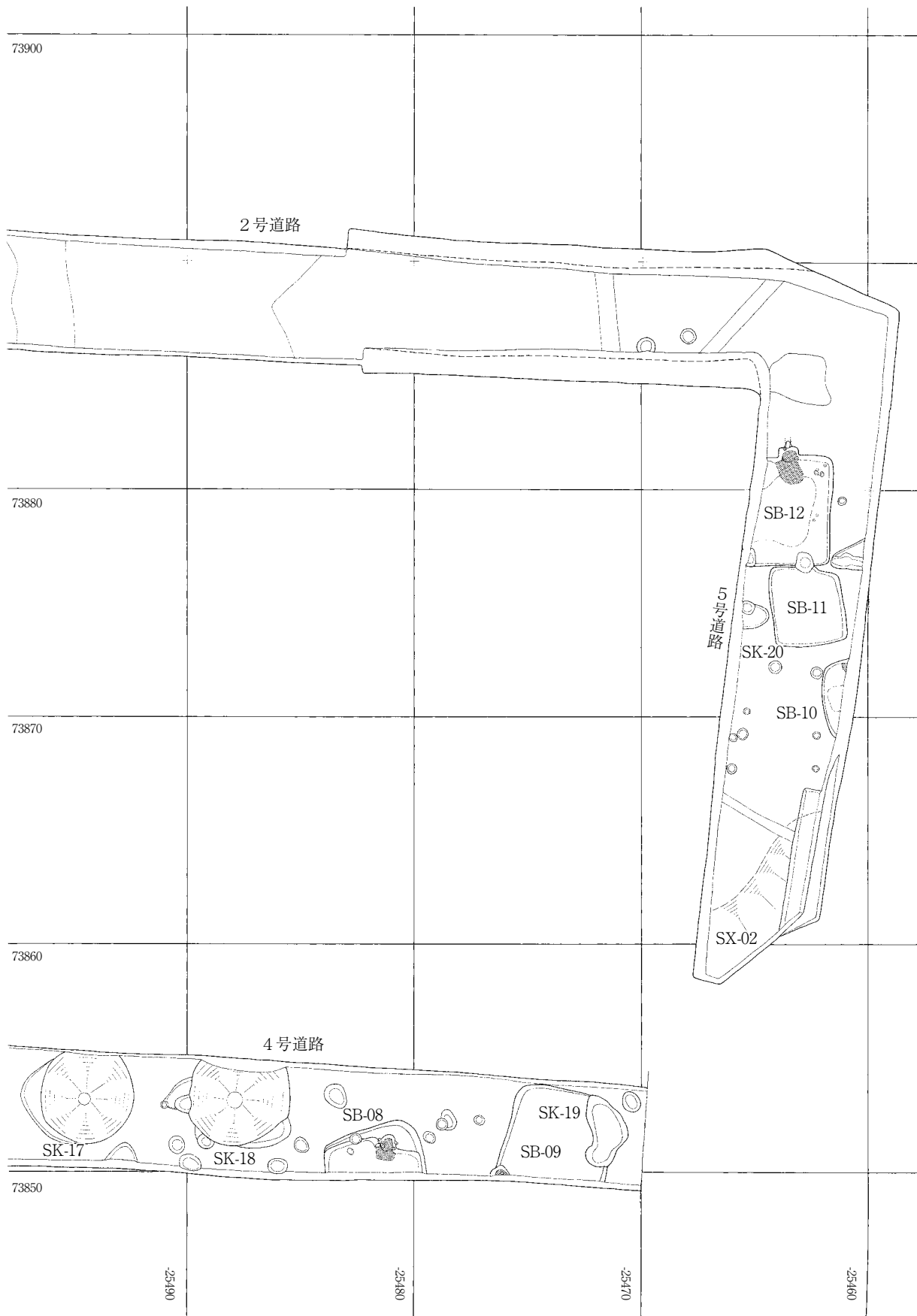


图10 遺構全体図⑤ (1:250)

IV 遺構

調査において検出確認した遺構は、遺構種別に一連の番号を付し、各遺構の概要（所属時期、形態・施設・規模等検出状況、出土遺物）を一覧表に集約した（表1）。

遺構測量図に関しては、前章において調査範囲全体図（1：500）及び遺構全体図（1：250）を、本章において遺構実測図（1：100）を掲載した。また、遺構写真については、路線別及び遺構別に集成して図版とした。

なお、遺構名の表記に関しては、次の記号による表記を併用している。

竪穴住居：S B 溝（方形周溝墓を含む）：S D

土坑（井戸状遺構を含む）：S K

掘立柱建物：S T 不明遺構（溝状遺構）：S X

1 竪穴住居

検出総数12軒を数えるが、全形を確認できたものは僅かである。時代別の内訳としては、弥生時代後期～古墳時代前期が1軒（7号住居）、古墳時代後期が2軒（2・5号住居）、平安時代が8軒（1・3・6・8～12号住居）、時期不明1軒（4号住居）である。

1号住居（SB-01）

2号道路においてSK-01と重複して検出された。攪乱部分が多く、出土遺物も僅少であるが、主軸方位を南北線に置いた平安時代小形住居と判断される。なお、平安時代に属する竪穴住居は、主軸方位をほぼ南北線に合致



1号住居 検出状況



2号住居 検出状況



2号住居 カマド及び周辺



2号住居 カマド検出状況



2号住居 馬歯出土状況

させ、北壁にカマドを構築することで共通する。

2号住居 (SB-02)

1号道路西において北壁カマドを中心に検出された。古墳時代後期の所産と判断され、カマド内及び周辺の床面から土器等遺物が集中的に出土する中で、馬歯の出土が特筆される。下顎の切歯及び臼歯片側分が一揃いとして検出されたものであり、骨質の遺存が僅かながら観察される。埋没時点では既に解体された状態にあったと推定され、出土位置とレベルからみて、後世に混入した可能性は低い。古墳時代後期の馬飼育を具体的に示す資料として貴重な検出例となる。

なお、古墳時代後期の竪穴住居は、主軸方位が南北線から西側にやや傾きを有している点で平安時代のそれと区別されよう。

3号住居 (SB-03)

1号道路西の北端においてSD-04と重複して検出された。北壁中央に焼土が観察され、カマド設置の痕跡と判断される。東壁に接した床面は大きく陥没し、凹石などの出土を見ている。

4号住居 (SB-04)

1号道路において検出されたが、僅かな範囲のみの確認に留まり、出土遺物も僅少、所属時期についても不明である。

5号住居 (SB-05)

1号道路の東端において検出された。出土遺物は僅少、床面も軟弱で判然としないが、北壁にカマドが構築されていたものと推定される。古墳時代後期の所産と判断され、主軸方位は南北線から西側に傾きを見せる。



3号住居 検出状況



3号住居 遺物出土状況



5号住居 検出状況



6号住居 検出状況



6号住居 カマド周辺検出状況

6号住居 (SB-06)

3号道路において比較的良好な遺存状態で検出された。平安時代の所産と判断され、北壁にはカマドの構築が確認される。砂礫質の基盤層に掘り込まれているが、床面は黄褐色粘土によって貼床され、また、カマド周辺からは比較豊富に遺物出土を見ている。

7号住居 (SB-07)

4号道路の3号道路交差点においてほぼ全形が検出された。遺物出土量は豊富であり、弥生時代後期末あるいは古墳時代前期初頭の所産と判断される。一辺4.5m内外の方形堅穴で、主軸方位は南北方位からほぼ45度傾きを見せ、同時期の方形周溝墓と共通した方位をとっている。砂礫質の基盤層に掘り込まれ、床面は軟弱、炉・柱穴等の施設も確認できず、判然とはしていない。

8号住居 (SB-08)

4号道路の東側においてカマド部分を中心に検出された。平安時代の所産と判断され、カマドが構築されている北壁が不整形を呈しているものの、検出作業の誤りもあって本来は主軸を南北方向にとる端整な方形堅穴と推測される。なお、当住居に限られることではないが、砂礫質の基盤に掘り込まれたカマド内においては焼土塊が形成されず軟弱で崩れやすい状況にあるため、カマドの遺存(検出)状況は不良である。

9号住居 (SB-09)

4号道路の東端においてSK-19と重複して検出された。一辺5m強と比較的大形の堅穴で、床面は軟弱で判然としないが、遺物の出土量が豊富であり、平安時代でも新しい段階の所産と考えられる。西南隅にカマドが構築されるらしく、北壁中央にそれを構築する他の平安時代堅穴住居とは様相を異にしている。

10号住居 (SB-10)

5号道路において、僅かな検出範囲ながら比較的良好に確認された。平安時代の所産と判断され、北壁中央にカマドを構築するらしく、床面には黄褐色粘土を用いた堅緻な貼床が観察される。

11号住居 (SB-11)

5号道路において、SB-12の南壁に接して、ほぼ全形を検出した。出土遺物は比較少量に留まるが、平安



7号住居・1号建物 検出状況



8号住居 検出状況



8号住居 カマド検出状況



9号住居 検出状況

時代の所産と判断される。一辺3.5m内外の小形竪穴で、カマド位置は未確認ながら、北壁中央部の小穴がその痕跡となる可能性もある。床面には黄褐色粘土を用いた貼床が観察されるものの、軟弱で判然とせず凹凸が著しい状態で確認されている。

12号住居 (SB-12)

3号道路において検出され、西壁が調査範囲外となっているものの、遺存状態はきわめて良好であり、平安時代の所産と判断される。一辺5m弱の端整な方形竪穴であり、北壁中央にはカマドを構築し、カマドの燃焼部は凸形に壁外へ張り出す形となる。煙道の一部が僅かに遺存し、カマド内及び焚口周辺には、焼土・炭化物の堆積も観察できる。床面は壁際を除いて黄褐色粘土による貼床が施され、堅緻かつ平坦面が形成されている。貼床が施されていない壁際は軟弱であり、また、東壁側の床面からは完形に近い土器類が出土している。

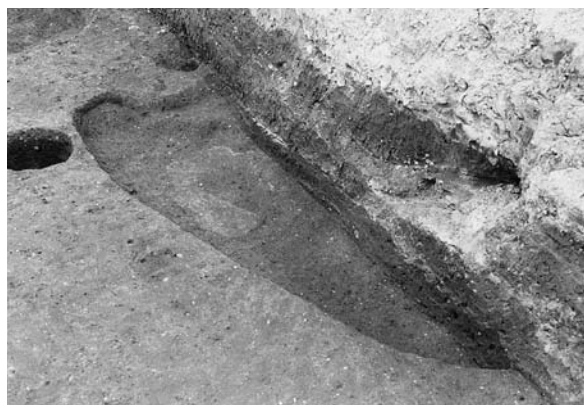
2 掘立柱建物

1号建物 (ST-01)

3号道路の南端、SB-07の北側においては、柱穴3基が南北方向に直列した状態で検出され、掘立柱建物の一部と判断して1号建物と命名した。柱穴は径80cm内外で、検出面から測る深さは50cm程度、柱痕跡は確認されていないが、柱間の間隔は2.0m前後と推定される。柱穴内からの土器等遺物出土は僅少であり、所属年代は未確定であるが、主軸をほぼ南北方位にとっている点から、平安時代の所産となる可能性が高い。



10~12号住居 検出作業



10号住居 検出状況



11・12号住居 検出状況



12号住居 検出状況



12号住居 カマド及び遺物検出状況

3 土坑（井戸状遺構）

検出総数21基（遺物出土のないものは数に入れない）であり、時代別の内訳としては、弥生時代後期～古墳時代前期が1基（9号土坑）、古墳時代後期が1基（1号土坑）、平安時代が11基（2・8・10・13～20号土坑）、中世が4基（4・5・7・11）、時期不明4基（3・6・12・21号土坑）である。なお、径4mを超える大形土坑については、「井戸状遺構」とも呼称する。

1号土坑（SK-01）

2号道路において1号住居と重複して検出された。当初、掘り込みが判然とせず、遺物集中箇所として把握したものであるが、基盤砂礫層中に不整形に掘り込まれた古墳時代後期所属の土坑と判断した。但し堅穴住居の一部である可能性も否定されない。出土遺物は豊富であり、完形土器の集中出土がみられる。

2号土坑（SK-02）

1号土坑に近接して検出されたものであるが、ほとんどが調査範囲外となり、形状は不明である。平安時代土器が集中出土し、同期の堅穴住居の一部となる可能性も示唆される。

4号・5号・7号土坑（SK-04・05・07）

2号道路において、近接した分布を見せる方形土坑で、出土遺物から中世の所産と判断された。全形の明らかな5号土坑は一辺1.5mの方形であることから、4・7号土坑も同形の可能性が高い。直に近い鋭角な深い掘り込みに拠る点で共通しており、4号土坑では覆土の上層に拳大の礫の集積が観察される。



1号土坑 検出状況



1号土坑 遺物検出状況



1号土坑 遺物出土状況



2号土坑 検出状況



2号土坑 遺物出土状況



4号土坑 上層検出状況



4号土坑 下層検出状況



5号土坑 検出状況



7号土坑 検出状況



8号土坑 検出状況



11号土坑 検出状況



13号土坑 検出状況



20号土坑 検出状況

8号土坑 (SK-08)

1号道路西において検出された楕円形土坑で、平安時代の土器出土とともに焼土の堆積が観察される。

11号土坑 (SK-11)

1号道路において検出された長辺2.3mの長方形で、形状から墓坑となる可能性もある。中世の所産。

13号土坑 (SK-13)

1号道路において検出された一辺2.3mの方形で、鋭角的な掘り込みと覆土中に礫が集積される点から、中世所産4号土坑と近似するが、平安時代の所産か。

20号土坑 (SK-20)

5号道路において竪穴住居群の一角で検出された楕円形土坑で、完形の平安時代土師器杯出土を見ている。

井戸状遺構：17号・18号土坑 (SK-17・18)

4号道路において並列状態で検出された断面すり鉢形の大形土坑2基を「井戸状遺構」と呼ぶ。平面形は端整な円形で、径は17号が4.2m、18号が4.5m、検出面から測る深さが1.0mと形態的に近似し、出土遺物が示す年代も平安時代初頭で一致していることから、同じ用途に供された一連の遺構であると考えられる。当初、井戸上面の掘り方ではないかとも考えたが、底面が浅く、地下水位にまでは程遠い状態である。覆土の断面から埋没状態を見ると、砂礫を多く混合した褐色系シルトが互層状に堆積する様子が観察され、人為をもって急速に埋没せしめた可能性も窺われる。なお、土器等遺物の出土が豊富で、合わせて21kgを超える量が出土しており、廃棄と埋没の関係にも注意すべきものがある。

【17号土坑堆積土層】

- 1 - 黒褐色シルト (砂礫混、大礫含)
- 2 - 褐色シルト (砂礫混、大礫含)
- 3 - 褐色シルト (砂礫多混)
- 4 - 黒褐色シルト (砂礫混、炭化物含)
- 5 - 褐色砂質シルト 6 - 黄褐色シルト→砂礫 (基盤層)

【18号土坑堆積土層】

- 1 - 褐色シルト (砂礫混) 2 - 黒褐色シルト (砂礫混)
- 3 - 黒褐色シルト (砂礫多混、大礫含)
- 4 - 褐色砂礫シルト 5 - 黒褐色シルト (砂礫混)
- 6 - 褐色砂質シルト 7 黄褐色シルト→砂礫 (基盤層)



17・18号土坑 (井戸状遺構) 上面検出状況



17・18号土坑 (井戸状遺構) 検出作業



17・18号土坑 (井戸状遺構) 検出状況 (半截)



17・18号土坑 (井戸状遺構) 検出状況 (完掘)



17号土坑（井戸状遺構） 検出状況（断面）



18号土坑（井戸状遺構） 検出状況（断面）

4 溝（方形周溝墓）

検出総数10本を数えるが、方形周溝墓を構成する溝を除いて単独の溝として確実な例に、2号道路のSD-01、1号道路のSD-05・06がある。SD-01は幅員2mの大形の溝で平安時代の所産と判断される。1号道路西におけるSD-04は竪穴住居の一部となるものか。

2号道路におけるSD-02・03及び3号道路におけるSD-07・08・10は、方形周溝墓を構成すると考えた溝である。調査範囲内では攪乱部分も多く、断片的な検出に留まるため、全形を確認できるものではないが、周溝を共有して2基が並列する状況を想定した。

1号周溝墓（SD-02・03・07）

SD-02を北西側、SD-03を北東側、SD-07を南東側の周溝と考え、主軸を南北方位から45度程度傾けた一辺約12mの方形周溝を想定した。溝の幅員は2.5m内外、検出面から測る深さは50cmで、SD-02覆土中層から赤彩壺等（No.1・2）が出土したことから、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にかけて構築された周溝墓と判断するに至った。なお、SD-03覆土中層からも完形土器複数個体が一括出土している（No.1）。同土器は古墳時代中期の所産であり、SD-02出土のそれとは時間的に大きな隔たりを有していることから、掘り込みは未確認ながらも、周溝の埋没後に別途埋納された遺物として、周溝墓とは分離して理解することの方が妥当と思われる。

2号周溝墓（SD-08・10）

SD-08を北東側、SD-10を南東側の周溝と想定した。



1号周溝墓 検出状況（2号道路、北西から）



1号周溝墓 検出状況（2号道路、北東から）



1号・2号周溝墓 検出状況（3号道路、北から）



1号周溝墓 (SD-02) 検出状況



1号周溝墓 (SD-03) 検出状況



1号周溝墓 (SD-02) 土器出土状況



1号周溝墓 (SD-03) 土器出土状況

SD-08は1号周溝墓のSD-07と接続していることから、北西側周溝は1号周溝墓と重複（共有？）関係にある可能性が高い。溝の幅員は2.0～2.5m、検出面から測る深さは40cmで、一辺約13mと推定することができる。出土遺物が示す年代も1号と共通し、連続的に構築された周溝墓群として位置付けることができよう。

5 不明遺構（溝状遺構）

溝状に掘り込まれているが、調査範囲内においては形態が判然とせず性格も不明な遺構を「不明遺構」とし、「溝状遺構」とも呼ぶ。

1号不明遺構（SX-01）

4号道路の西端で検出された幅員12mの大規模な溝状遺構で、検出面から測る深さは70cm、緩やかな掘り込みによるもので、底面は平坦に形成されている。調査範囲内で全形を窺い知ることは困難であるが、地形の傾斜に沿って底面が北から南に傾いている点から、南北方向



1号不明遺構 検出作業



1号不明遺構 検出状況（東から）

に開削された溝である可能性が示唆される。ただし、土層の堆積状態からは、水流を示す痕跡は観察できないため、水路として機能した可能性は低い。出土遺物はきわめて多量であり、平安時代初頭の土器破片が78kg以上出土している。土器破片は、覆土の上層から下層まで、万遍なく包含された状況にあるが、最下層の底面近くにおいては出土量が減少する傾向が認められる。また、土器破片の大多数は須恵器によって占められ、器種的にも蓋と高台杯が多く偏在する状況にあり、その特異な様相は、遺構の性格と絡めて注意すべきところとなる。

【1号不明遺構堆積土層】

- 1 - 黄褐色シルト（氾濫堆積由来の畑耕作土層）
- 2 - 黒褐色シルト（砂礫混、遺物包含層）
- 3 - 灰褐色シルト（砂礫混、遺構覆土上・中層）
- 4 - 黒褐色シルト（砂礫少混、大礫含、遺構覆土下層）
- 5 - 褐色砂礫混合シルト→黄褐色砂礫（基盤層）

2号不明遺構（SX-02）

5号道路の南端で確認した溝状遺構で、試掘坑による確認のみで、全体の掘り下げは実施していない。試掘坑での所見では、底面まで深さは検出面から80cmを測り、掘り込みは鋭角的で、底面は平坦に形成されている。遺物の出土が少ないため時代判定は困難であるが、箱堀に似た形状と立地関係から考えて、中世居館跡「桐原要害」を囲繞する堀の一部分に該当する可能性がある。その当否は、隣接道路用地で平成23年度以降に実施される発掘調査成果によって明らかとなる。

なお、基盤となる黄褐色シルト質粘土は、下層に向かってシルトから細砂に変化し、約1m下で砂礫層へと移行する状況が観察されている。

【2号不明遺構堆積土層】

- 1 - （盛土造成土層）
- 2 - 灰黄色シルト（氾濫堆積由来の畑耕作土層）
- 3 - 褐色シルト（小石・砂混、遺物包含層）
- 4 - （水道管理設坑）
- 5 - 灰黄色砂質シルト（別遺構？）
- 6 - 黒褐色シルト質粘土（小石・砂多混、堀の堆積土層？）
- 7 - 黒褐色シルト質粘土（砂礫多混、堀底堆積土層？）
- 8 - 黄褐色シルト質粘土→シルト→細砂→砂礫（基盤層）



1号不明遺構 断面 堆積土層



2号不明遺構 試掘作業



2号不明遺構 検出状況



2号不明遺構 断面 堆積土層

表1 桐原宮北遺跡 (AKMK) 遺構一覧表

遺構名	記号	路線	時代 (期)	遺 構		出 土 土 器			その他出土遺物 土・石・金属製品他	遺物注記 (整理No)
				形態・施設・規模	備考	重量 (g)	実測	特記		
1号住居	SB-01	2号	平安	方形 (3.0×? m)	SK-01に重複	535	0		骨 (馬 or 牛)	SB01
2号住居	SB-02	1号西	古墳 (後)	方形? 北壁カマド		8,670	9		紡錘車・馬歯・骨片	SB02-1~3、No1~5
3号住居	SB-03	1号西	平安	方形 (3.6×? m) 北壁カマド		1,375	0		凹石	SB03-1、No1~3
4号住居	SB-04	1号	?	方形?		80	0			SB04
5号住居	SB-05	2号	古墳 (後)	方形 (3.4×? m)		1,610	2			SB05-1・2
6号住居	SB-06	3号	平安	方形 (3.5×? m) 北壁カマド		4,840	11	灯明 皿	鉄・石	SB06-1~3
7号住居	SB-07	4号	弥生~古墳	方形 (4.7×4.2m)		6,860	3		ミニチュア	SB07-1~3
8号住居	SB-08	4号	平安	方形 (4.4×? m) 北壁カマド		2,250	2			SB08-1・2
9号住居	SB-09	4号	平安	方形 (4.7×? m) 西南隅カマド?	SK-17が重複	13,340	15	灯明 皿	石・紡錘車	SB09-1~3
10号住居	SB-10	5号	平安	方形? 北壁カマド		530	1		鉄	SB10-1・2
11号住居	SB-11	5号	平安	方形 (3.2×3.5m)		1,160	3		石	SB11-1
12号住居	SB-12	5号	平安	方形 (?×4.7m) 北壁カマド		7,290	12			SB12-1・2、No1~4
1号溝	SD-01	2号	平安?	幅1.9~2.2m 南北方向		140	0			SD01-1・2
2号溝	SD-02	2号	弥生~古墳	幅2.6m前後	3号溝に連続 (1号周溝墓)	1,980	3		馬歯・石	SD02-1~3、No1・2
3号溝	SD-03	2・3 号	弥生~古墳	幅2.7m前後	2・7号溝に連続 (1号周溝墓)	2,710	7			SD03-1~3、No1
4号溝	SD-04	1号西	平安	不整形	堅穴住居?	2,280	1			SD04-1、No1・2
5号溝	SD-05	1号	?	幅0.4m 南北方向		20	0			SD05
6号溝	SD-06	1号	平安	幅0.6m 南北方向		330	0			SD06
7号溝	SD-07	3号	弥生~古墳	幅2.6m前後	3号溝に連続 (1号周溝墓)	1,190	1			SD07
8号溝	SD-08	3号	弥生~古墳	幅2.1m前後	7号溝と重複 (2号周溝墓)	860	1			SD08-1・2
9号溝	SD-09	3号	?	幅0.3~0.6m	周溝墓に付属?	70	0			SD09
10号溝	SD-10	3号	?	幅2.6m前後	8号溝に連続? (2号周溝墓)	25	0			SD10
1号土坑	SK-01	2号	古墳 (後)	不整形 (長辺3.0m以上)	SB-01が重複	10,150	13		馬歯・骨?	SK01-1~5
2号土坑	SK-02	2号	平安	不整形	堅穴住居?	3,685	2			SK02
3号土坑	SK-03	2号	?	楕円形 (長径1.8m)		85	0			SK03
4号土坑	SK-04	2号	中世	方形 (2.5×? m)	上層に集石	410	0		鉄	SK04-1~3

遺構名	記号	路線	時代 (期)	遺 構		出 土 土 器			その他出土遺物 土・石・金属製品他	遺物注記 (整理No)
				形態・施設・規模	備考	重量 (g)	実測	特記		
5号土坑	SK-05	2号	中世	方形 (1.5×1.4m)		105	0			SK05-1・2
6号土坑	SK-06	2号	?	楕円形?		30	0			SK06
7号土坑	SK-07	2号	中世	方形 (1.7×? m)		140	0		炭	SK07
8号土坑	SK-08	1号西	平安	楕円形 (長径1.3m)	焼土集積	640	0			SK08
9号土坑	SK-09	1号	弥生~古墳	?	堅穴住居?	340	0			SK09
10号土坑	SK-10	1号	平安	不整形		20	0			SK10
11号土坑	SK-11	1号	中世	長方形 (0.9×2.3m)	墓坑?	220	0			SK11
12号土坑	SK-12	1号	?	楕円形 (長径1.6m)		10	0			SK12
13号土坑	SK-13	1号	平安	方形 (2.3×? m)	集石	130	0			SK13-1・2
14号土坑	SK-14	4号	平安	不整形		120	0			SK14
15号土坑	SK-15	4号	平安	不整形		170	0			SK15
16号土坑	SK-16	4号	平安	円形 (径0.7m)		140	0			SK16
17号土坑	SK-17	4号	平安	円形 (径4.2m)	井戸状遺構	6,820	5		石・石器	SK17-1・2
18号土坑	SK-18	4号	平安	円形 (径4.5m)	井戸状遺構	14,630	25	墨書	石鏃・鉄・羽口	SK18-1~3
19号土坑	SK-19	4号	平安	不整形 (長辺3.2m)	SB-09に重複	1,750	4	墨書		SK19
20号土坑	SK-20	5号	平安	楕円形 (短径1.0m)		200	1			SK20
21号土坑	SK-21	5号	?	不整形		50	0			SK21
1号建物	ST-01	4号	平安	2×?間 (4.0×? m)		150	0			ST01-P1・2
1号不明 遺構	SX-01	4号	平安	幅12.0m	溝状遺構	78,840	246	特殊	鉄・炭・鉄製品・土 錘	SX01-1~4
2号不明 遺構	SX-02	5号	中世?		溝状遺構 (居館堀跡?)	1,910	1			SX02
1号道路 検出面	1検	1号 1号西				3,145	1		石鏃	1検-1・2
2号道路 検出面	2検	2号				1,445	0		石・北宋銭・鉄滓・ 石製品・黒曜石	2検-1・2
3号道路 検出面	3検	3号				660	0		骨片	3検
4号道路 検出面	4検	4号				2,830	1		硯・炭	4検-1・2
5号道路 検出面	5検	5号				1,300	0			5検
合計						188,270	370			

凡例 特殊：円面硯、双耳杯、稜椀、墨書、篋書

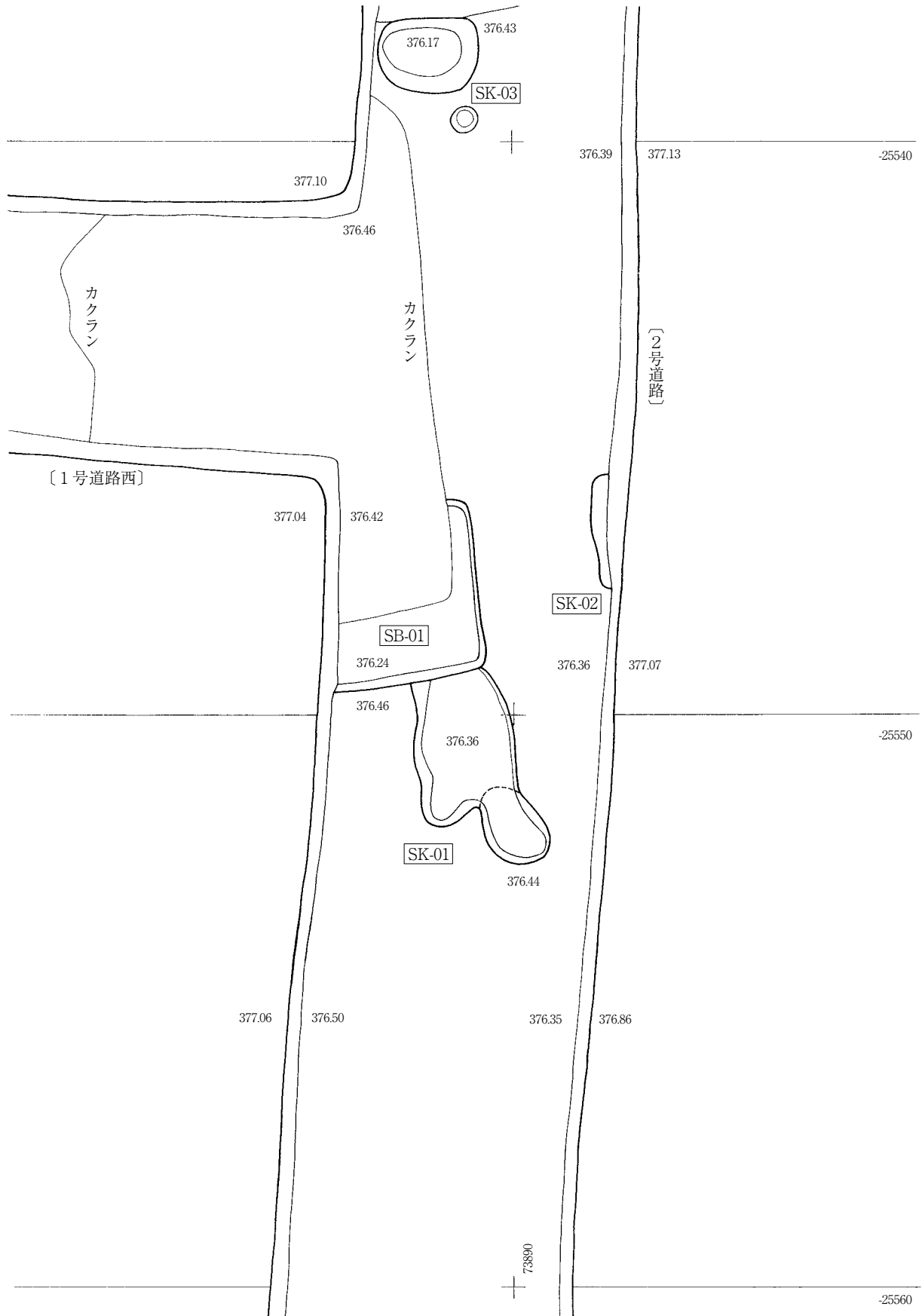


図11 遺構実測図① (1 : 100)

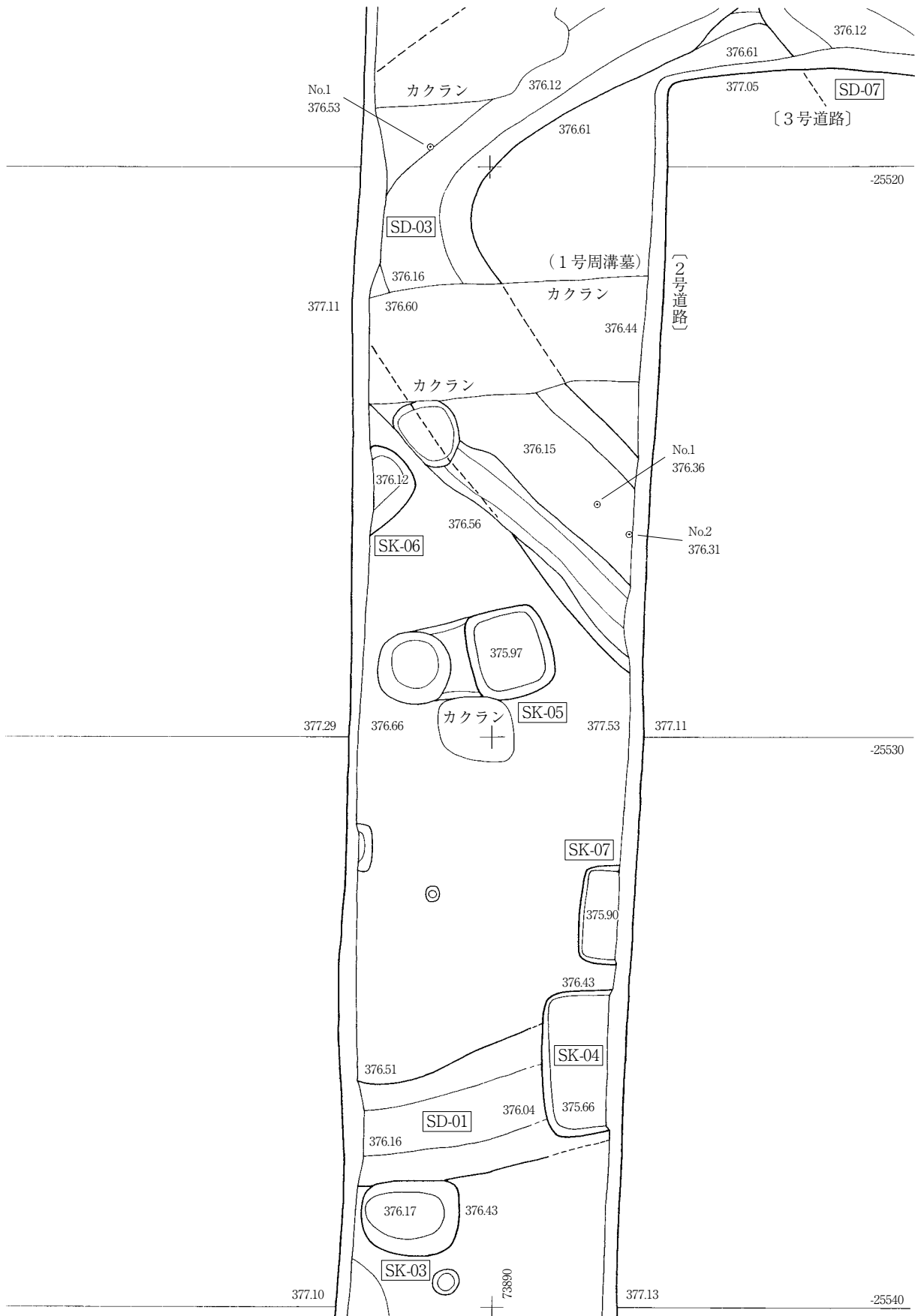


図12 遺構実測図② (1 : 100)

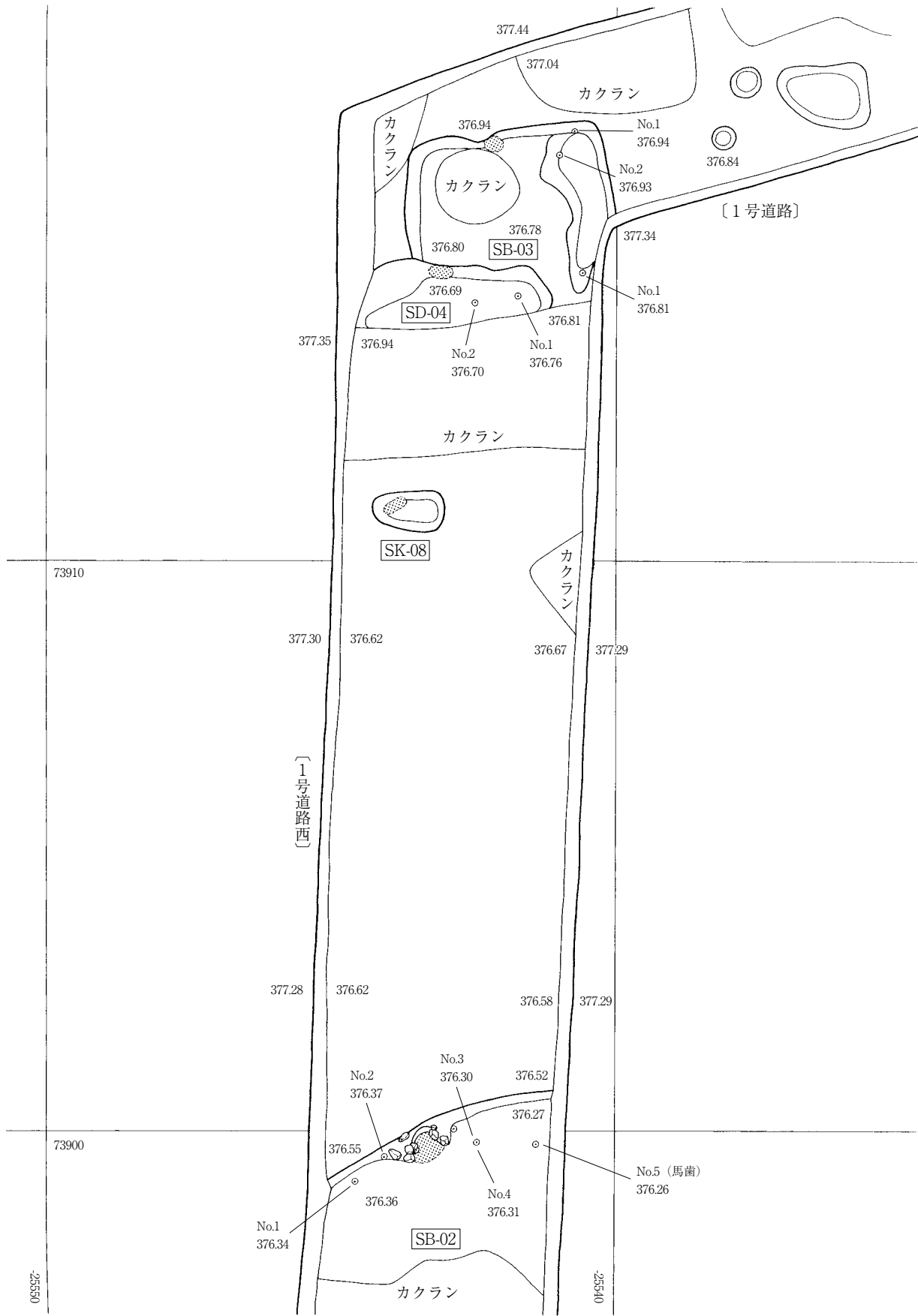


図13 遺構実測図③ (1 : 100)

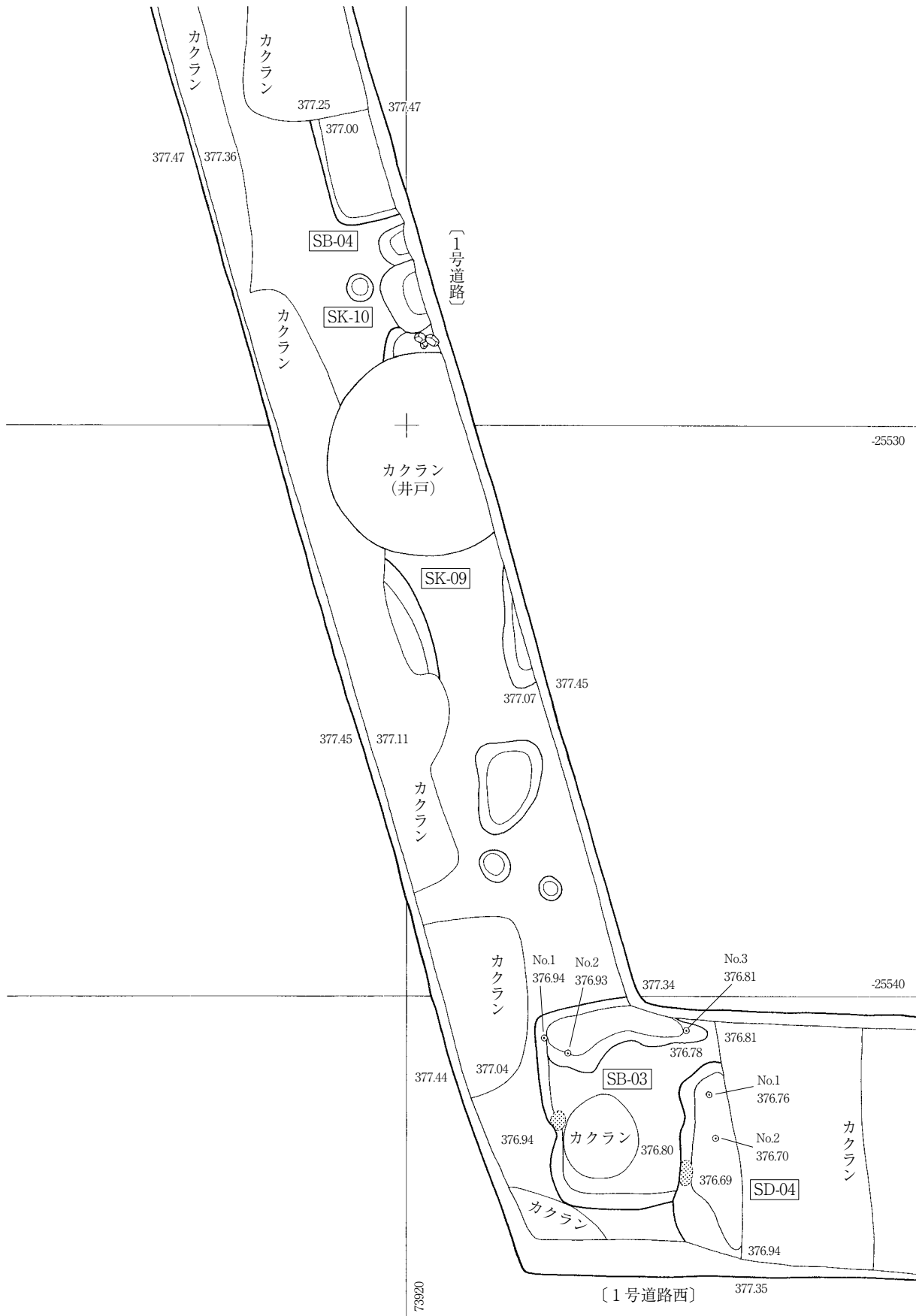


図14 遺構実測図④ (1 : 100)

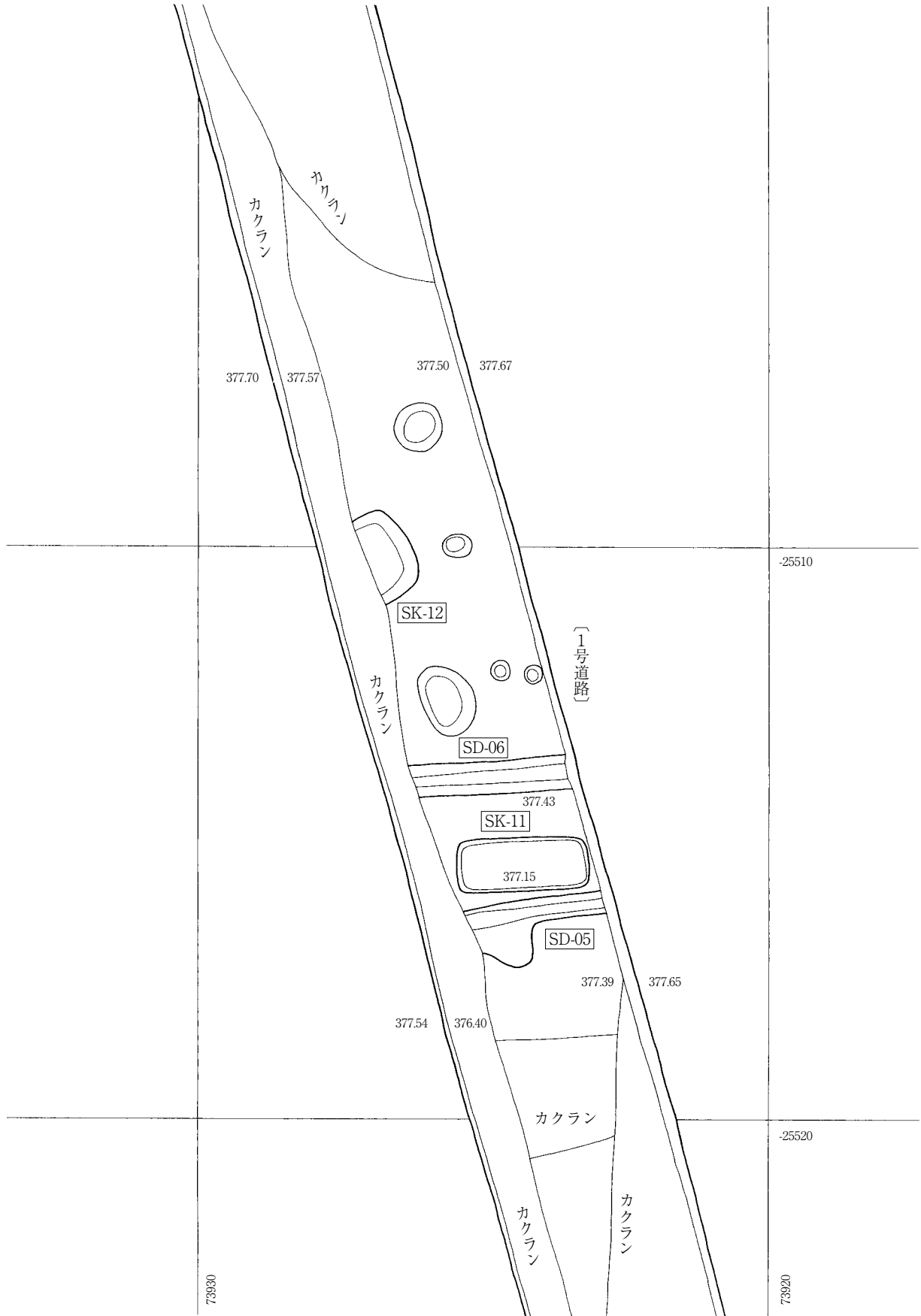


図15 遺構実測図⑤ (1 : 100)

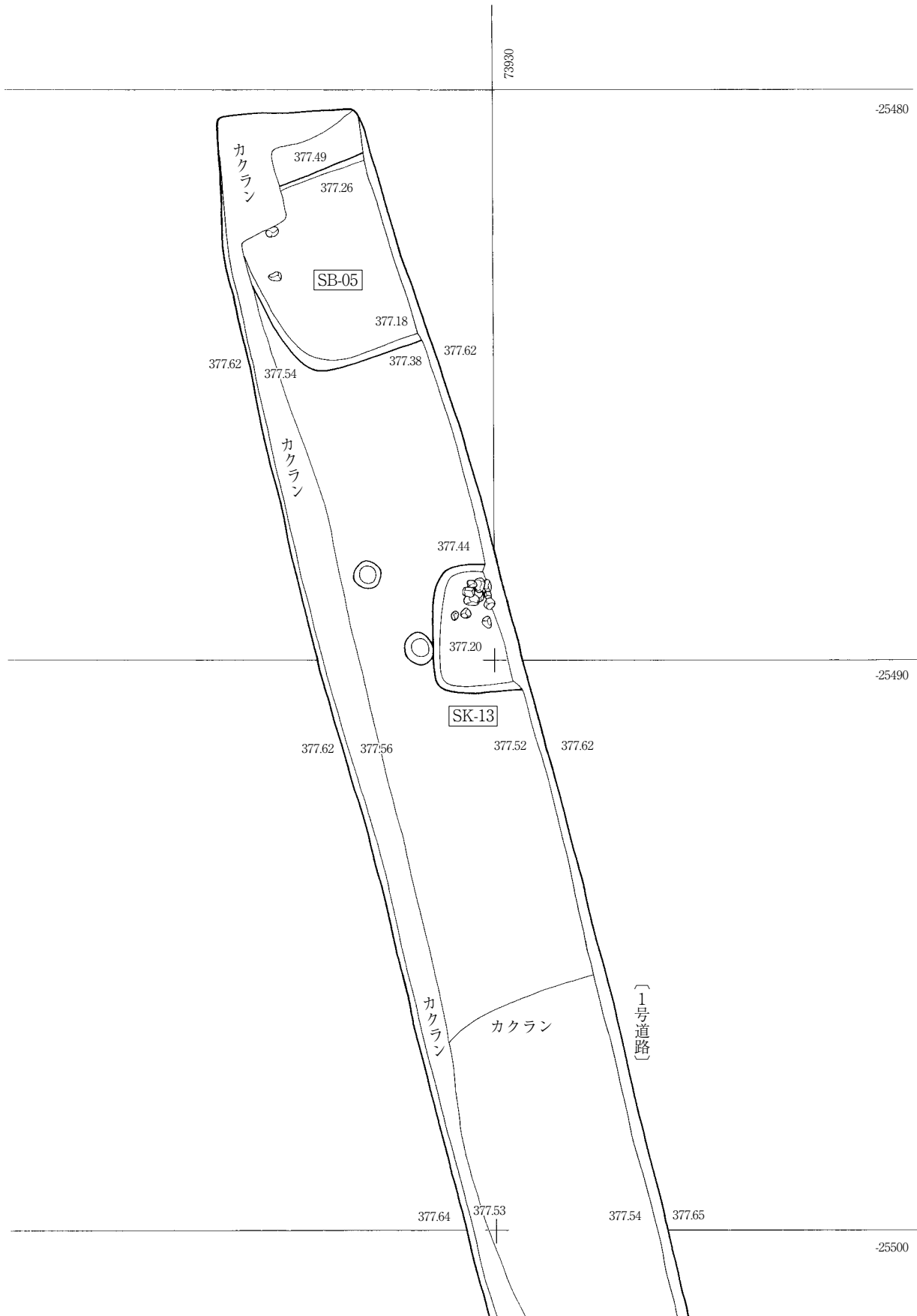


図16 遺構実測図⑥ (1 : 100)

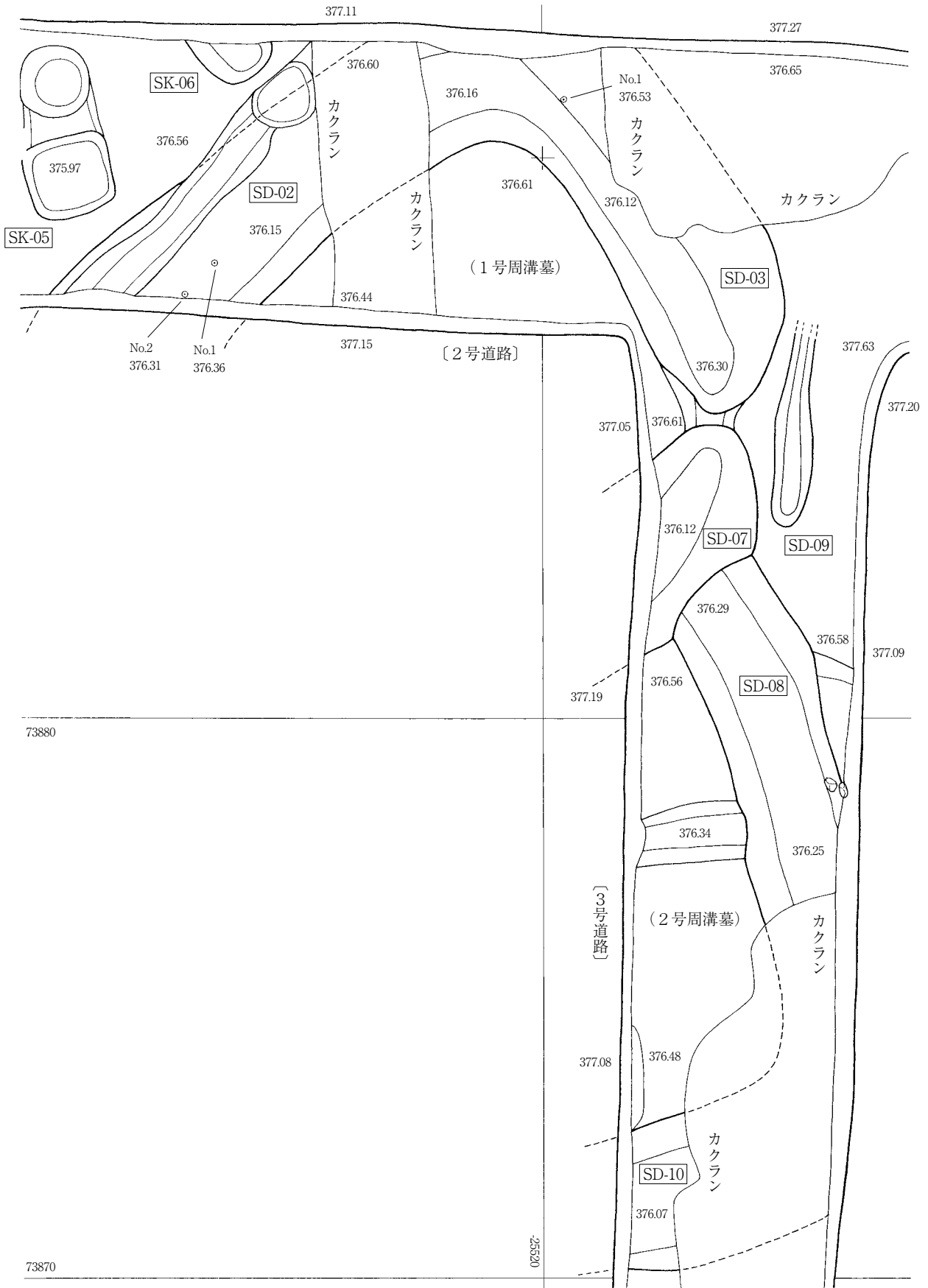


図17 遺構実測図⑦ (1 : 100)

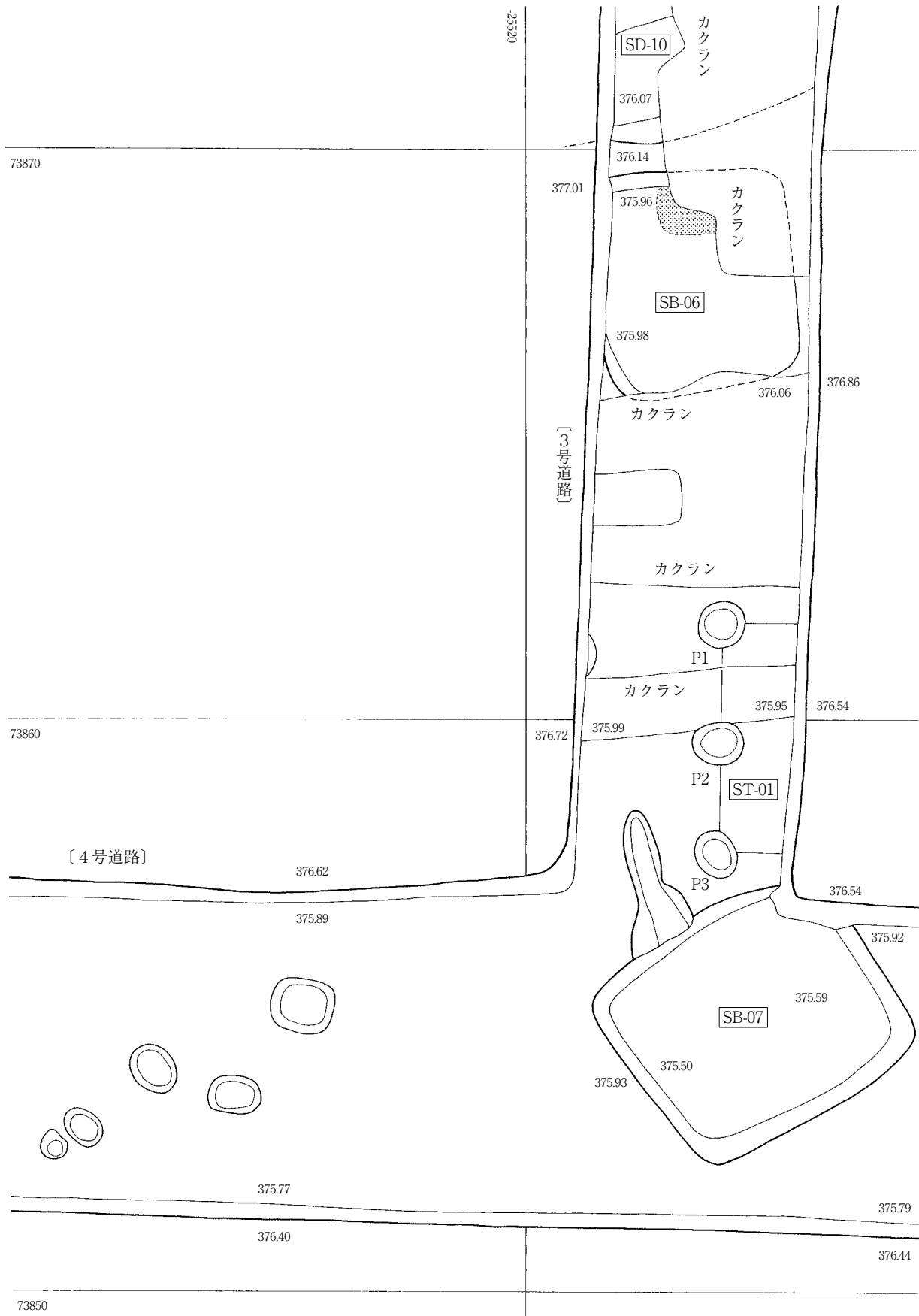


図18 遺構実測図⑧ (1 : 100)

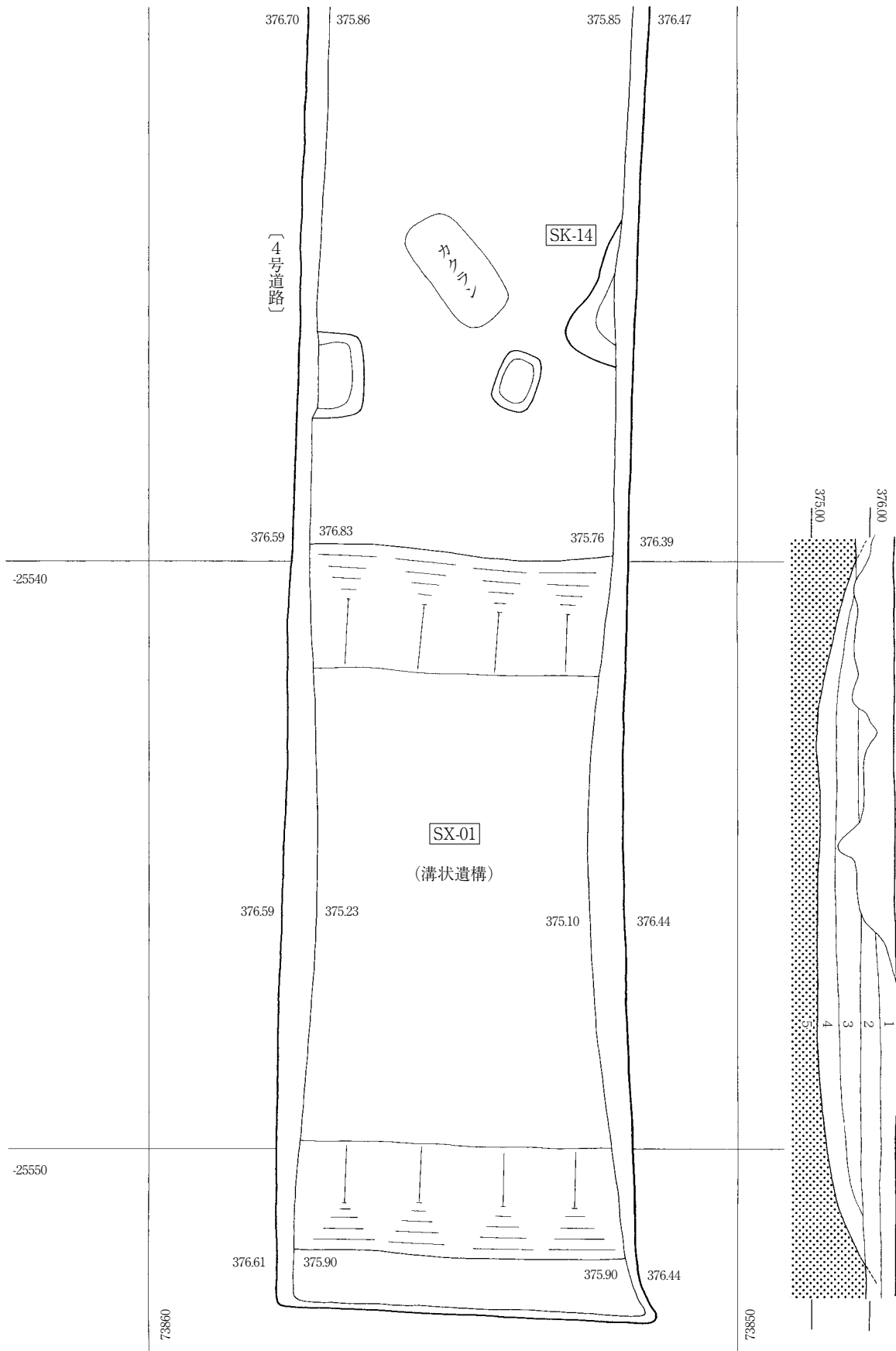


图19 遺構実測図⑨ (1 : 100)

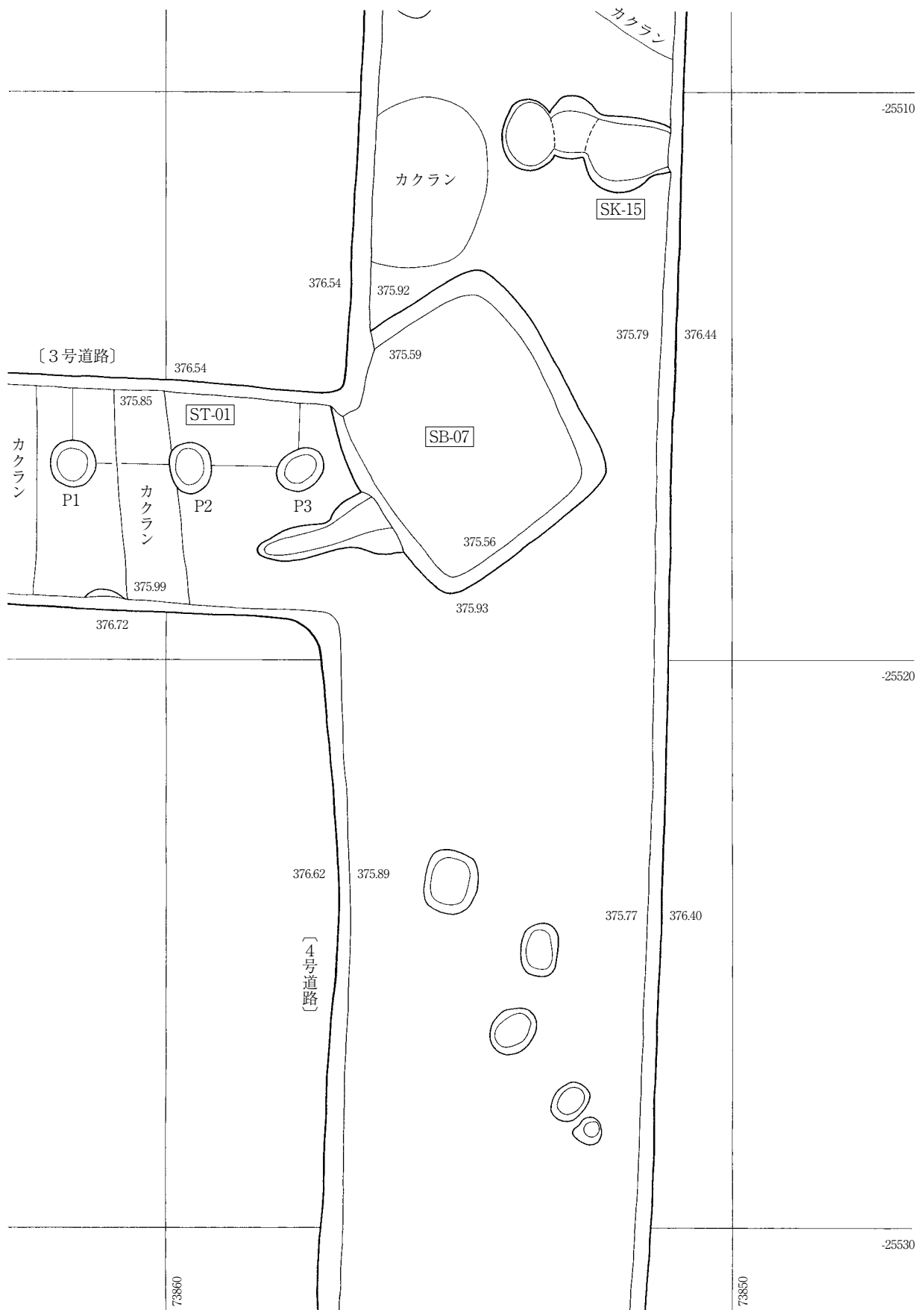


図20 遺構実測図⑩ (1 : 100)

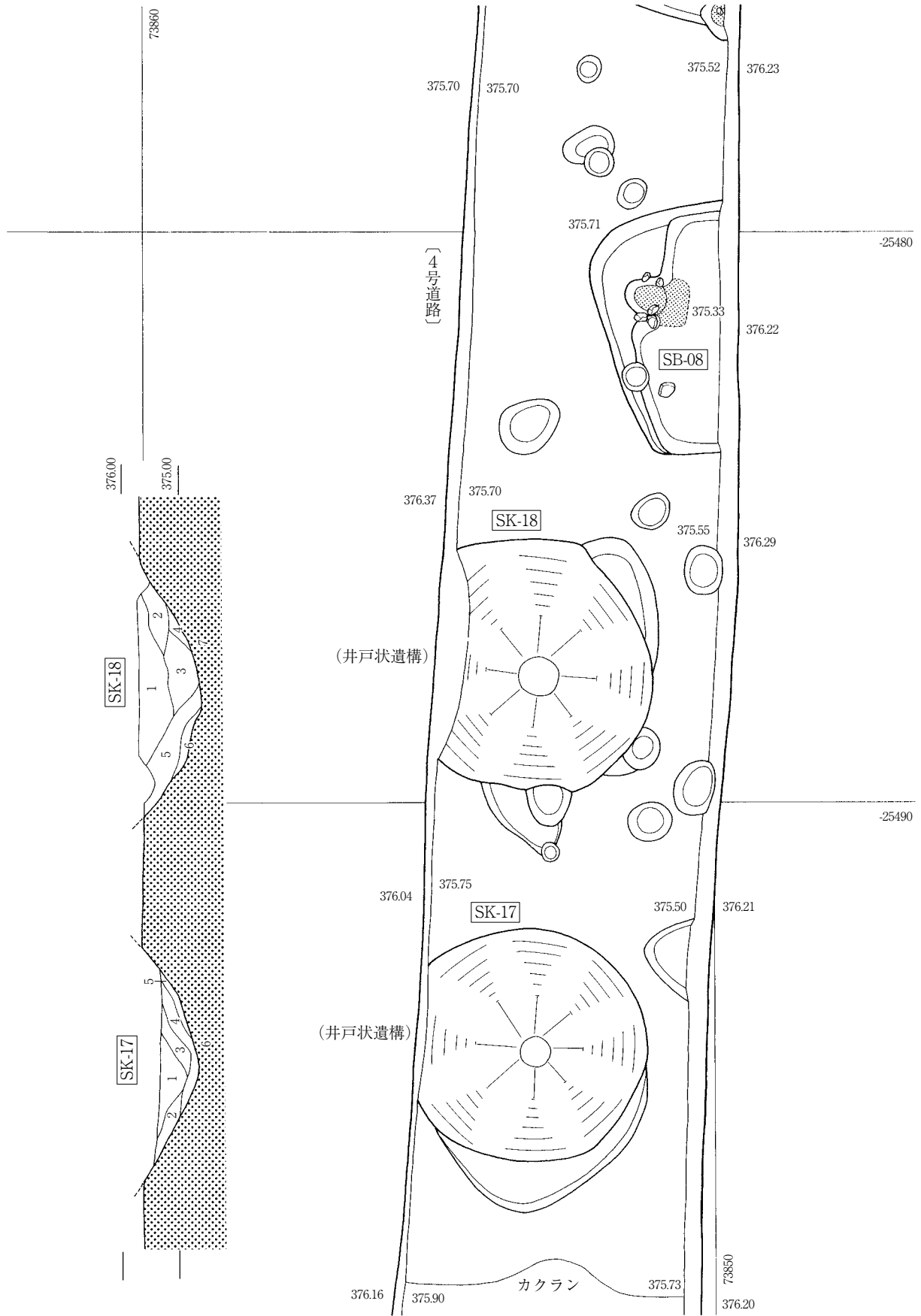


図21 遺構実測図① (1 : 100)

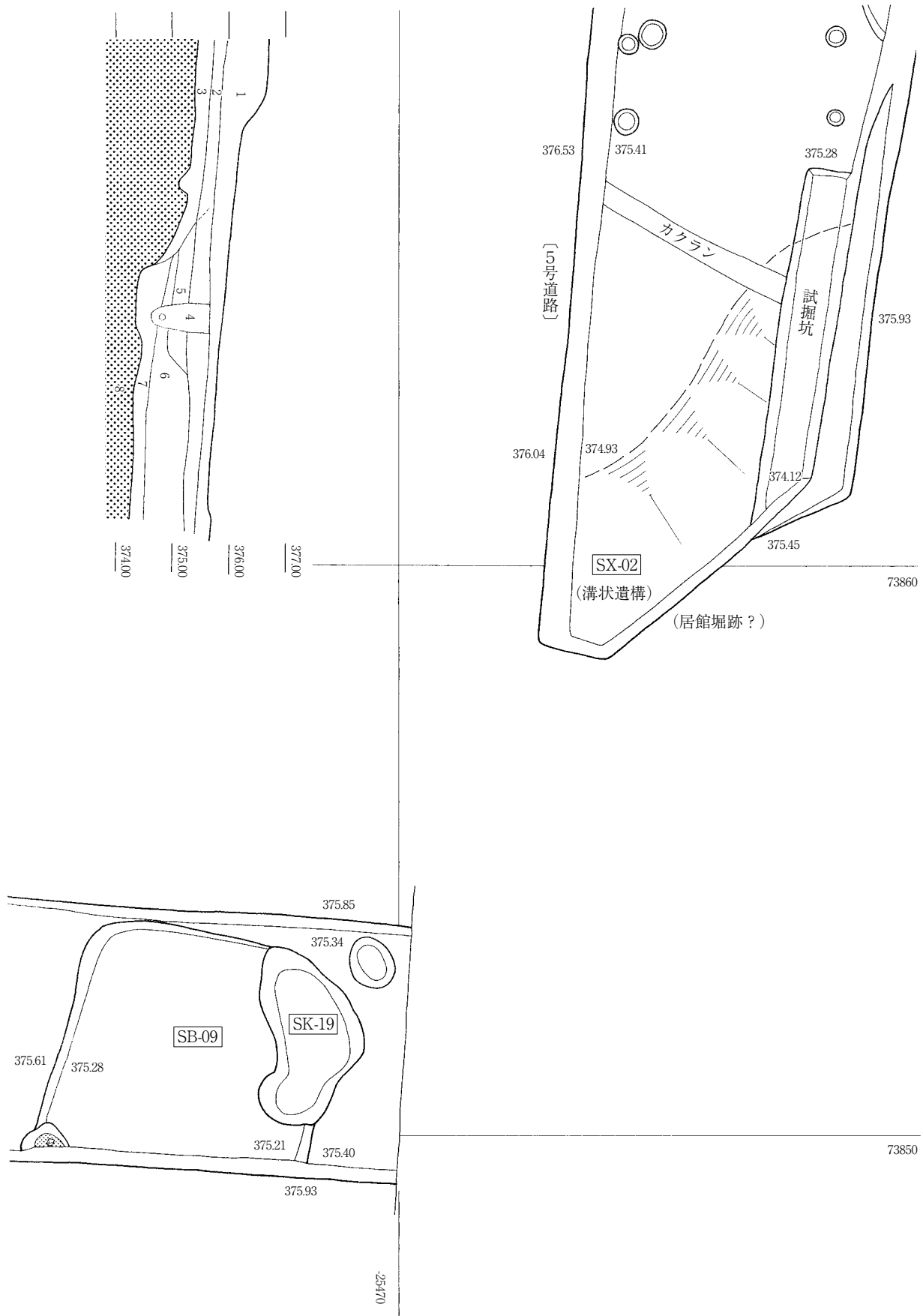


図22 遺構実測図② (1:100)

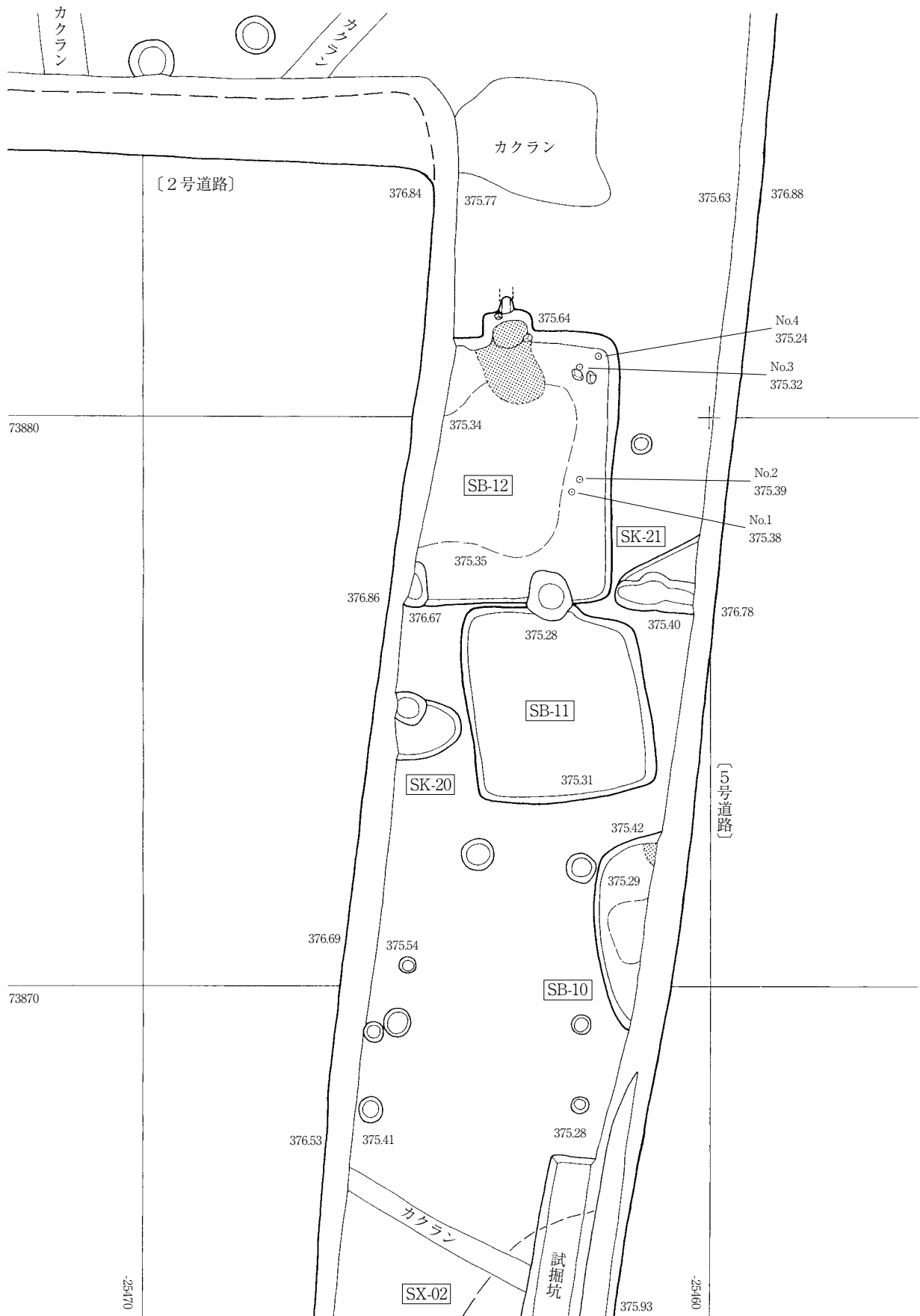


図23 遺構実測図③ (1 : 100)

V 遺物

今回の発掘調査の結果、46の遺構および遺構外から、総重量188,270gにおよぶ遺物が出土した。

そのうち385点については図化を実施し、実測図には通して番号を付すとともに、観察所見を巻末の観察表にまとめた。なお、写真図版中の番号は実測図番号と対応している。図化の基準については各遺物の節で述べる。

1 土器

(1) 概要

出土した土器の総量は188,270gを測る。本遺物を種類ごとに分類したのち、出土した全個体のなかで、口縁部ないしは底部の残存率がおおよそ全周の1/2を超える個体を抽出し、370点について図化を実施した(図27~38)。ただし、円面硯等一部の器種については、その希少性に鑑み、残存率が1/2以下の小片であっても、できうるかぎり復元実測をおこなうことにした。以後、本文中では、図化対象個体の選択行為を「抽出」、図化を実施した個体を「抽出個体」と呼称する。観察結果の詳細は巻末の観察表に記し、残存状況については残存する部位と残存率とを組み合わせ、「底部1/2」というように表記した。以下、時代を追って記述をすすめる。

(2) 弥生時代後期～古墳時代初頭

当該期は遺構そのものが少ない。7号住居と1・2号方形周溝墓が該当する。

7号住居(図28) 出土総量は6,860gを測る。豊富な遺物が出土しているが、図化できたのは、箱清水式の赤彩壺(23)、有段口縁壺(24)、手づくね土器(25)の3点にとどまる。23は口縁端部に山形突起が認められる。肩部には櫛描T字文が施文され、その下部には刺突文が施された円形浮文が貼り付けられている。24は北陸地域からの搬入品である。短い一次口縁部の上に二次口縁を積み上げ、段部を形成している。外面には縦位のハケメ調整のち、やや雑なミガキ調整が、内面にはケズリ調整が施される。弥生時代後期の所産と位置づけられる。

1・2号方形周溝墓(図31) 南西側の周溝(SD-02)の覆土中層より、赤彩壺2点、壺底部片1点、高杯1点がまとまって出土した。109は小型赤彩壺の口縁部片である。やや肩を張った肩部より、外反ぎみの口縁部にいたる。外面にはハケ調整の後、ミガキが施される。110は赤彩壺の底～胴部片である。残存器高13cm程を測り、下半が球胴化している。高杯(111)は末広がりとなる脚部片である。外面には赤彩が施され、3方に円孔が穿たれる。このほか、SD-03の覆土中層より、台付甕の底部1点(118)、SD-07・08より箱清水式の壺2点(120・121)が出土している。いずれも、弥生時代後期末～古墳時代初頭の所産と位置づけられよう。

(3) 古墳時代中・後期

2号住居、1号土坑、1号方形周溝墓が該当する。

2号住居(図27) 抽出個体は須恵器の平瓶1点、土師器の杯1点、鉢2点、甌1点、甕4点で、計9点を数える。このうち、4・5・7・8はカマド東脇からの出土である。平瓶(1)は全体的に粗雑なつくりである。体部は扁平な球状を呈し、肩部に不明瞭ながらカキメが施される。陶邑編年のTK209型式期以降に位置づけられる。2は杯身模倣杯である。底部は球形を呈し、口縁部は屈曲部より内傾しつつ、端部にいたる。6は半球形の体部をなし、口縁端部はわずかに外反する。内面には黒色処理が施される。

1号土坑（図29・30） 抽出個体は杯4点、壺4点、高杯1点、台付鉢1点、甑1点、甕2点で、計13点を数える。土坑北隅より出土しており、完形に近い個体が多い。杯（59～62）は59を除き、内面に黒色処理が施されている。62は杯身模倣杯であり、中位に須恵器の受部を模倣した段を有する。壺（63～66）はいずれも体部が球胴形を呈する。63では、肩部に横位および斜位のヘラケズリ調整が認められる。70と71は長胴甕の口縁部と底部である。接合しないが端部の最大径が近似しており、同一個体の可能性がある。

以上については、器種に時期差があることから、一括性に疑問が残るものの、杯などの形態から古墳時代後期のなかでも前半段階の所産と捉えておく。なお、器種組成に甕や甑といった煮沸具が含まれており、IV章3節でも指摘しているとおり、住居址の可能性はある。

1号方形周溝墓（図32） 北西側の周溝（SD-03）の覆土中層より、高杯と蓋、計5点がまとめて出土した。高杯は脚部が正置した状態で、蓋はいずれも逆位で出土しており、うち2点は高杯に並列するような配置をとっていた。高杯は計2点を数える。116は完形の個体である。脚部はハの字状に広がり、裾部はさらに開く。杯部は底部より水平に開き、内湾する口縁部につながる。口縁部は厚手で、端部に内傾する面をもつ。外面は横位ハケメ調整ののち、縦位の丁寧なミガキ調整が施される。蓋は計3点を数える。いずれもほぼ完形の個体である。113のように屈折部に段を持たず、直線的に口縁端部に至るものと、114・115のように屈折部に段を持ち、わずかに外反しながら口縁端部に至るものとに細分できる。後者については天井部のミガキが不十分で、下に施されたハケメ調整が確認できる。

これらの土器群は陶邑編年のTK47型式併行期に位置づけられるものである。IV章4節でも指摘されているとおり、前述の南西側の一群との間に時間的な隔りがある。

（4）平安時代

6・8・9・10・11・12号住居、2・17・18・19・20号土坑、4号溝、1・2号不明遺構が該当し、本遺跡出土土器の主体をなす。ここでは、主要な遺構について出土土器の具体相を概観したのち、形態および器種組成の変化を指標として、土器群の変遷を整理する。

6号住居（図27） 抽出個体は11点を数える。須恵器は高台杯（12）の1点のみで土師器が主体をなす。土師器のうち13～18・20・22はカマド周辺からの出土である。土師器杯（13～19）は黒色処理を施されるものが半数以上を占める。底部は大半が回転糸切り後未調整であるが、口径が15cmを超える17・18ではケズリ調整が施される。皿（20）は外内面ともに黒色処理が施される。

9号住居（図28） 抽出個体は須恵器の杯（28）、土師器杯（29～37）、高台杯（38）、甕（39～42）で、計15点を数える。このうち36と39については床下からの出土であり、19号土坑に伴う可能性もある。28は須恵器であるが、外形は他の土師器杯と共通する。土師器杯はすべて黒色処理が施され、底部は34・37が回転糸切り後ケズリ調整、そのほかは回転糸切り後未調整である。32・34・35は灯明皿で、口縁部ないしは見こみ部に油脂滓が付着している。甕は39のような小型のものとして41・42のようなケズリ調整を施されるタイプとがある。40は器壁が厚く、器面の調整も粗雑である。外面には輪積痕が確認できる。

8・10号住居（図28・29） 8号住居で土師器杯の底部片（26）と胴部ケズリ調整の長胴甕（27）、10号住居で土師器杯の底部片（43）を抽出した。

11号住居（図29） 須恵器の高台杯、土師器の杯と高台杯を各1点ずつ抽出した。土師器の杯（45）は小型化がすすんだものであり、口径12cm、底径4.2cmを測る。須恵器の高台杯（44）は先述の土師器と同時期に位置づけることには躊躇せざるを得ない。ここでは混入品と判断しておきたい。

12号住居（図29） 須恵器の蓋（47・48）、高台杯（49・50）、杯（51～53）、土師器の杯（54・55）、甕（56～58）、計12点を抽出した。47は口径が18.8cmを測るやや大ぶりの個体である。53には火襷痕が認められる。土師器杯はどちらも底部回転糸切り後ケズリ調整で、内面黒色処理が施される。58は頸基部が直線的に立ちあがり、胴部には横位のケズリ調整が認められる。

17号土坑（図30） 出土総量は6.820gを測るが、抽出できたのは5点である。すべて須恵器で、蓋1点、高台杯2点、杯1点、壺1点を数える。杯（75）は底部篋切り調整である。壺（78）は下半にはケズリによる調整が認められ、内外面ともに施釉される。高台は幅が広く、設置面を外側にもつ。

18号土坑（図31） 出土総量は14,630gにおよび、須恵器、土師器、灰釉陶器を計25点抽出した。大半が食膳具である。須恵器（79～82・96）は蓋2点、杯3点の計5点を数える。96は体部に判読不明の墨書が記される。土師器は杯、高台杯、鉢があり、組成の主体をなす。非黒色処理の杯（83～89・97）は、底部がいずれも回転糸切り後未調整であり、寸法や形態にも大きな違いは認められない。内面黒色処理の杯（90～92・94・95）では、底部は93を除き、回転糸切り後ケズリ調整である。いずれも焼成が甘い。

灰釉陶器は計3点を数える。高台碗（101）は、口縁端部がわずかに外反する。高台はわずかに外傾し、接地面を外側にもつ。瓶（102）は体部中位に最大径をもち、高台は扁平でやや強く外に開く。肩部から体部下半にかけて、刷毛塗りで施釉される。皿（103）は内面に刷毛塗りで施釉される。高台は角高台で、わずかに内傾する。底面には「文」とみられる墨書が記される。

19号土坑（図31） 4点を抽出した。須恵器の杯（104）は体部に判読不明の墨書が記される。土師器杯（105～107）はすべて回転糸切り後未調整である。106は焼成が甘く、見込み部はわずかに突出する。

2・20号土坑（図30・31） 2号土坑より甕2点（72・73）、20号土坑より土師器杯1点（108）がそれぞれ出土した。108は口縁部が歪んでおり、平面形が楕円形を呈する。

4号溝（図32） 円筒形土製品1点を抽出した（119）。外面には縦位のハケメ調整が施され、底部付近には格子タタキ痕が確認される。内面には外傾する輪積痕が多数認められる。

1号不明遺構（図32～38） 出土総量は78,840gにもおよび、須恵器、土師器、弥生土器、計246点を抽出した。須恵器が全体の92%を占めており、しかもそのほとんどが食膳具である。多量の出土が認められた須恵器については3節で詳述することにし、ここでは土師器、弥生土器について概観する。土師器は杯、高台杯、甕、鉢からなる。いずれも上、中層からの出土である。杯（350～356）、高台杯（357）はほとんどが底部片である。いずれも内面黒色処理が施されており、350・355では底部にケズリ調整が施される。甕（358～366）のうち、358～363には、底部にケズリ調整が施される。弥生土器については混入品と考えられる箱清水式の壺底部片1点を抽出した（367）。

土器変遷の諸段階 以上の観察所見をふまえ、本遺跡における平安時代の土器の変遷を検討してみる。

信濃における古代の土器については原明芳、鳥羽英継らによって整理がなされており、食膳具については①須恵器→黒色土器（内面黒色処理が施された土師器）→土師器という組成における主要器種の交代、②黒色土器における底部回転糸切り後ケズリ調整から未調整への変化、③土師器の口径、底径の縮小化等が明らかにされている（原1989、鳥羽1999等）。本項ではこれらの研究成果に照らし合わせながら、食膳具における須恵器比率や底部調整の有無、口径値や底径値の変化をメルクマールとして、土器群の変遷過程を以下の3段階に整理する。

なお、17号土坑のように、出土総量と抽出遺物量との乖離が著しい事例もあり、抽出遺物にバイアスが生じている可能性がある。このような制約が存在することを認めた上で、「抽出遺物がおおむね組成を示す」という前提に立って検討をすすめる。

- i 段階：12号住居が該当する。須恵器が食膳具の主体をなす。無台杯は逆台形を呈し、土師器杯は回転糸切り後ケズリ調整が施される個体が多数を占める。1号不明遺構の土器群もこの段階に位置づけられよう。
- ii 段階：6・8・9号住居が該当する。食膳具の組成は黒色土器主体に変化する。底部は回転糸切り後未調整の個体が多数を占める。須恵器の杯は体部の傾斜が大きくなり、土師器杯に類似した形状に変化する。
- iii 段階：11号住居・20号土坑が該当する。食膳具は土師器主体に転換し、小形化がすすむ。土師器は口径が12cm前後に集中している。

実年代については、本遺跡の遺構からは紀年銘資料は出土しておらず、18号土坑より出土している灰釉陶器も、廃棄土坑という遺構の性格上、年代の指標とするのは難しい。ここでは屋代編年（鳥羽1999）の実年代観を参考に、おおむね i 段階を9世紀前葉、ii 段階を9世紀後葉、iii 段階を10世紀前葉に比定しておく。

18号土坑出土の土器群については、下層より出土した灰釉陶器は三日月高台出現以前のものであり、猿投編年の黒笹14号窯式（9世代中頃）に位置づけられる。一方で、iii 段階において主体をなす土師器杯も一定量出土している。当該遺構の土器群は半世紀程度の時間幅を含む点に留意しておきたい。17号土坑の土器群については、抽出された個体はすべて須恵器であり、高台杯と底部篋切り調整の杯を含むことから18号土坑よりも古相を示す。

ただ、総量に対する抽出個体数が僅少であることから、時期の特定には慎重であるべきであると考えられる。本遺構については、さしあたって前章で得られた所見のとおり、ほぼ同時期の所産と位置づけておくのが妥当である。

（5）墨書・篋書

墨書23点、篋書8点を確認し、図38に一括して提示した。それぞれの定義を以下の通り示しておく。

墨書：体部ないしは底部に文字や線を墨書するもの。

篋書：焼成前に篋状の工具等を用いて、体部ないしは底部に文字や線を墨書するもの。

墨書 18・19号土坑、1号不明遺構より出土し、計23点を数える。大半が1号不明遺構からの出土であり、全体の8割強を占める。灰釉陶器である103を除いて、すべて須恵器であり、ほとんどの個体が底面に記される。

なお、側面に記された個体については、実測図の上部に展開図を示しておいた。

認識できた文字・記号は以下のとおりである。

- i) 文字 「元」 230・290・291・294・297・298
「大」 139・220・231・286・296
「二」 295・(299)
「文」 103

- ii) 記号 「△」 138・228・229・289・293

全体的に墨痕が薄く、判読が困難なものが多い。96・104・199・292は判読不能であるが、そのうち、96と104については文字の可能性はある。また「二」とした299は「元」である可能性がある。記号とした138～293は筆跡からその天地を判断したものである。逆心葉形といえる形状をなし、もともと何らかの文字であったものが記号化した可能性が高い。

篋書 計8点を数える。356を除き、須恵器の杯に記されている。文字が書かれたものは「中」(287)の1点のみで、そのほかはすべて記号である。「×」(238・356)と「二」(279)が明確に記号として判別できる。

（6）灯明皿

器面に油脂滓や煤の付着が認められるもの4点を灯明皿として提示する（13・32・34・38・286・287）。

2 その他の遺物

(1) 土製品

残存状態が良好で、機能や用途が明らかなものを中心に、8点の図化を実施した（図39）。

紡錘車（371） 2号住居の覆土中より1点出土しており、半分が欠損している。色調は淡褐色で、焼成は甘い。

土 錘（372～374） 9号住居の覆土中と1号不明遺構の上・中層中より3点出土した。いずれも不定な紡錘形を呈する。372・373は表面ナデ調整によって仕上げられ、端部にケズリ調整が施される。374はケズリ調整によって表面に面取りが施される。

不明脚部片（375） 1号不明遺構の下層より出土した。残存長6.3cmを測る。片側に接合面が認められ、わずかに内湾している。よって、この接合面は底部に接合する可能性が高いと考え、脚部片と判断した。

鞆羽口（376～378） いずれも18号土坑の覆土中より3点出土している。376は残存長9.3cm、最大径7.2cm、最大孔径2.1cmを測る。端部にはガラス化した溶解物が付着している。

(2) 石製品

総重量は7,344gを測る。機能や用途が明らかなものを石製品として抽出し、硯のみ図化を実施した（図39）。

石 鏃（379・380 写真掲載） 有茎式の石鏃が2点出土した。379は1区検出面より出土したもので、珪質頁岩製である。380は18号土坑から出土したもので、黒曜石製である。先端部と基部が欠損している。

打製石斧（381 写真掲載） 頁岩製の打製石斧1点が2区検出面より出土した。

凹 石（382・383 写真掲載） 3号住居南東側の床面より2点出土した。石臼と推定されるもので、いずれも安山岩製である。382は楕円形に整えられ、全面に加工痕が認められる。383は三角形に近い形状を呈し、背面にも浅い孔を持つ。

硯（384） 4区の検出面から1点が出土した。頁岩製であり、表面には海部を中心に数カ所に墨痕が残る。背面には鑿のような工具を用いたとみられる加工痕や線条痕が明瞭に確認できる。中世の所産と推定される。

(3) 鉄・銅製品

総重量は87.9gを測る。用途が明らかなものを中心に4点を図化し、銭貨については採拓を実施した（図39）。

刀 子（385・386） 2点出土しており、どちらも破片である。385は茎部から刃部にかけての破片であり、1号不明遺構の覆土上層からの出土である。残存長は11.7cmを測る。棟側に角閔をもち、茎部は幅を減じながら茎尻に至る。386は茎部片である。10号住居の覆土からの出土であり、混入品の可能性もある。茎部は幅を減じることなく茎尻に至る。茎部中央の茎尻寄りには目釘孔が確認できるが、銹化のため判然としない。

紡錘車（387） 1号不明遺構の覆土上層より出土した。残存長5.7cm、残存幅2cmを測る。外形が弧を描くことから紡錘車の一部と判断したものであるが、やや薄手であることや、弧が緩いなど疑問点も残る。

手 鎌（388） 18号土坑の覆土中より出土した。長辺の一方に刃部を持つ点や、短辺の両端が上方に折り曲げられている点より手鎌と判断したものである。残存長3.1cm、残存幅5.7cmを測る。

銭 貨（389） 2区の検出面より北宋銭である元祐通寶が一枚出土している。径は2.4cm、重量は3.7gを測る。元祐通寶の初鑄は1086年であり、平安時代後半以降に比定される。

(4) その他

鉄 滓 (390・391) 18号土坑の覆土中より2点出土した。合わせて225.9gを測る。弱い磁着を示す。

獣 骨 (392 写真掲載) 1・2号住居より、馬・牛骨とみられる小骨片、2号住居・2号溝・1号土坑より馬歯が出土しており、総重量は716.9gを測る。そのうち、切歯と臼歯がひと揃いで出土している2号住居の馬歯については、写真を掲載した(392)。なお、切歯については取り上げ後の破損が激しく、ほとんど原型をとどめないような状況であったので、臼歯のみの掲載とした。臼歯は左下顎第2～第4前臼歯・第1～第2後臼歯が残存しており、残存臼歯列長は12.6cmを測る。再奥の第4後臼歯は現場においても確認し得ていないが、切歯や臼歯とともに小骨(歯)片を一括で取りあげており、これが第4後臼歯の一部に該当する可能性がある。

3 1号不明遺構出土の須恵器

(1) 概要

概要 1号不明遺構からは78,840gにおよぶ土器が出土している。このうち須恵器の重量は61,379gを測り、同遺構出土土器全体の78%を占める。また、抽出個体数は228点を数え、全体の実に92%を占める計算となる。内訳は摘蓋73点、高台杯69点、杯72点、高杯・盤4点、稜碗2点、双耳杯3点、円面硯1点、壺1点、香炉1点・不明脚部・口縁部片2点で、圧倒的に食膳具の比率が高い。

出土状況 IV章で述べられているとおり、本遺構は検出面より上層、中層、下層の3層に分層される。そのうち中層からの出土は80点(24,820g)、下層からの出土は94点(27,910g)で、出土点数では、中層～下層からの出土が全体の76%を占める。なお、層位による器種の偏在はとくに認められなかった。

(2) 食膳具

摘蓋、高台杯、杯(無台杯)の3種類からなり、抽出個体数(重量)は214点(35,344g)である。以下では、各々の器種について細部の属性に着目した分類を実施し、「細別器種」を設定する。

摘 蓋 (図32～33) より正確な出土点数を把握するため、遺存状況にかかわらず、摘の付いたものはすべて図化の対象とした。ここでは寸法と摘の形状に着目し、分析をすすめる。

図24に口縁端部まで残存している個体における口径および器高値を示す。口径は16cmを挟んで2つの法量のまとまりが認められるほか、24cmを超えるものが1点あり、計3タイプに細分される。一方、摘は形状から扁平、宝珠、環状の3タイプに分類しうる。なお、扁平であっても中央部に明瞭なくぼみをもたないものについては宝珠摘に区分している。

ここで、寸法との関係のみをみると、扁平摘をもつものは口径12～14cmを測るものがほとんどであり、宝珠摘をもつものはすべて16cm以上を測る。口縁端部まで遺存している個体は高台杯全体の38%であり、統計的な信頼性に若干問題を残すものの、摘形と寸法の間には一定の相関関係を認めてよいだろう。

以上の分析結果に基づき、以下の3タイプに細分する。

杯蓋A：口径が16cm以下のもの。扁平摘をもつ。 122～139

杯蓋B：口径が16cm～20cmのもの。宝珠摘が主体。 140～148

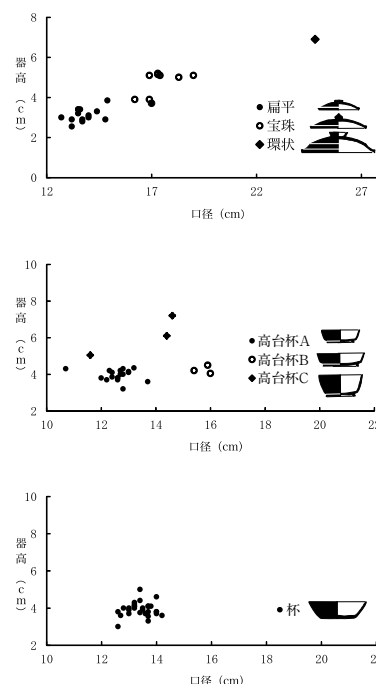


図24 食膳具における寸法の分布

杯蓋C：口径が24cm以上のもの。環状摘をもつ。149

先述の相関関係が確かであれば、150～170・178・179・181・183・185～194は杯蓋aに、171～177・180・182・184は杯蓋bに分類できる可能性がある。口径部は強弱の差はあれ、端部を内側に折り込むタイプが主体をなす。

高台杯（図34・35） 抽出個体数は69点を数える。口径および器高より以下の3タイプに細分される（図24）。

高台杯A：口径が14cm以下のもの。 195～212・228

高台杯B：口径が15cm以上のもの。 213～216

高台杯C：器高が5cm以上のもの。 217～220

寸法より勘案すると、高台杯Aは杯蓋Aと、高台杯Bは杯蓋Bとそれぞれセットになるものと推定される。高台杯Aは2cm程の口径差があるが、器高との関係から勘案するならば、個体差の範囲に収まるものとみてよいだろう。221～227・229は杯部の遺存度が高く、口径が推定できる個体である。いずれも高台杯Aに分類しうる。230～263は高台部片であり、基本的に高台径の小さい順に配置してある。口径と高台径の間には一定の相関が認められるから、とくに径の大きい262や263については高台杯Bに分類できる可能性が高い。底部は平底がほとんどであるが、226や208のように底面が突出する、「個体」もわずかに存在する（208・226）。

杯（図35～37） 抽出個体数は72点を数える。墨書されている個体を除き、底径の小さい順に配置してある（264～287・300～335）。図24に示すように、口径差、器高差はともに2cm程であり、個体差の範囲に収まるものとみてよい。一方、底径についてみると3.8cm～8cmと幅があり、6cmを超える個体が全体の88%を占める。底径については、時期が下るにしたがって縮小化がすすみ、体部の傾斜が大きくなることが明らかになっており（鳥羽2000ほか）、寸法を基準とした分類も可能である。ただ、6cm以下の個体はほとんどが底部片であり、全体の器形を把握し得ないことから、今回は細別分類を実施しない。底部については回転糸切り調整が主体であるが、篋切り調整のものもわずかながら確認できる（290・298・300）。

編年的位置 当該遺構出土の食膳具は、底部回転糸切り調整杯と高台杯の組み合わせが主体を占めており、平安時代古期の基本的組成を示す。その一方で、底部篋切り調整の杯がわずかにふくまれている。屋代編年では、底部篋切り調整の杯は3・4期（8世紀中葉～後葉）をもって消滅することが指摘されている（鳥羽1999）。このように一部古相を示す個体が認められる点を加味し、総体として、平安時代初頭（9世紀初頭）と中心とした時期の所産ととらえておく。

器種組成と出土量 食膳具における器種個体数の割合を図25に示す。遺構の全貌が明らかになっていないため、厳密な意味での組成を示すものではないものの、それでも一定の傾向をみることができよう。3つの器種は、それぞれ蓋35%、高台杯32%、杯33%と、ほぼ同じ比率を示す。さらに前述の細別分類の結果をあわせると、全器種あわせて7種類に細分される。そのうち寸法から杯蓋2種と高台杯2種は対応するから、実際には高台杯3種、杯1種ということになる。この数は、県内で須恵器が比較的多く出土している千曲市屋代、松本市下神、塩尻市吉田川西、佐久市聖原の各遺跡と比較しても大きな違いはない。該期は法量の分化が進む時期であり、単に細別器種組成に関して言うならば、この時期の集落における土器様相の範疇で理解できるものといえる。

一方、214点（35,344g）という抽出点数（重量）は須恵器が食膳具の主座を占める時期とはいえ、一遺構からの出土量としては異常と言わざるをえない。寸法に一定度のまとまりが認められる点や、大きな時期差が認められない点は、使用から投棄まで、さほど間がなかったことを示唆しているといえよう。

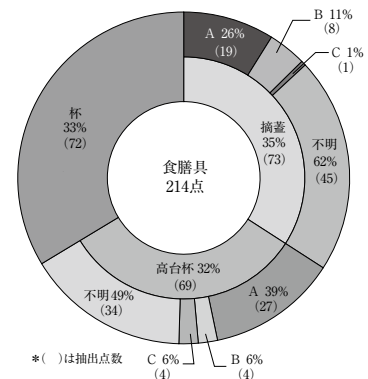


図25 食膳具における各器種の割合

(3) その他の器種

高杯・盤(336~339)、円面硯(345)、双耳杯(342~344)、稜椀(340・341)、壺(349)、香炉(348)、不明器種(346・347)、計13点を数える。このうち、円面硯、双耳杯、稜椀については一般的な集落からの出土は稀であることから、「特殊遺物」として区分し、記述をすすめる。

稜 椀(340・341) 口縁部片と底部片2点が出土している。両者とも内面に屈

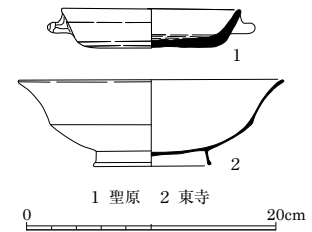


図26 双耳杯と銅椀(S=1/6)

曲が認められる。340は341に比べて厚手のつくりで、高台の剥離痕が認められる。稜椀については、須恵器の類例を松本市上ノ山窯址群で1点確認しているほか、灰釉・緑釉陶器の稜を椀や皿が長野市南宮遺跡や塩尻市吉田川西遺跡で出土している。東寺には体部中央に稜をもつ金銅大椀・椀が伝わっており(図26-2、久保1999)、稜椀はこのような佐波理椀を指向して製作された仏具と考えられる。

双耳杯(342~344) 口縁部~耳部の小片3点が出土している。342は他の2点よりも口縁部の遺存度がやや良好であったため、反転実測を実施したものである。口径についてはさらに大きくなる可能性がある。耳部は口縁部の上位に、若干上を向くようなかたちで貼付けられている。いずれも板状で、平面台形を呈し、側面には篋削り調整が施されている。東国出土の双耳杯については神谷佳明によって総合的な検討が行われている(神谷2010)。神谷の集成によると出土例は50遺跡・135点を数え、須恵器の生産地を除くと、多くが官衙遺跡ないしはそれに準ずる遺跡、寺院に出土が集中する傾向がみられるという。長野県内では佐久市聖原遺跡H499号住居址(図26-1)や松本市下神遺跡、松本市芥子坊主山窯址群などで類例が認められる。

円面硯(345) 圈足円面硯の圈底部片3点が出土している。うち2点は接合し、残る1点についても、透孔長や色調、器壁の厚さなどから同一個体と判断した。接合した2点は透孔部分であったため、透孔の幅と脚径との位置関係を考慮し、最終的に二窓一對の四方透かしに復元した。脚径20cm、残存高5.5cmを測り、透孔の上下には2本の沈線が充填される。

(4) 出土須恵器の性格

以上の整理をふまえ、出土須恵器の性格について考えてみる。さきに述べたとおり、食膳具については卓越する出土量が注目される。また、土師器も含めた全体的な組成をみると、煮沸具が見当たらないなど、器種に偏在性が認められる。これらの特徴から本遺構の須恵器群は、一般的な集落とは異なる使用状況が想起される。加えて、文書実務との関わりが示唆される円面硯や、律令祭祀具との関連が想定される双耳杯、仏具である稜椀といった一般的な集落での使用が想定しにくい「特殊遺物」もわずかながら認められる。以上を考えあわせるならば、本遺構の土器群は近隣に官衙的な施設が存在し、そこにおいて用いられたものが、一括して廃棄されたと考えるのが最も蓋然性が高いといえる。

遺構の全貌が明らかになっていないなど、残された課題は少なくないが、一遺構からの事例としては長野市内では類をみない出土量であり、本例は消費地における良好な基礎資料と位置づけられよう。

参考文献・挿図出典

神谷佳明 2010「双耳杯について—東日本における分布・変遷、用途についての検討」『研究紀要』28(財)群馬県埋蔵文化財事業団、久保智康 1999「東寺伝来の金銅製供養具—平安時代前期土器の形態と機能に関連して—」『瓦衣千年—森郁夫先生還暦記念論文集—』、鳥羽英継 2000「善光寺平南縁の古墳時代前期~古代の土器編年」『更埴条理遺跡・屋代遺跡群 総論編』(財)長野県埋蔵文化財センター、原 明芳 1993「吉田川西遺跡における食器の変容」『吉田川西遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター、佐久市教育委員会 2003『聖原』第2分冊、挿図出典：図13-1・2は佐久市教育委員会2003第280図、久保智康 1999図1よりそれぞれ再トレース、一部改変。他は執筆者作成。

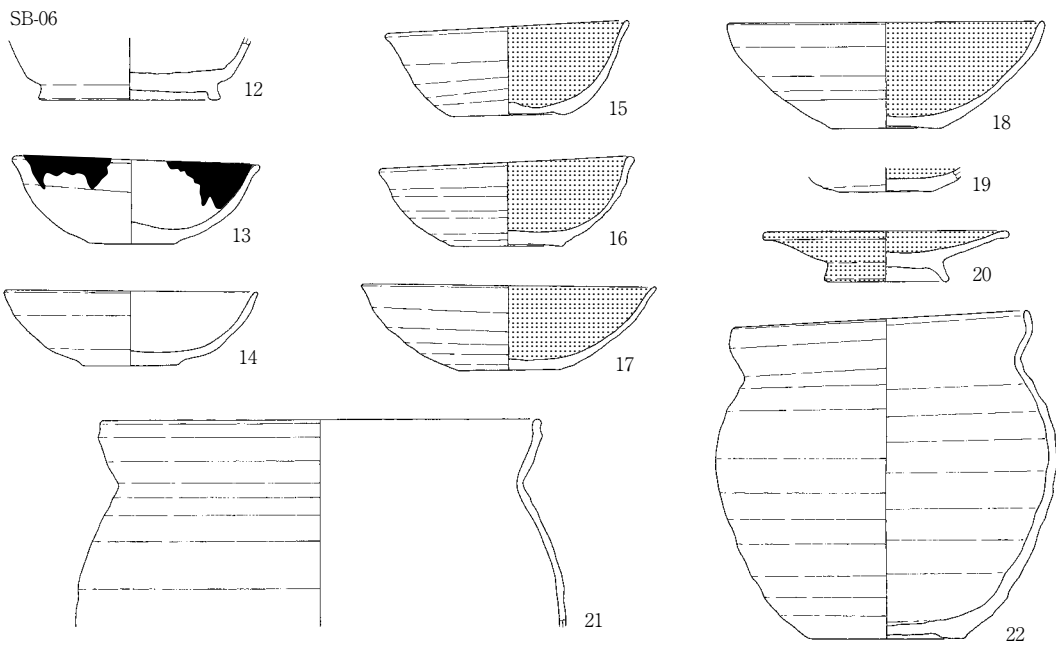
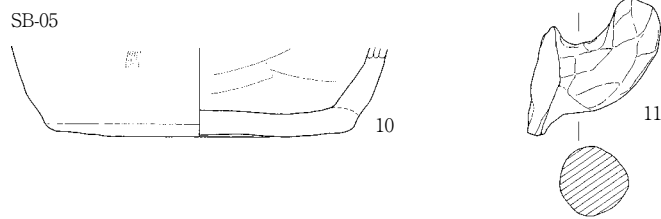
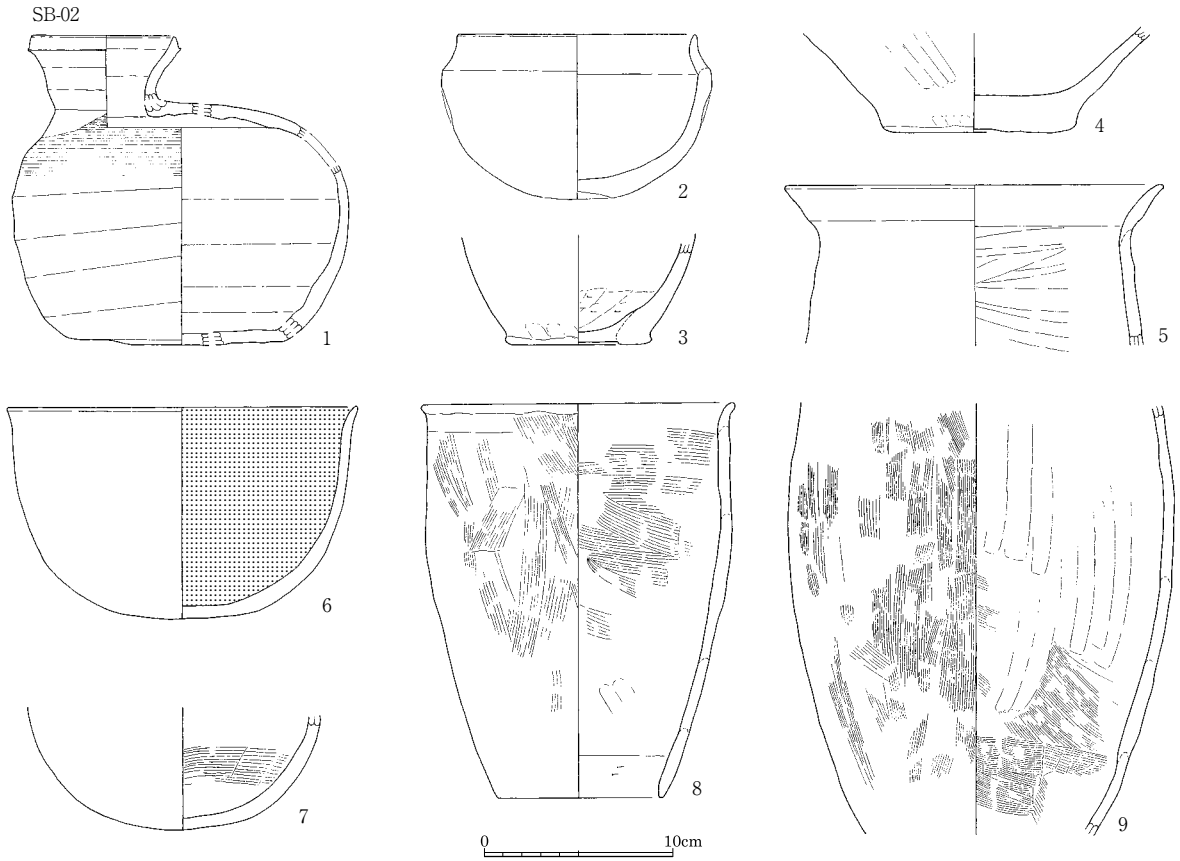
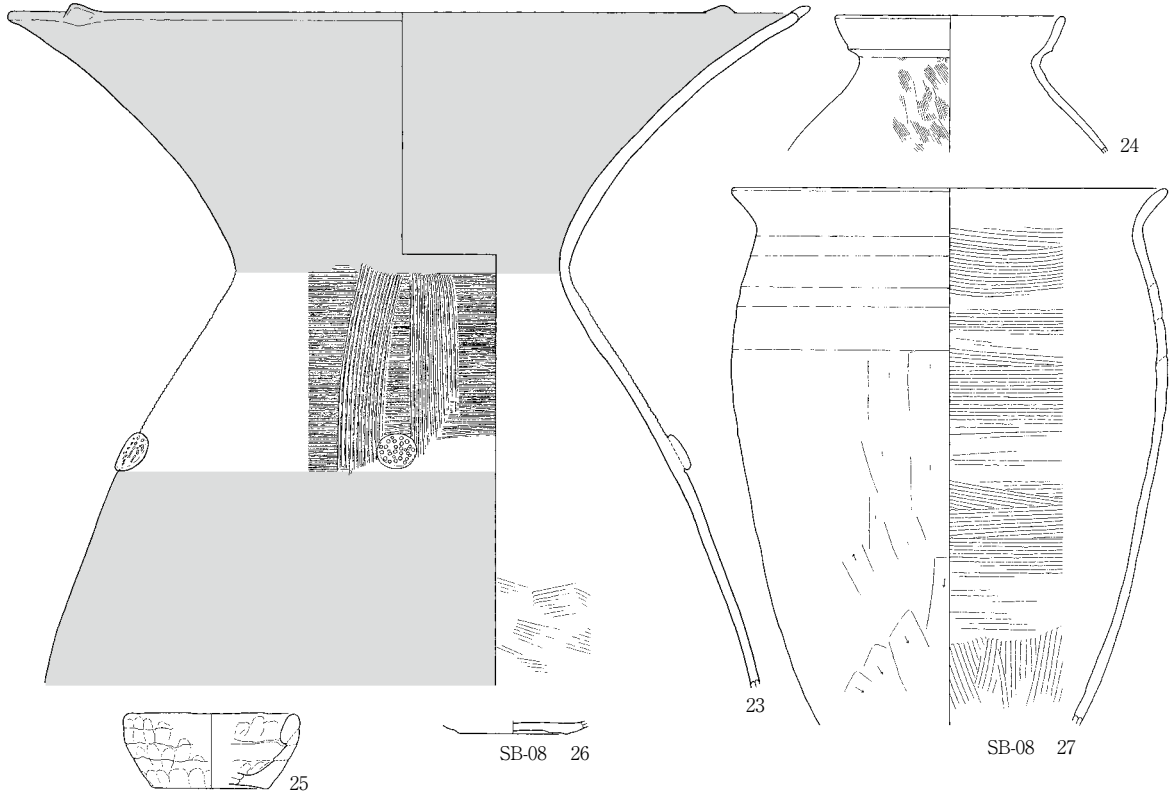


图27 遺物実測図① (1 : 4)

SB-07



SB-09

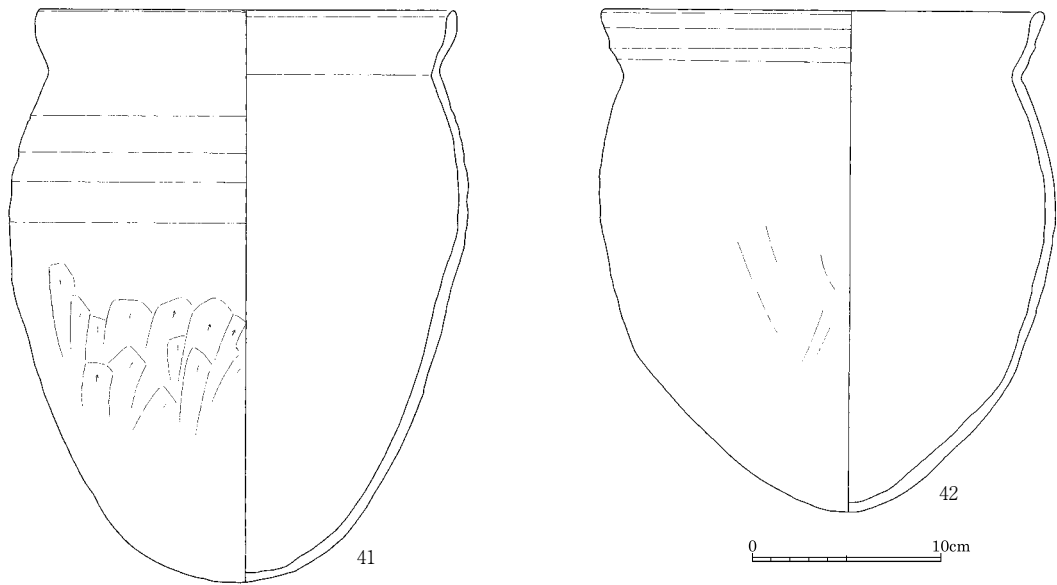
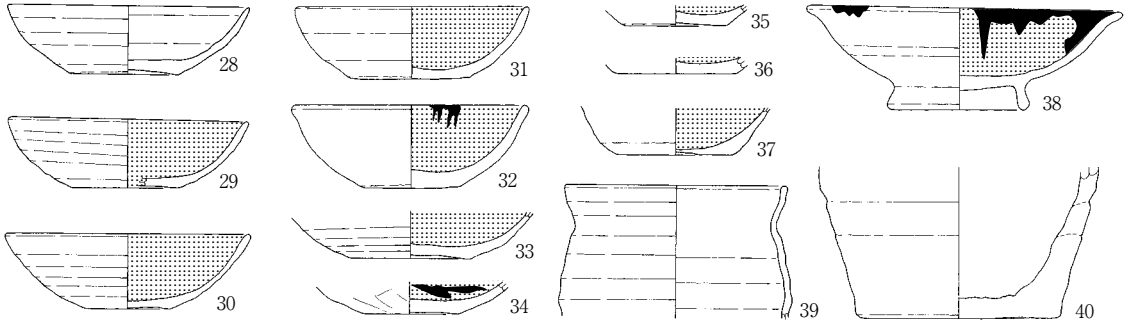


图28 遺物実測図② (1:4)

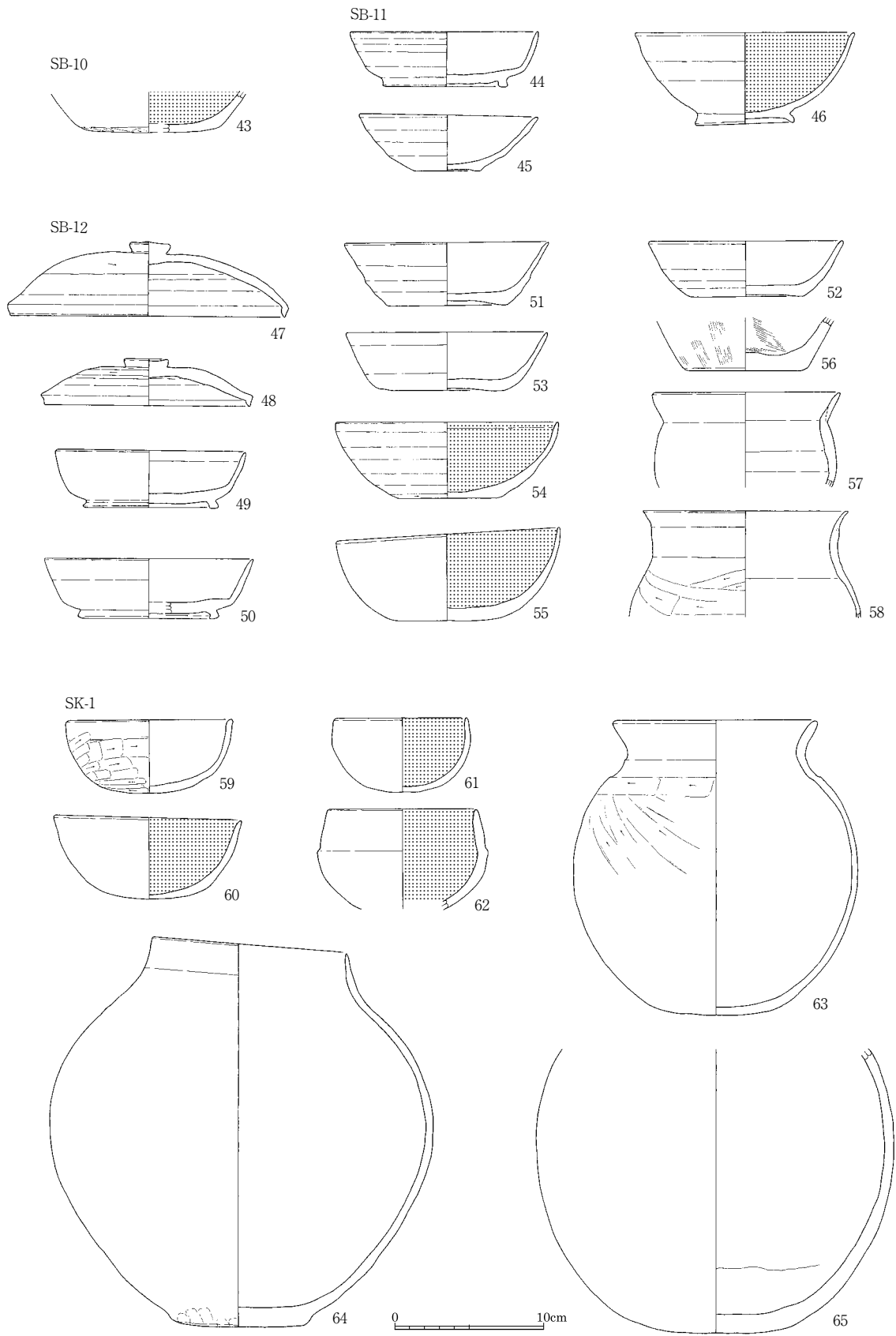


图29 遺物実測図③ (1 : 4)

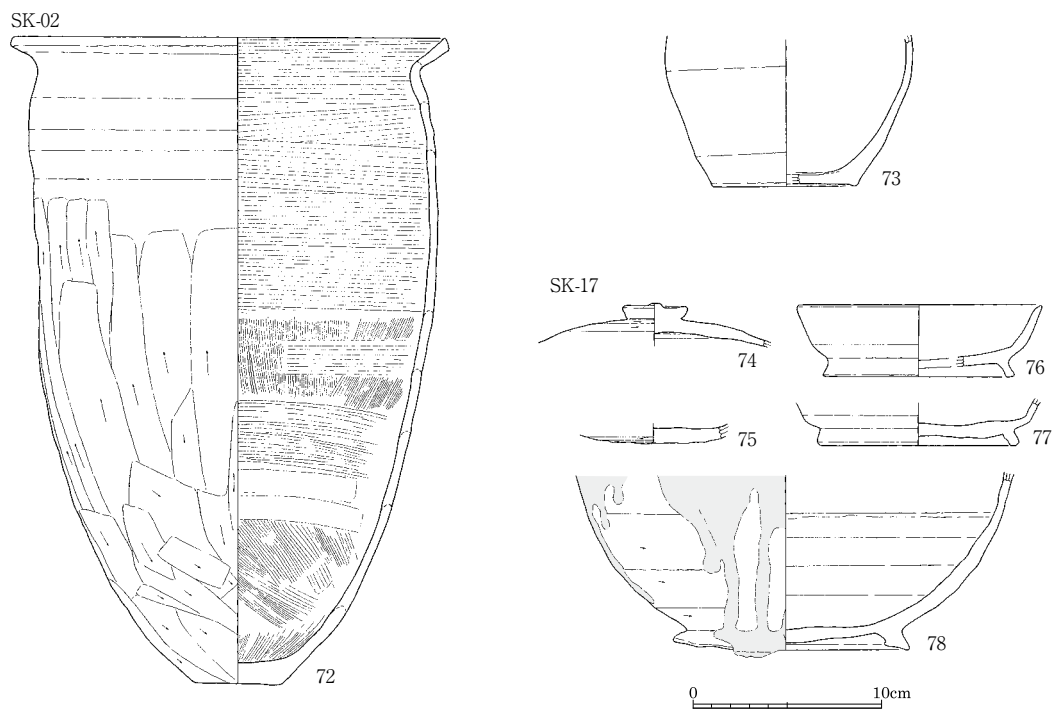
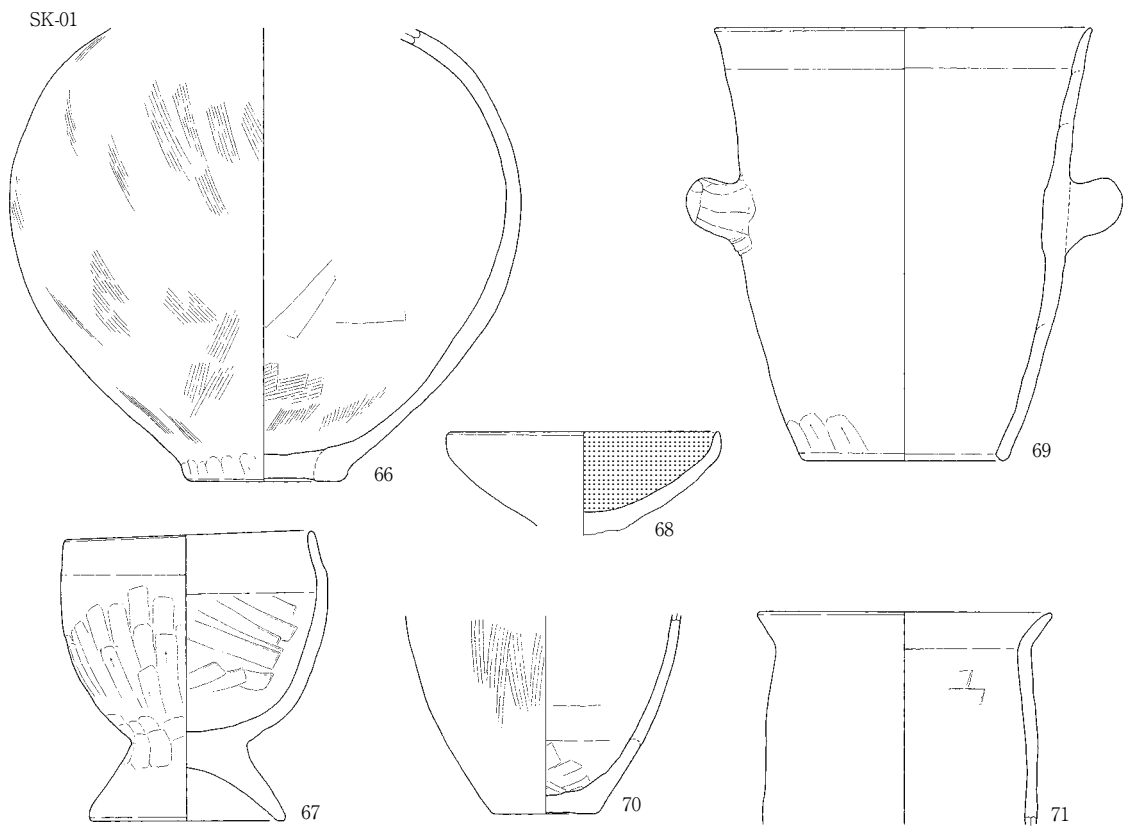


图30 遺物実測図④ (1 : 4)

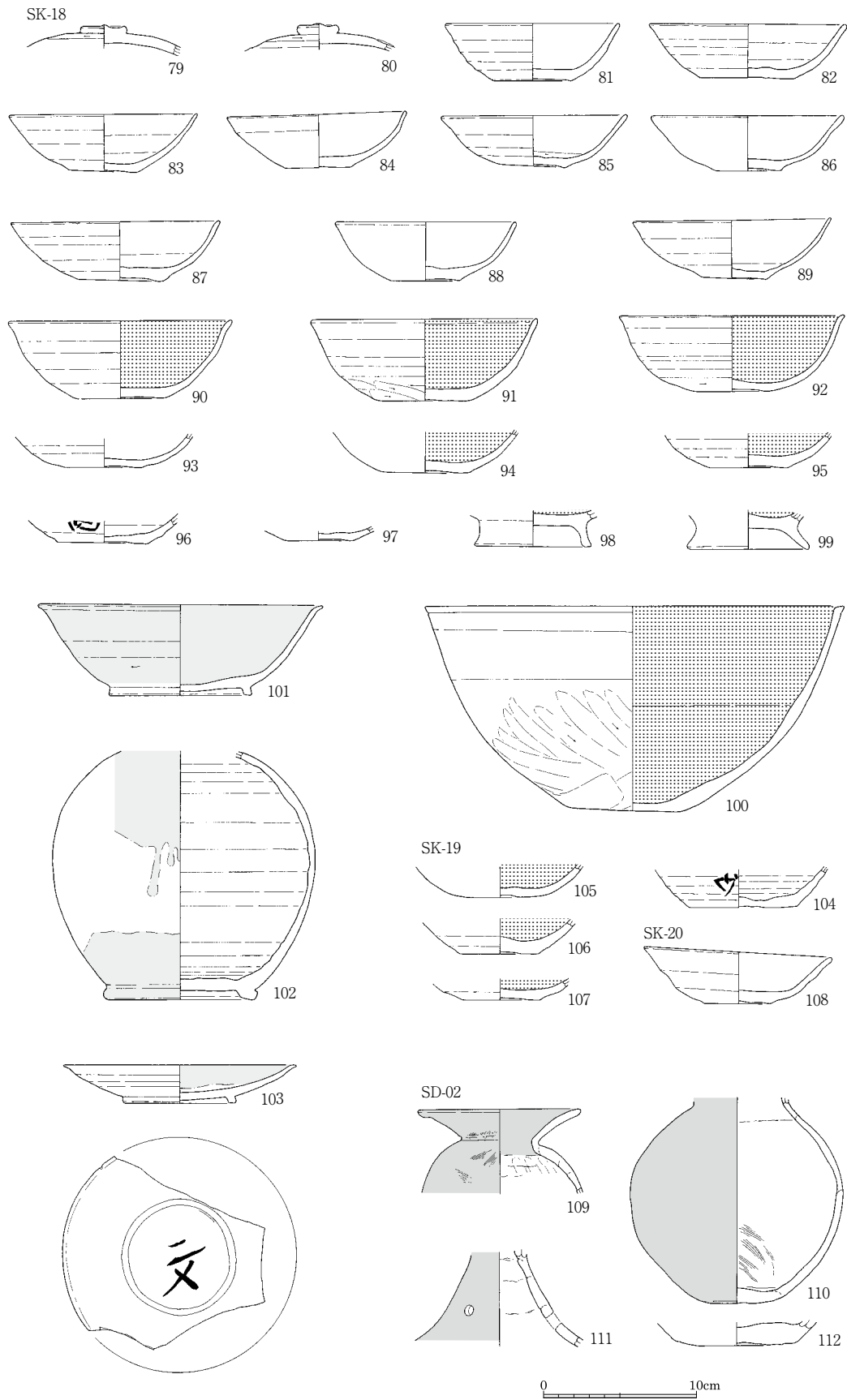


图31 遺物実測図⑤ (1:4)

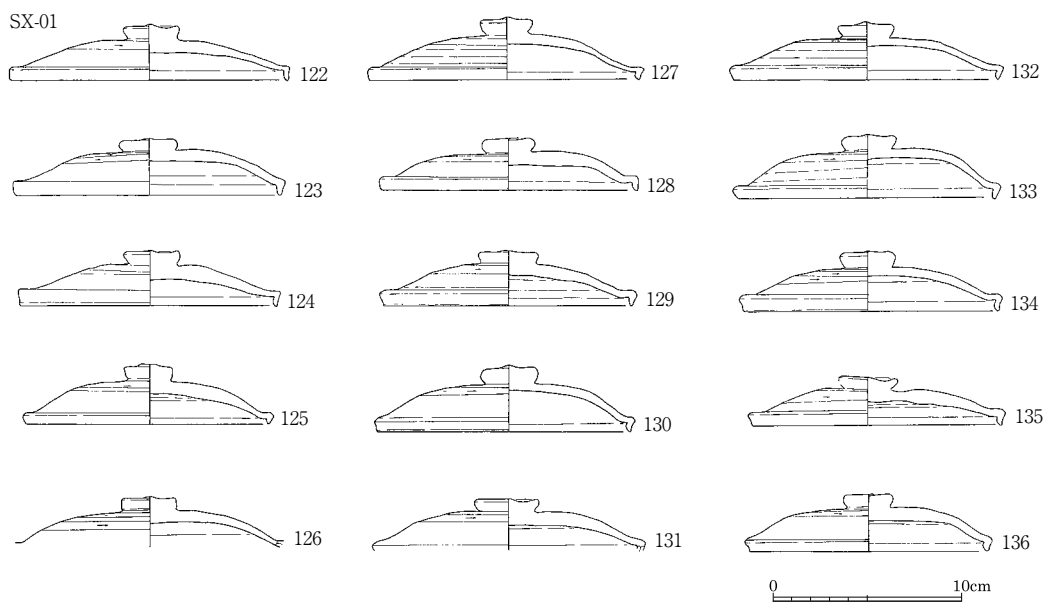
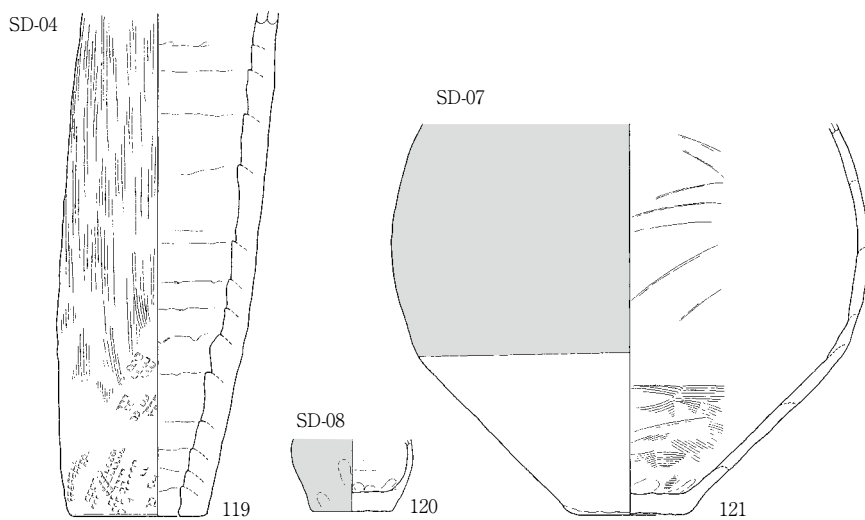
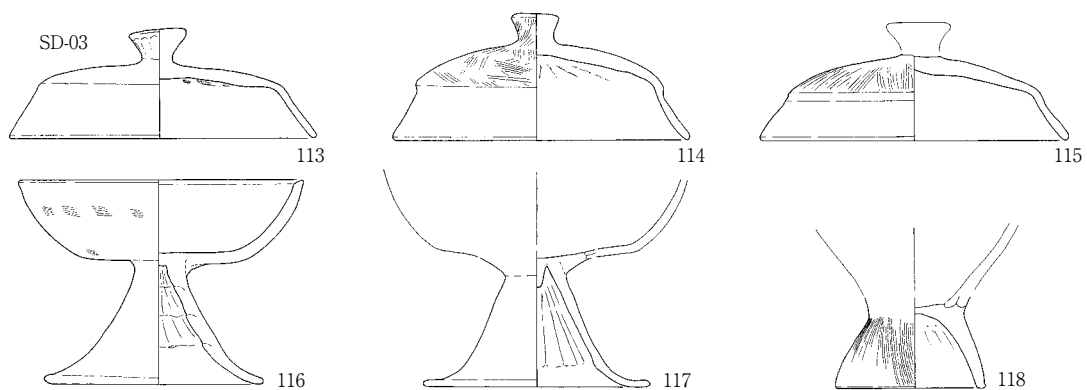


图32 遺物実測図⑥ (1 : 4)

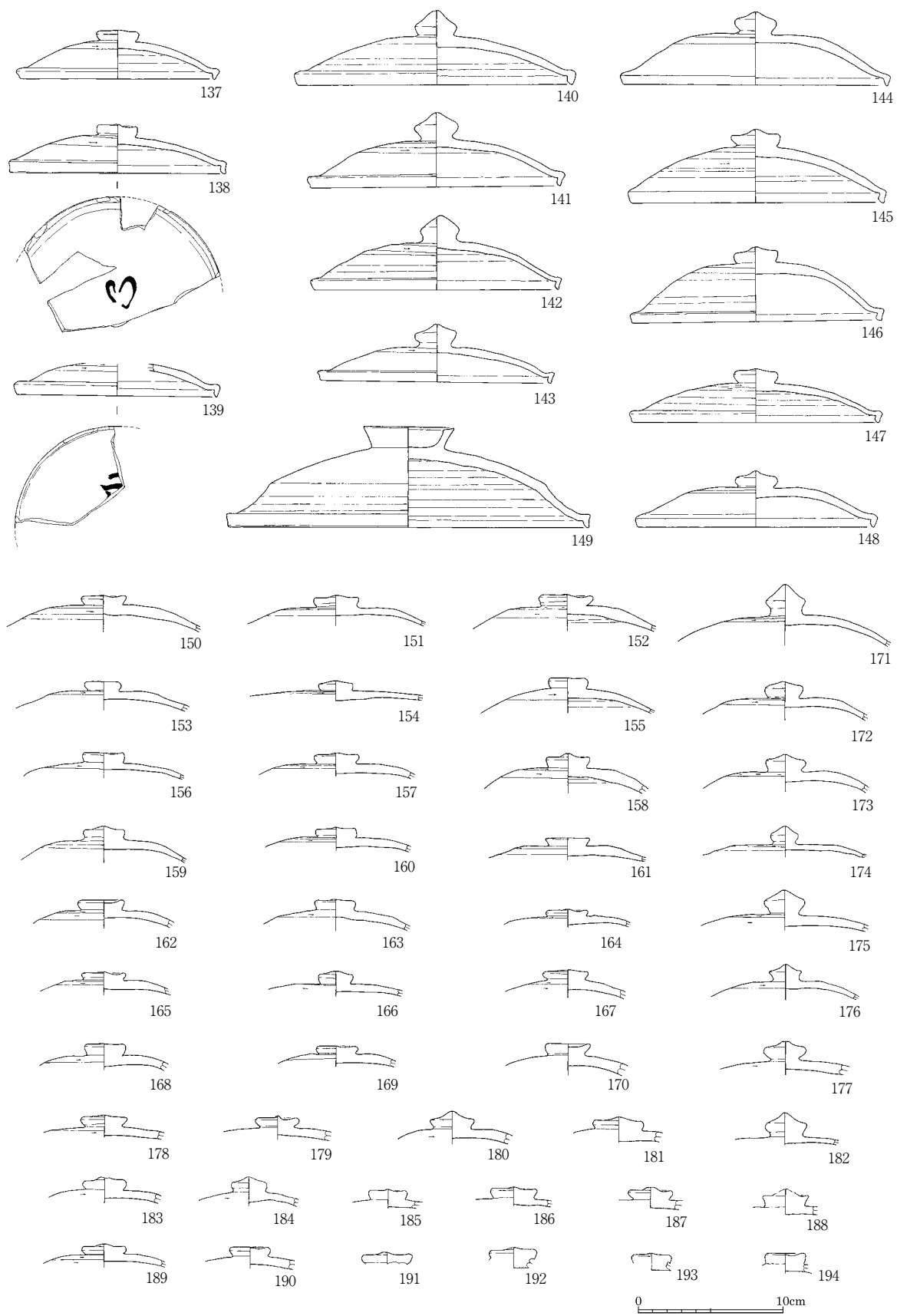


图33 遺物実測図⑦ (1:4)

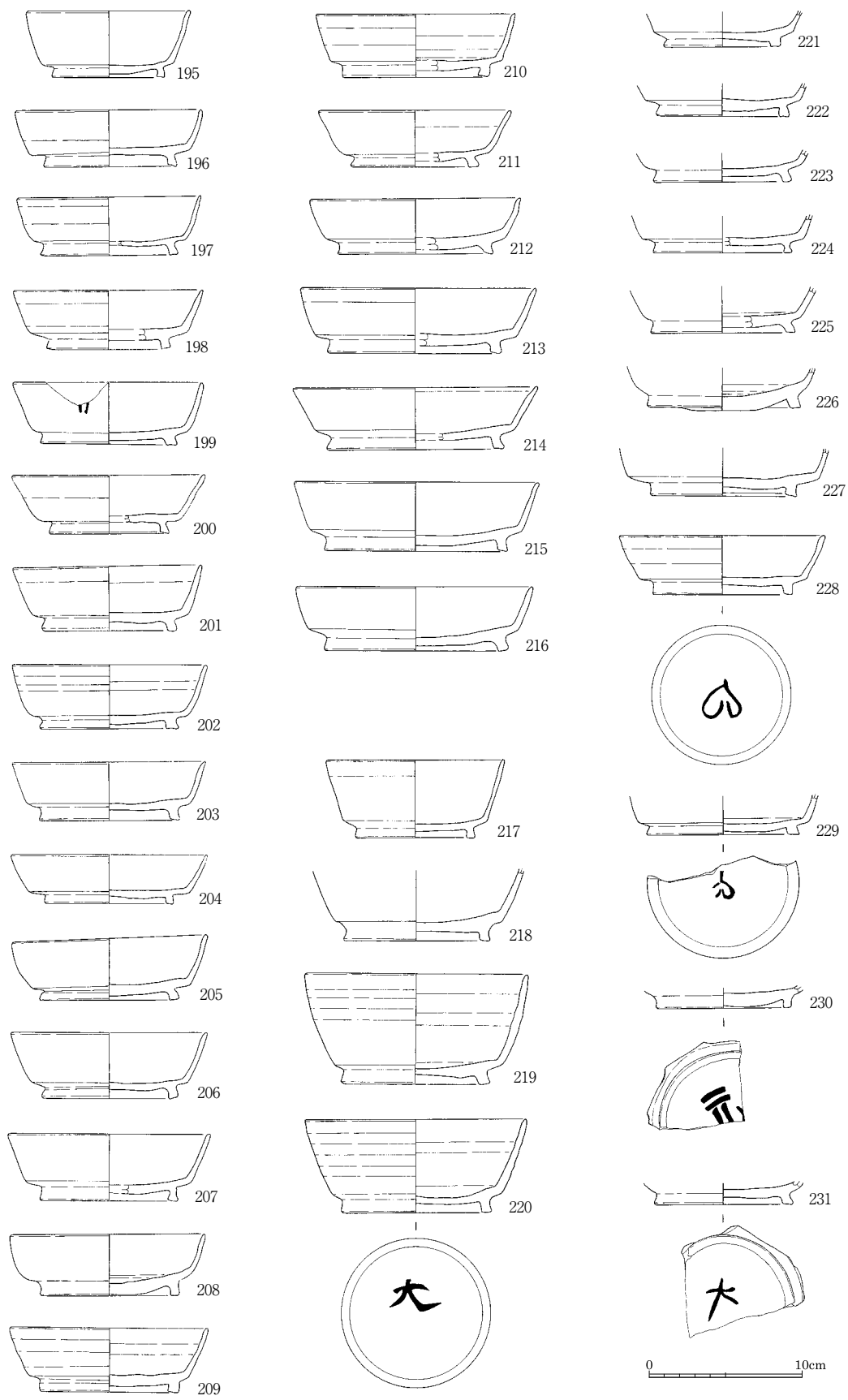


图34 遺物実測図⑧ (1 : 4)

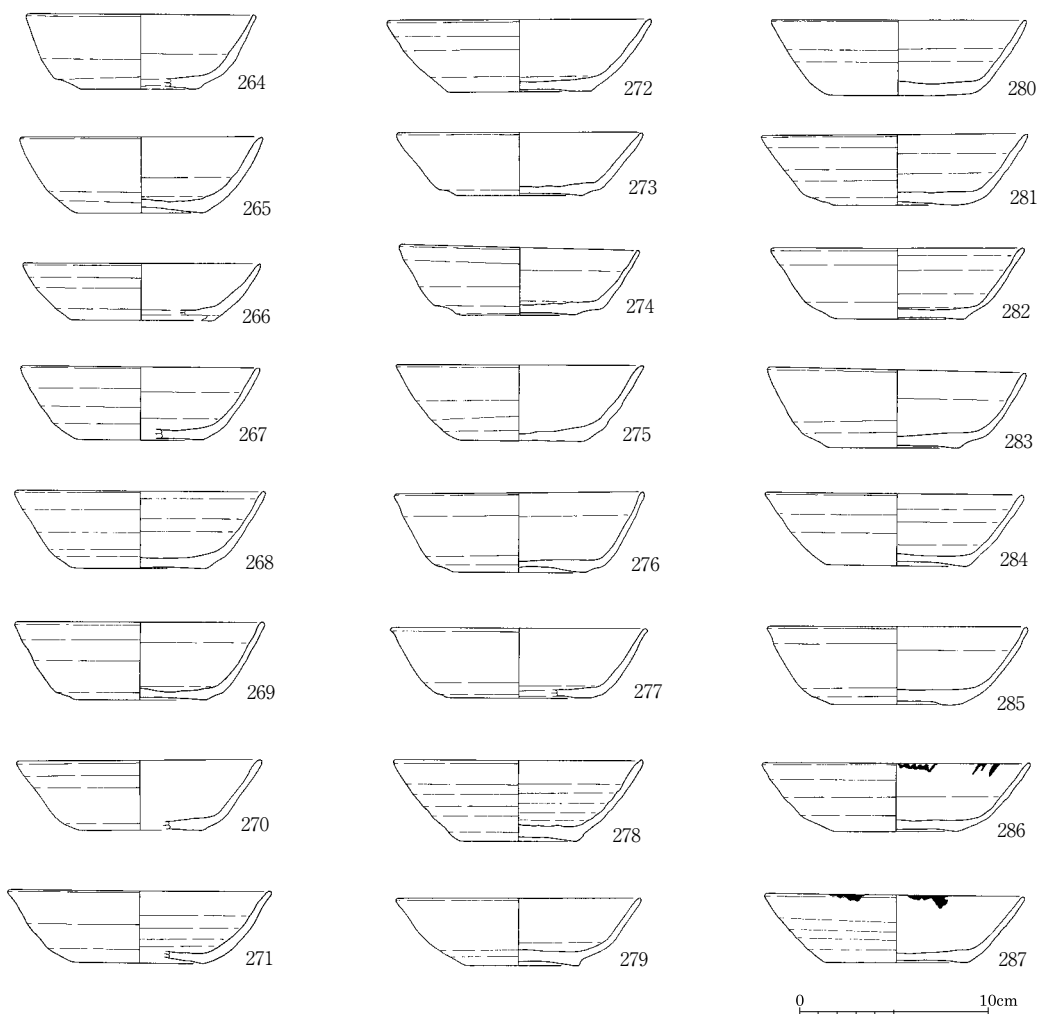
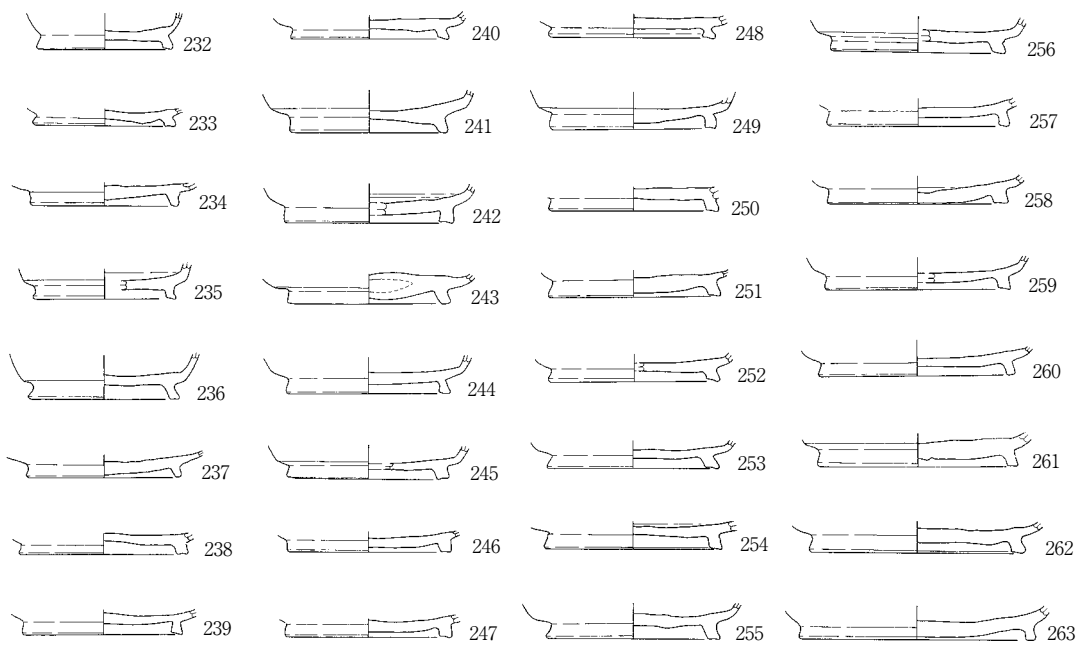


图35 遗物実測図⑨ (1:4)

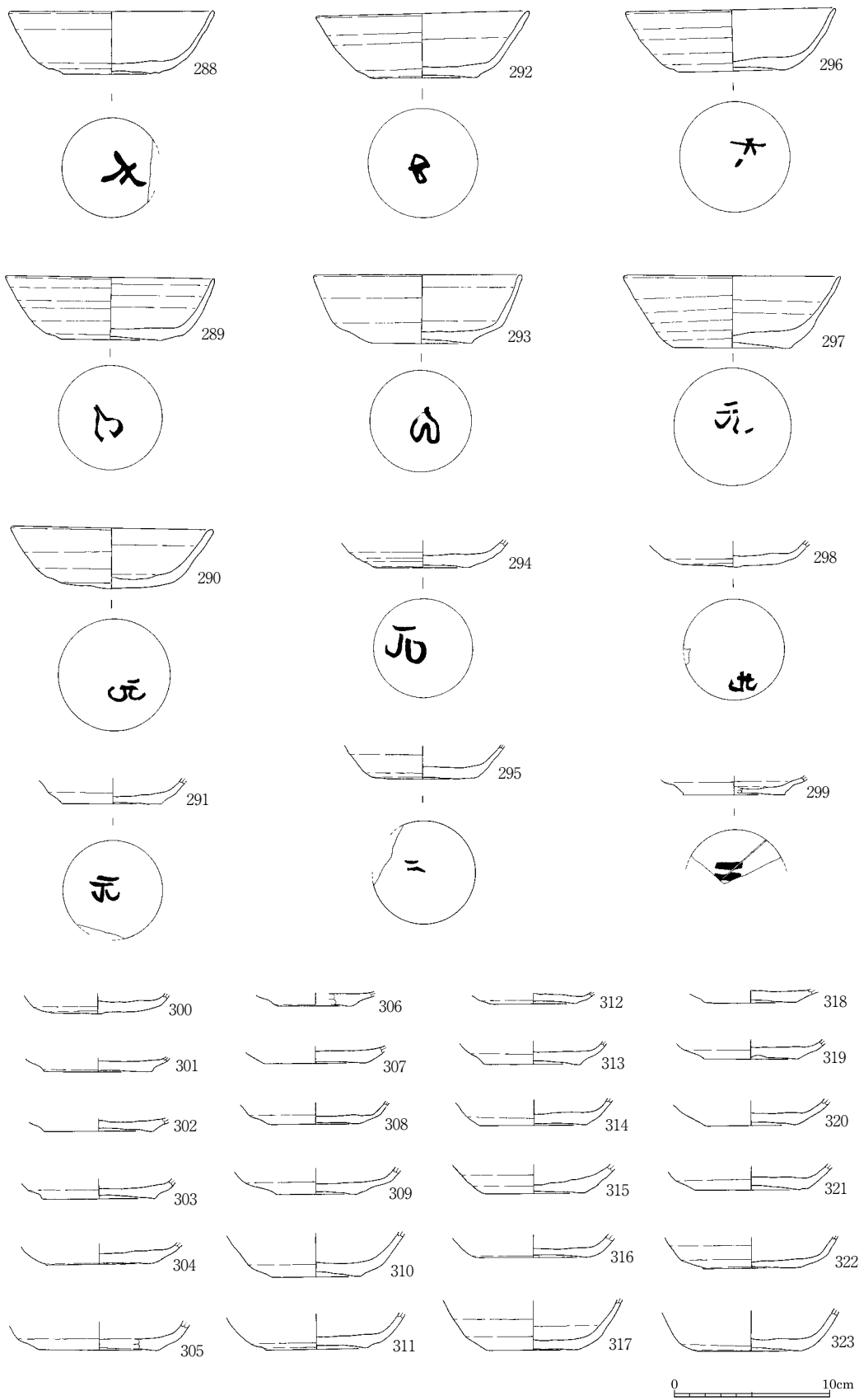


图36 遺物実測図⑩ (1:4)

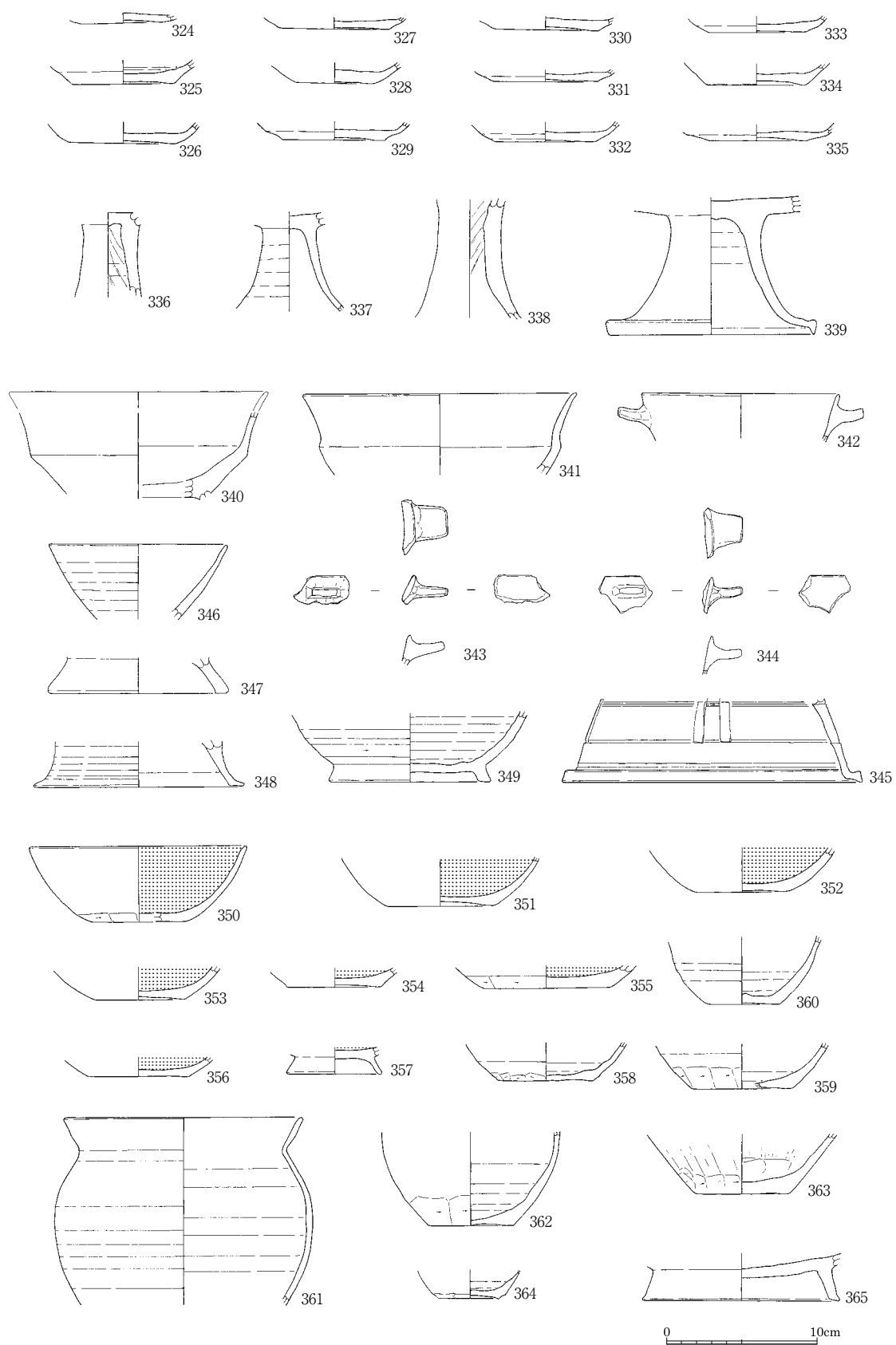
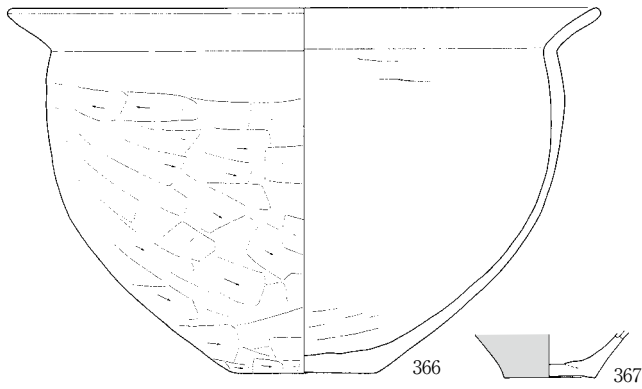
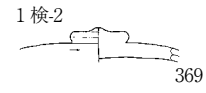


图37 遺物実測図⑪ (1:4)

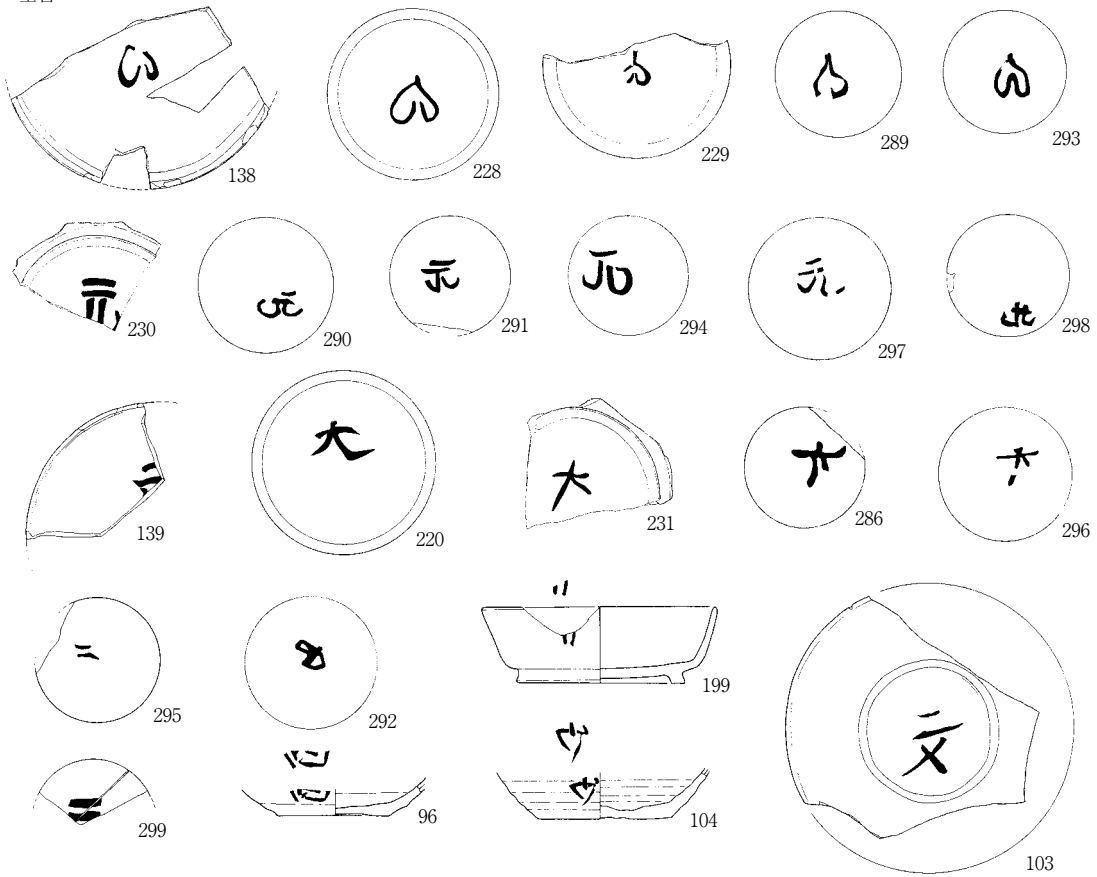
SX-01



SX-02



墨書



篋書

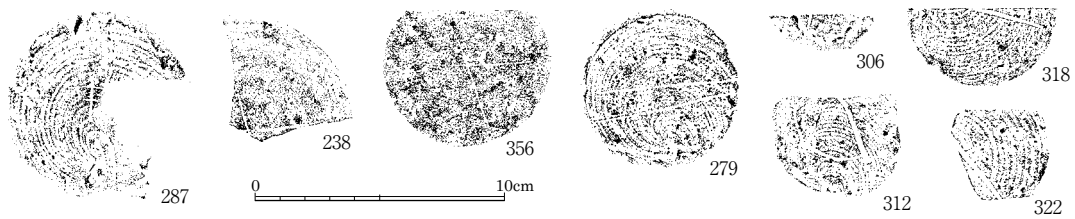


图38 遺物実測図⑫ (1:4 墨書・篋書1:3)

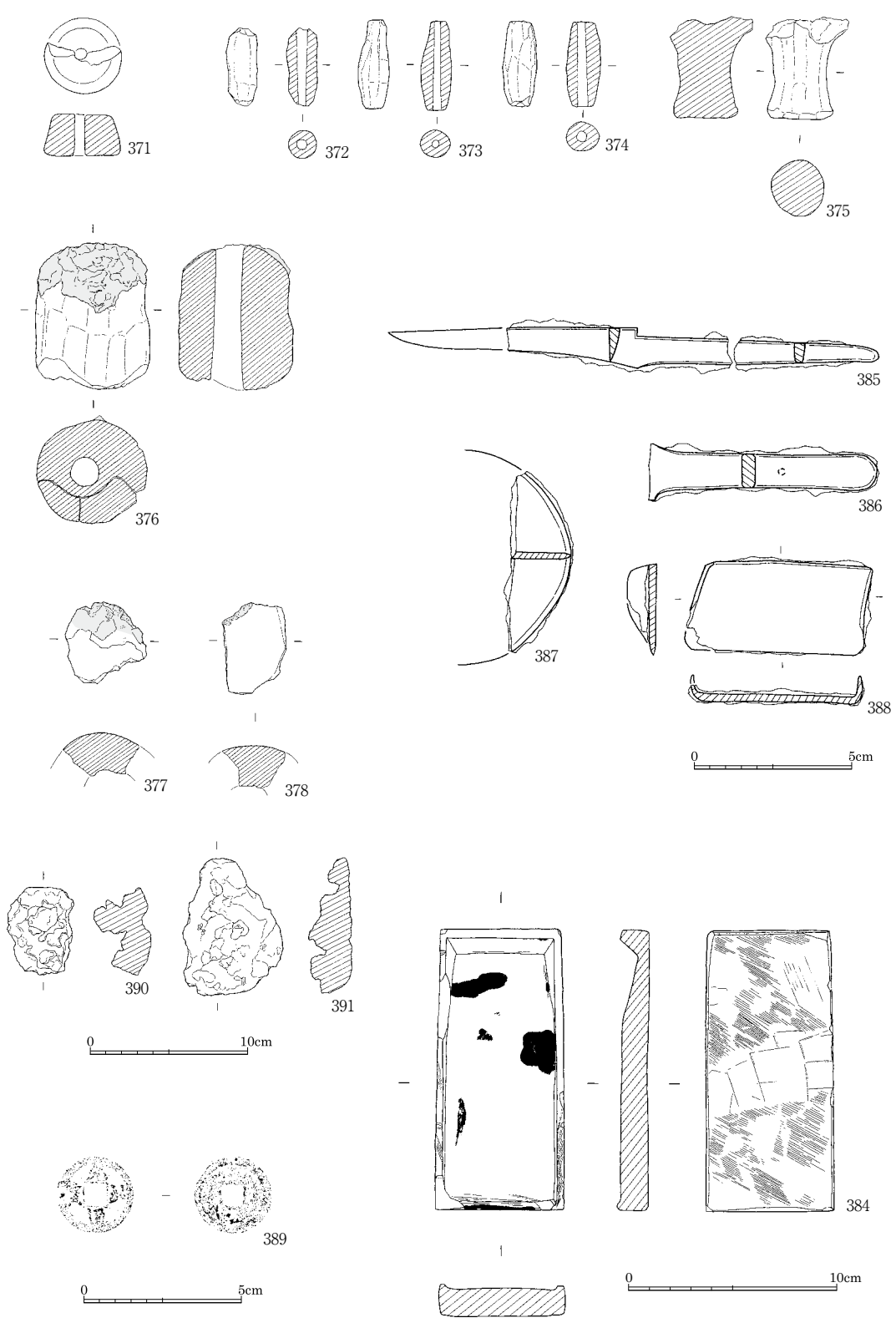


図39 遺物実測図⑬ (土製品・その他1:4 石製品1:3 鉄・銅製品1:2)

表2 桐原宮北遺跡 (AKMK) 遺物一覧表

遺構名	記号	路線	時代 (期)	土 器			土製品	石製品	金属製品	その他	遺物注記 (整理 No.)
				重量 (g)	実測	特記					
1号住居	SB-01	2号	平安	535	0					牛・馬骨	SB01
2号住居	SB-02	1号西	古墳 (後)	8,670	9					馬歯	SB02-1~3, No.1~5
3号住居	SB-03	1号西	平安	1,375	0			凹石			SB03-1, No.1~3
4号住居	SB-04	1号	?	80	0						SB04
5号住居	SB-05	2号	古墳 (後)	1,610	2						SB05-1・2
6号住居	SB-06	3号	平安	4,840	11	灯明	脚部		不明鉄片		SB06-1~3
7号住居	SB-07	4号	弥生~古墳	6,860	3						SB07-1~3
8号住居	SB-08	4号	平安	2,250	2						SB08-1・2
9号住居	SB-09	4号	平安	13,340	15	灯明	土錘				SB09-1~3
10号住居	SB-10	5号	平安	530	1				不明鉄片		SB10-1・2
11号住居	SB-11	5号	平安	1,160	3			剥片			SB11-1
12号住居	SB-12	5号	平安	7,290	12						SB12-1・2, No.1~4
1号溝	SD-01	2号	平安?	140	0						SD01-1・2
2号溝	SD-02	2号	弥生~古墳	1,980	4					馬歯	SD02-1~3, No.1・2
3号溝	SD-03	2・3号	弥生~古墳	2,710	6						SD03-1~3, No.1
4号溝	SD-04	1号西	平安	2,280	1						SD04-1, No.1・2
5号溝	SD-05	1号	?	20	0						SD05
6号溝	SD-06	1号	平安	330	0						SD06
7号溝	SD-07	3号	弥生~古墳	1,190	1						SD07
8号溝	SD-08	3号	弥生~古墳	860	1						SD08-1・2
9号溝	SD-09	3号	?	70	0						SD09
10号溝	SD-10	3号	?	25	0						SD10
1号土坑	SK-01	2号	古墳 (後)	10,150	13					馬歯	SK01-1~5
2号土坑	SK-02	2号	平安	3,685	2						SK02
3号土坑	SK-03	2号	?	85	0						SK03
4号土坑	SK-04	2号	中世	410	0				不明鉄片		SK04-1~3
5号土坑	SK-05	2号	中世	105	0						SK05-1・2
6号土坑	SK-06	2号	?	30	0						SK06
7号土坑	SK-07	2号	中世	140	0					炭化物	SK07
8号土坑	SK-08	1号西	平安	640	0						SK08
9号土坑	SK-09	1号	弥生~古墳	340	0						SK09
10号土坑	SK-10	1号	平安	20	0						SK10
11号土坑	SK-11	1号	中世	220	0						SK11
12号土坑	SK-12	1号	?	10	0						SK12
13号土坑	SK-13	1号	平安	130	0						SK13-1・2
14号土坑	SK-14	4号	平安	120	0						SK14
15号土坑	SK-15	4号	平安	170	0						SK15
16号土坑	SK-16	4号	平安	140	0						SK16
17号土坑	SK-17	4号	平安	6,820	5						SK17-1・2
18号土坑	SK-18	4号	平安	14,630	25	墨書					SK18-1~3
19号土坑	SK-19	4号	平安	1,750	4	墨書	籬羽口	石鏃	手鎌	鉄滓	SK19
20号土坑	SK-20	5号	平安	200	1						SK20
21号土坑	SK-21	5号	?	50	0						SK21
1号建物	ST-01	4号	平安	150	0						ST-P1・2
1号不明遺構	SX-01	4号	平安	78,840	246	特殊	土錘		刀子・紡錘	炭化物	SX01-1~4
2号不明遺構	SX-02	5号	中世?	1,910	1		土錘				SX02
1号道路検出面	1検	1号・西		3,145	1			石鏃			1検-1・2
2号道路検出面	2検	2号		1,445	0			打斧・剥片	北宋銭	鉄滓	2検-1・2
3号道路検出面	3検	3号		660	0					骨片	3検
4号道路検出面	4検	4号		2,830	1			硯	不明鉄片	炭化物	4検-1・2
5号道路検出面	5検	5号		1,300	0						5検
合 計				188,270	370						

凡例 灯明：灯明皿 打斧：打製石斧 紡錘：紡錘車 特殊：円面硯、双耳杯、稜椀、墨書、篋書 *剥片はどちらも黒曜石

表3 桐原宮北遺跡 (AKMK) 土器観察表

図版	番号	出土遺構		遺物注記 (整理 No.)	抽出 No.	時代	種別	器種	部位	遺存	寸法 (cm)			成形・調整・その他	写真	
		遺構名	位置								口径	底径	器高			
図27	1	SB-02	覆土	SB02-1	4	古墳後期	須恵器	平瓶	全形	1/2	7.5	11	16.4	口縁部～肩部に自然釉	○	
	2	SB-02	覆土	SB02-1	3	古墳後期	土師器	杯	底部	1/2	12.7		8.8	内ミガキ		
	3	SB-02	覆土	SB02-1	1	古墳後期	土師器	甕	胴部	1/1		7.8		内ケズリ		
	4	SB-02	カマド周辺	SB02-No.3	2	古墳後期	土師器	甕	底部	1/1		10.3		外ナデ		
	5	SB-02	カマド周辺	SB02-No.3	1	古墳後期	土師器	甕	口縁部	2/3	20.2			内板ナデ		
	6	SB-02	床面・床直	SB02-2	1	古墳後期	土師器	鉢	全形	2/3	14.7	4	11.2	内黒		
	7	SB-02	カマド周辺	SB02-No.4	1	古墳後期	土師器	鉢	底部	1/1				内ハケ		
	8	SB-02	カマド周辺	SB02-No.1	1	古墳後期	土師器	甕	底～口	1/2	16.6	8.7	20.4	外内ハケ	○	
	9	SB-02	覆土	SB02-1	2	古墳後期	土師器	甕	胴部	1/1				外ハケ 内ハケ→ナデ		
	10	SB-05	覆土下層	SB05-2	1	平安	土師器	甕	底部	1/2		16.3		外ハケ→ナデ 内ナデ		
	11	SB-05	覆土上層	SB05-1	1	平安	土師器	甕	把手	1/1						
	12	SB-06	覆土上層	SB06-1	3	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		9.6				
	13	SB-06	カマド周辺	SB06-3	3	平安	土師器	杯	全形	1/1	13.1	4.7	4.45	回転糸切 内黒 灯明	○	
	14	SB-06	カマド周辺	SB06-3	2	平安	土師器	杯	全形	2/3	13.4	5.2	3.9	回転糸切	○	
	15	SB-06	カマド周辺	SB06-3	5	平安	土師器	杯	全形	1/2	12.9	6.6	4.7	回転糸切 内黒	○	
	16	SB-06	カマド周辺	SB06-3	4	平安	土師器	杯	全形	1/2	13.5	6	4.4	回転糸切 内黒	○	
	17	SB-06	カマド周辺	SB06-3	1	平安	土師器	杯	全形	1/1	15.6	5.4	4.5	回転糸切 内黒	○	
	18	SB-06	カマド周辺	SB06-3	6	平安	土師器	杯	底部	1/2	16.8	6	5.6	回転糸切 内黒		
	19	SB-06	覆土上層	SB06-1	2	平安	土師器	杯	底部	2/3		5.4		回転糸切		
	20	SB-06	カマド周辺	SB06-3	7	平安	土師器	皿	全形	1/2	13	6.6	2.65	外内黒	○	
	21	SB-06	覆土上層	SB06-1	1	平安	土師器	甕	口縁部	3/2	23.4					
	22	SB-06	カマド周辺	SB06-3	8	平安	土師器	甕	全形	1/2	15.7	8.3	16.9	回転糸切	○	
図28	23	SB-07	覆土最下層	SB07-3	1	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部	2/3	42			外ミガキ・赤彩	○	
	24	SB-07	覆土最下層	SB07-3	3	弥生後期	弥生土器	甕	口～底	1/2	12.4			外ハケメ	○	
	25	SB-07	覆土最下層	SB07-3	2	弥生後期	弥生土器	手捏	口縁部	1/2	9.4	6.2	3.95	外指頭痕	○	
	26	SB-08	覆土	SB08-1	1	平安	須恵器	杯	底部	1/2		5.8		回転糸切		
	27	SB-08	カマド周辺	SB08-2	1	平安	土師器	甕	口～胴	1/2		23		外ケズリ 内ハケ	○	
	28	SB-09	覆土	SB09-1	13	平安	須恵器	杯	底部	1/2	12.8	6.2	3.6	回転糸切 内黒		
	29	SB-09	覆土	SB09-1	7	平安	土師器	杯	全形	1/2		6.3		回転糸切 内黒	○	
	30	SB-09	覆土	SB09-1	8	平安	土師器	杯	全形	1/2	13	4.5	3.95	回転糸切 内黒		
	31	SB-09	覆土	SB09-1	6	平安	土師器	杯	全形	1/2	12.4	6.5	3.8	回転糸切 内黒	○	
	32	SB-09	覆土	SB09-1	5	平安	土師器	杯	全形	2/3	12.5	5.6	4.4	回転糸切 内黒 灯明		
	33	SB-09	覆土	SB09-1	9	平安	土師器	杯	底部	1/1		6.3		回転糸切 内黒		
	34	SB-09	覆土	SB09-1	10	平安	土師器	杯	底部	1/2		4.9		外ケズリ 内黒 灯明		
	35	SB-09	覆土	SB09-1	11	平安	土師器	杯	底部	1/1		6.5		回転糸切 内黒		
	36	SB-09	床下	SB09-2	2	平安	土師器	杯	底部	2/3		5.7		回転糸切 内黒		
	37	SB-09	覆土	SB09-1	12	平安	土師器	杯	底部	2/3		6		回転糸切→ケズリ 内黒		
	38	SB-09	覆土	SB09-1	4	平安	土師器	高台杯	全形	1/1	16.7	7.5	5.35	内黒 灯明	○	
	39	SB-09	床下	SB09-2	1	平安	土師器	甕	口縁部	1/2	11.8					
	40	SB-09	覆土	SB09-1	3	平安	土師器	甕	胴部	1/2		10.8		内横ナデ		
	41	SB-09	覆土	SB09-1	2	平安	土師器	甕	全形	1/2	22.1		30.2	外ケズリ	○	
	42	SB-09	覆土	SB09-1	1	平安	土師器	甕	全形	2/3	23.4		26.4	外ケズリ→ナデ	○	
	図29	43	SB-10	カマド横	SB10-2	1	平安	土師器	杯	底部	1/2	9.4			底面ヘラケズリ 内黒	
		44	SB-11	覆土	SB11-1	3	平安	須恵器	高台杯	全形	2/3	12.7	8.4	3.7		○
45		SB-11	覆土	SB11-1	1	平安	土師器	杯	全形	1/1	12	4.2	3.8	回転糸切	○	
46		SB-11	覆土	SB11-1	2	平安	土師器	高台杯	全形	1/1	14.7	6.7	6.2	内黒	○	
47		SB-12	覆土	SB11-1	1	平安	須恵器	摘蓋	全形	1/1	18.8		5	摘径2.8	○	
48		SB-12	覆土	SB12-No.4	1	平安	須恵器	摘蓋	全形	1/1	13.7		3.6	摘径3	○	
49		SB-12	覆土	SB12-1	3	平安	須恵器	高台杯	全形	2/3	12.7	9	3.8		○	
50		SB-12	覆土	SB12-1	7	平安	須恵器	高台杯	全形	1/2	14	9.5	4			
51		SB-12	覆土	SB12-No.1	1	平安	須恵器	杯	全形	2/3	13.8	8.2	4.2	回転糸切	○	
52		SB-12	覆土	SB12-1	4	平安	須恵器	杯	全形	1/2	13	7.5	3.7	回転糸切	○	
53		SB-12	覆土	SB12-No.2	1	平安	須恵器	杯	全形	1/1	13.5	7.9	3.9	回転糸切 火襷痕	○	
54		SB-12	覆土	SB12-1	2	平安	土師器	杯	全形	1/1	14.9	6.6		底面ケズリ 内黒	○	
55		SB-12	覆土	SB12-No.3	1	平安	土師器	杯	全形	2/3	15.1	5.7	6.2	内黒	○	
56		SB-12	覆土	SB12-1	5	平安	土師器	甕	底部	1/2		7.5				
57		SB-12	覆土	SB12-1	8	平安	土師器	甕	口縁部	1/2	12.6					
58		SB-12	覆土	SB12-1	6	平安	土師器	甕	口縁部	1/2	13.6			外ケズリ		
59		SK-01	中央集中	SK01-4	5	古墳後期	土師器	杯	全形	2/3	11.2		4.9	外ケズリ	○	
60		SK-01	中央集中	SK01-4	6	古墳後期	土師器	杯	全形	2/3	12.6		5.4	内黒	○	

図版	番号	出土遺構		遺物注記 (整理 No.)	抽出 No.	時代	種別	器種	部位	遺存	寸法 (cm)			成形・調整・その他	写真
		遺構	位置								口径	底径	器高		
図29	61	SK-01	北側集中	SK01-5	4	古墳後期	土師器	杯	全形	2/3	9		4.9	内黒	○
	62	SK-01	南側集中	SK01-3	1	古墳後期	土師器	杯	口縁部	1/2	10.1			内黒	
	63	SK-01	中央集中	SK01-4	1	古墳後期	土師器	壺	口縁部	1/2	13.7	8.4	19.7	外ケズリ	○
	64	SK-01	北側集中	SK01-5	1	古墳後期	土師器	壺	全形	2/3	13.2	9.1	25.6	外ミガキ	○
	65	SK-01	北側集中	SK01-5	3	古墳後期	土師器	壺	底部	2/3		11.9		外ミガキ	
図30	66	SK-01	北側集中	SK01-5	2	古墳後期	土師器	壺	底部	1/1			8.7	外ハケ→ミガキ	
	67	SK-01	中央集中	SK01-4	3	古墳中期	土師器	台杯鉢	全形	2/3	13.3	10.4	15.1	外ケズリ 内板ナデ	
	68	SK-01	中央集中	SK01-4	4	古墳後期	土師器	高杯	杯部	1/1	14.4			内黒	
	69	SK-01	中央集中	SK01-4	2	古墳後期	土師器	甌	底部	1/2	20	10.9	22.9	外板ナデ	○
	70	SK-01	中央集中	SK01-1	1	古墳後期	土師器	甌	底部	2/3		5.7		外ハケメ	
	71	SK-01	中央集中	SK01-1	2	古墳後期	土師器	甌	口縁部	2/3	15.5			内板ナデ	
	72	SK-02		SK02-No.1	1	平安	土師器	甌	全形	1/1	23.3	4.6	34.1	外ケズリ 内ハケ	○
	73	SK-02		SK02-No.2	1	平安	土師器	甌	底部	1/2		7.6			
	74	SK-17		SK17-1	1	平安	須恵器	摘蓋	摘	2/3				摘径3.4cm	
	75	SK-17		SK17-2	1	平安	須恵器	杯	底部	2/3				回転鋭切	
	76	SK-17		SK17-2	3	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2	13	10.4	3.8		
	77	SK-17		SK17-2	2	平安	須恵器	高台杯	底部	1/1		10.2			
	78	SK-17		SK17-2	4	平安	須恵器	壺	底部	2/3		12.4		自然釉 高台	
図31	79	SK-18	覆土	SK18-2	5	平安	須恵器	摘蓋		1/1				摘径2.55	
	80	SK-18	覆土下層	SK18-3	3	平安	須恵器	摘蓋		1/1				摘径2.8	
	81	SK-18	覆土	SK18-2	4	平安	須恵器	杯	底部	1/1	11.4	5	3.8	回転糸切	
	82	SK-18	覆土	SK18-2	2	平安	須恵器	杯	底部	1/2	12.9	6.2	3	回転糸切	○
	83	SK-18	覆土	SK18-2	14	平安	土師器	杯	全形	2/3	12.3	4.4	3.7	回転糸切	
	84	SK-18	覆土	SK18-1	1	平安	土師器	杯	全形	2/3	11.7	4.7	3.5	回転糸切	○
	85	SK-18	覆土	SK18-2	12	平安	土師器	杯	全形	2/3	12.2	4.1	3.3	回転糸切	○
	86	SK-18	覆土	SK18-1	2	平安	土師器	杯	底部	1/1	12.5	4.3	3.6	回転糸切	
	87	SK-18	覆土	SK18-2	11	平安	土師器	杯	全形	2/3	13.8	5.6	3.9	回転糸切	○
	88	SK-18	覆土	SK18-1	3	平安	土師器	杯	底部	1/1	11.7	4.5	3.8	回転糸切	
	89	SK-18	覆土	SK18-2	13	平安	土師器	杯	全形	2/3	12.9	4.2	3.8	回転糸切	○
	90	SK-18	覆土	SK18-2	10	平安	土師器	杯	底部	1/1	14.6	3.05	5.8	回転糸切 内黒	○
	91	SK-18	覆土	SK18-2	9	平安	土師器	杯	底部	1/1	14.9	5.6	5.3	底面ケズリ 内黒	
	92	SK-18	覆土下層	SK18-3	5	平安	土師器	杯	胴部	1/2	14.7	4.5	5	底面ケズリ 内黒	
	93	SK-18	覆土	SK18-1	4	平安	土師器	杯	底部	1/1		4		回転糸切	
	94	SK-18	覆土	SK18-2	7	平安	土師器	杯	底部	1/1		5.3		回転糸切 内黒	
	95	SK-18	覆土	SK18-2	8	平安	土師器	杯	底部	1/1		5		回転糸切 内黒	
	96	SK-18	覆土	SK18-2	3	平安	土師器	杯	底部	1/2		6		回転糸切、墨書	
	97	SK-18	覆土	SK18-2	15	平安	土師器	杯	底部	1/1		4.4		回転糸切	
	98	SK-18	覆土下層	SK18-3	6	平安	土師器	高台杯	胴部	1/1		7.6		内黒	
	99	SK-18	覆土	SK18-2	6	平安	土師器	高台杯	底部	1/1		8		内黒	
100	SK-18	覆土下層	SK18-3	4	平安	土師器	鉢	胴部	1/2	23.5	7.5	13.3	外ケズリ 内黒	○	
101	SK-18	覆土下層	SK18-3	1	平安	灰釉陶器	高台碗	底部	1/2	14.6	9.4	6		○	
102	SK-18	覆土	SK18-2	1	平安	灰釉陶器	瓶	底部	1/1		9.5		自然釉	○	
103	SK-18	覆土下層	SK18-3	2	平安	灰釉陶器	皿	底部	1/1	15.2	7.4	2.5	墨書	○	
104	SK-19		SK19	4	平安	須恵器	杯	底部	2/3		7		墨書 回転糸切		
105	SK-19		SK19	1	平安	土師器	杯	底部	1/2		6		回転糸切 内黒		
106	SK-19		SK19	2	平安	土師器	杯	底部	1/1		6		回転糸切 内黒		
107	SK-19		SK19	3	平安	土師器	杯	底部	2/3		5		回転糸切 内黒		
108	SK-20		SK20	1	平安	土師器	杯	全形	1/1	12.2	4.4	3.7	回転糸切	○	
109	SD-02		SD02-No.2	1	古墳初頭	弥生土器	壺	口縁部	1/2	10.6			外ミガキ・赤彩	○	
110	SD-02		SD02-No.1	1	古墳初頭	弥生土器	壺	底～胴	2/3		4.8		外ミガキ・赤彩 内ハケ	○	
111	SD-02		SD02-No.1	2	古墳初頭	弥生土器	高杯	脚部	2/3				外ミガキ・赤彩	○	
112	SD-02		SD02-1	1	古墳初頭	弥生土器	甌	底部	1/1		8				
図32	113	SD-03		SD03-No.1	3	古墳中期	土師器	摘蓋	全形	1/1	16.2		5.75	外ハケ 摘径3.05	○
	114	SD-03		SD03-No.1	2	古墳中期	土師器	摘蓋	全形	2/3	15.7		6.7	外ハケ 摘径2.5	○
	115	SD-03		SD03-No.1	4	古墳中期	土師器	摘蓋	全形	2/3	16.4			外ハケ	○
	116	SD-03		SD03-No.1	5	古墳中期	土師器	高杯	全形	2/3	15.1	11.6	10.8	外ミガキ	○
	117	SD-03		SD03-No.1	1	古墳中期	土師器	高杯	脚部	1/1		12		外ミガキ	○
	118	SD-03		SD03-3	1	古墳初頭	土師器	台付甌	底部	2/3		7.9		ハケ	
	119	SD-04		SD04-No.1	1	平安	土師器	円筒形	胴～底	1/2		6.2		外ハケ・格子タタキ	○
	120	SD-07	覆土中層	SD07	1	平安	弥生土器	壺	胴～底	1/2		6.5		外ミガキ・赤彩 内ハケ	
	121	SD-08	覆土上層	SD08-1	1	平安	弥生土器	壺	底部	1/1		4.2		外ミガキ・赤彩	

図版	番号	出土遺構		遺物注記 (整理 No.)	抽出 No.	時代	種別	器種	部位	遺存	寸法 (cm)			成形・調整・その他	写真
		遺構	位置								口径	底径	器高		
図32	122	SX-01	覆土中層	SX01-3	22	平安	須恵器	摘蓋	全形	2/3	14.8	2.9	摘径2.9	○	
	123	SX-01	覆土上層	SX01-2	3	平安	須恵器	摘蓋	全形	1/2	14	3	摘径3.1		
	124	SX-01	覆土中層	SX01-3	19	平安	須恵器	摘蓋	全形	2/3	13.7	2.9	摘径3	○	
	125	SX-01	覆土中層	SX01-3	31	平安	須恵器	摘蓋	全形	1/4	12.8		摘径2.6		
	126	SX-01	覆土下層	SX01-4	9	平安	須恵器	摘蓋	全形	1/2			摘径2.95		
	127	SX-01	覆土中層	SX01-3	28	平安	須恵器	摘蓋	全形	1/2	14.4	3.3	摘径2.75	○	
	128	SX-01	覆土中層	SX01-3	24	平安	須恵器	摘蓋	全形	1/2	13.7	2.8	摘径3.5	○	
	129	SX-01	覆土上層	SX01-2	4	平安	須恵器	摘蓋	全形	1/2	13.2	2.9	摘径3.2		
	130	SX-01	覆土下層	SX01-4	11	平安	須恵器	摘蓋	全形	1/2	13.5	3.4	摘径3		
	131	SX-01	覆土下層	SX01-4	12	平安	須恵器	摘蓋	全形	1/3			摘径3.4		
	132	SX-01	覆土中層	SX01-3	29	平安	須恵器	摘蓋	全形	1/4	14	3.1	摘径2.9		
	133	SX-01	覆土中層	SX01-3	26	平安	須恵器	摘蓋	全形	2/3	13.6	3.4	摘径2.85	○	
	134	SX-01	覆土下層	SX01-4	10	平安	須恵器	摘蓋	全形	2/3	13.5	3.2	摘径2.9	○	
	135	SX-01	覆土上層	SX01-2	1	平安	須恵器	摘蓋	全形	2/3	13.2	2.55	摘径3.1		
	136	SX-01	覆土中層	SX01-2	20	平安	須恵器	摘蓋	全形	2/3	12.7	3	摘径2.6	○	
	137	SX-01	覆土下層	SX01-4	8	平安	須恵器	摘蓋	全形	1/3	13.5	3.4	摘径2.9		
	138	SX-01	覆土中層	SX01-4	1	平安	須恵器	摘蓋	全形	1/3	14.9	3.85	摘径2.8	墨書	
	139	SX-01	覆土上層	SX01-2	1	平安	須恵器	摘蓋	口縁	1/4	13.8		墨書		
	140	SX-01	覆土上層	SX01-2	2	平安	須恵器	摘蓋	全形	1/2	19	5.1	摘径2.9	○	
	141	SX-01	覆土中層	SX01-3	18	平安	須恵器	摘蓋	全形	2/3	17.3	5.2	摘径3	○	
	142	SX-01	覆土中層	SX01-3	21	平安	須恵器	摘蓋	全形	2/3	16.9	5.1	摘径2.15	○	
	143	SX-01	覆土中層	SX01-3	23	平安	須恵器	摘蓋	全形	1/2	16.9	3.9	摘径3.5	○	
	144	SX-01	覆土中層	SX01-3	27	平安	須恵器	摘蓋	全形	1/4	18.3	5	摘径2.9		
	145	SX-01	覆土中層	SX01-3	30	平安	須恵器	摘蓋	全形	1/4	17.4	5.1	摘径3.4		
	146	SX-01	覆土中層	SX01-3	25	平安	須恵器	摘蓋	全形	1/2	17.3	5.15	摘径3.1	○	
	147	SX-01	覆土上層	SX01-2	24	平安	須恵器	摘蓋	全形	1/2	17	3.7	摘径3		
	148	SX-01	覆土中層	SX01-3	32	平安	須恵器	摘蓋	全形	1/4	16.2	3.9	摘径2.9		
	149	SX-01	覆土下層	SX01-4	13	平安	須恵器	摘蓋	全形	2/3	24.8	6.9	摘径6.2	○	
	150	SX-01	覆土中層	SX01-3	15	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径3.1		
	151	SX-01	覆土上層	SX01-2	19	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径3.1		
	152	SX-01	検出面	SX01-1	1	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径3.7		
	153	SX-01	覆土中層	SX01-3	17	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径2.5		
154	SX-01	覆土中層	SX01-3	14	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径2.3			
155	SX-01	覆土中層	SX01-4	1	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径2.7			
156	SX-01	覆土上層	SX01-3	20	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径2.85			
157	SX-01	覆土中層	SX01-3	9	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径3.1			
158	SX-01	覆土上層	SX01-2	13	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径3.1			
159	SX-01	覆土下層	SX01-4	2	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径2.9			
160	SX-01	覆土下層	SX01-4	3	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径2.8			
161	SX-01	覆土中層	SX01-3	12	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/2			摘径3			
162	SX-01	覆土上層	SX01-2	16	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径3.2			
163	SX-01	覆土中層	SX01-3	7	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径2.8			
164	SX-01	覆土上層	SX01-2	15	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径2.9			
165	SX-01	覆土中層	SX01-3	10	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径3			
166	SX-01	覆土上層	SX01-2	21	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径2.4			
167	SX-01	覆土上層	SX01-2	7	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径3.1			
168	SX-01	覆土上層	SX01-2	22	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径2.8			
169	SX-01	覆土下層	SX01-4	5	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径2.9			
170	SX-01	覆土下層	SX01-4	7	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径3.1			
171	SX-01	覆土上層	SX01-2	23	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径2.7			
172	SX-01	覆土中層	SX01-3	16	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径2.6			
173	SX-01	覆土上層	SX01-2	17	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径2.75			
174	SX-01	覆土中層	SX01-3	8	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径1.9			
175	SX-01	覆土上層	SX01-2	14	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径2.8			
176	SX-01	覆土下層	SX01-4	4	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径2.2			
177	SX-01	覆土上層	SX01-2	18	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径2.9			
178	SX-01	検出面	SX01-1	2	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径3.2			
179	SX-01	覆土下層	SX01-4	6	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径3			
180	SX-01	覆土中層	SX01-3	11	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径3.1			
181	SX-01	覆土上層	SX01-2	8	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径3.5			
182	SX-01	覆土上層	SX01-2	11	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径2.9			

図版	番号	出土遺構		遺物注記 (整理 No.)	抽出 No.	時代	種別	器種	部位	遺存	寸法 (cm)			成形・調整・その他	写真	
		遺構	位置								口径	底径	器高			
図33	183	SX-01	覆土中層	SX01-3	13	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1				摘径3		
	184	SX-01	覆土中層	SX01-3	2	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1				摘径2.4		
	185	SX-01	覆土上層	SX01-2	5	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1				摘径2.6		
	186	SX-01	覆土上層	SX01-2	10	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1				摘径3.2		
	187	SX-01	覆土上層	SX01-2	9	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1				摘径3.1		
	188	SX-01	覆土中層	SX01-3	6	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/2				摘径3.2		
	189	SX-01	覆土上層	SX01-2	6	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1				摘径3.1		
	190	SX-01	覆土上層	SX01-2	12	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1				摘径2.8		
	191	SX-01	覆土中層	SX01-3	3	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1				摘径3.5		
	192	SX-01	覆土中層	SX01-3	5	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1				摘径3.3		
	193	SX-01	覆土中層	SX01-3	1	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1				摘径2.7		
	194	SX-01	覆土中層	SX01-3	4	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1				摘径2.8		
	図34	195	SX-01	覆土上層	SX01-2	1	平安	須恵器	高台杯	全形	2/3	10.7	7.3	4.3		○
		196	SX-01	覆土下層	SX01-4	8	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2	12.2	8.7	3.7		
197		SX-01	覆土下層	SX01-4	6	平安	須恵器	高台杯	底部	2/3	12	9	3.8			
198		SX-01	覆土下層	SX01-4	16	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2	12.4	8.1	3.85			
199		SX-01	覆土中層	SX01-3	1	平安	須恵器	高台杯	全形	1/1	12.4	9	4.1	墨書	○	
200		SX-01	覆土下層	SX01-4	7	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2	12.6	7.8	3.8		○	
201		SX-01	覆土中層	SX01-3	2	平安	須恵器	高台杯	全形	2/3	12.3	8.8	4.2		○	
202		SX-01	覆土中層	SX01-3	3	平安	須恵器	高台杯	全形	1/2	12.7	9	4.2			
203		SX-01	覆土下層	SX01-4	15	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2	12.6	9.2	3.8			
204		SX-01	覆土上層	SX01-2	3	平安	須恵器	高台杯	全形	1/2	12.8	8.4	3.2			
205		SX-01	覆土下層	SX01-4	3	平安	須恵器	高台杯	全形	2/3	12.7	9	4		○	
206		SX-01	覆土下層	SX01-4	5	平安	須恵器	高台杯	底部	2/3	12.8	8.9	4.3		○	
207		SX-01	覆土下層	SX01-4	13	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2	13.2	9	4.35			
208		SX-01	覆土下層	SX01-4	11	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2	12.8	9.1	4		○	
209		SX-01	覆土下層	SX01-4	9	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2	13	9	4.15		○	
210		SX-01	覆土下層	SX01-4	14	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2	13	9.7	4.1			
211		SX-01	覆土中層	SX01-3	5	平安	須恵器	高台杯	全形	1/3	12.6	8.3	3.7			
212		SX-01	覆土中層	SX01-3	4	平安	須恵器	高台杯	全形	1/3	13.7	10.1	3.6			
213		SX-01	覆土下層	SX01-4	10	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2	15.4	11.3	4.25		○	
214		SX-01	覆土下層	SX01-4	12	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2	16	11.6	4.05		○	
215		SX-01	覆土下層	SX01-4	2	平安	須恵器	高台杯	底部	2/3	15.4	12	4.2		○	
216		SX-01	覆土下層	SX01-4	1	平安	須恵器	高台杯	底部	2/3	15.9	11.9	4.5		○	
217		SX-01	覆土上層	SX01-2	2	平安	須恵器	高台杯	全形	1/2	11.6	7.8	5.05			
218		SX-01	覆土中層	SX01-3	6	平安	須恵器	高台杯	底部	1/1		9.6				
219		SX-01	覆土下層	SX01-4	4	平安	須恵器	高台杯	底部	2/3	14.6	9.7	7.2		○	
220		SX-01	覆土下層	SX01-4	9	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2	14.4	9.8	6.1	墨書	○	
221		SX-01	覆土上層	SX01-2	5	平安	須恵器	高台杯	底部	1/1		7.6				
222		SX-01	覆土下層	SX01-4	23	平安	須恵器	高台杯	底部	2/3		8.6				
223		SX-01	覆土中層	SX01-3	14	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		9				
224		SX-01	覆土下層	SX01-4	26	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		9				
225		SX-01	覆土中層	SX01-3	19	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		9.4				
226		SX-01	覆土下層	SX01-4	17	平安	須恵器	高台杯	底部	1/1		10			○	
227		SX-01	覆土下層	SX01-4	24	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		9.5			○	
228		SX-01	覆土下層	SX01-4	8	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2	13.4	9.1	3.85	墨書		
229	SX-01	覆土中層	SX01-3	6	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		10		墨書	○		
230	SX-01	覆土中層	SX01-3	8	平安	須恵器	高台杯	底部	1/4		8.9		墨書			
231	SX-01	覆土中層	SX01-3	7	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		9.1		墨書	○		
図35	232	SX-01	覆土下層	SX01-4	31	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		7.2				
	233	SX-01	覆土上層	SX01-2	6	平安	須恵器	高台杯	底部	2/3		7.7				
	234	SX-01	覆土下層	SX01-4	18	平安	須恵器	高台杯	底部	1/1		7.8				
	235	SX-01	覆土中層	SX01-3	16	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		7.6				
	236	SX-01	覆土上層	SX01-2	9	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		8				
	237	SX-01	覆土下層	SX01-4	19	平安	須恵器	高台杯	底部	1/1		8.2				
	238	SX-01	覆土下層	SX01-4	10	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		9		鈍書		
	239	SX-01	覆土中層	SX01-3	12	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		8.4				
	240	SX-01	覆土中層	SX01-3	18	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		8.4				
	241	SX-01	覆土上層	SX01-2	7	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		8.4				
	242	SX-01	覆土下層	SX01-4	28	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		9				
	243	SX-01	覆土中層	SX01-3	10	平安	須恵器	高台杯	底部	2/3		8.6				

図版	番号	出土遺構		遺物注記 (整理 No.)	抽出 No.	時代	種別	器種	部位	遺存	寸法 (cm)			成形・調整・その他	写真
		遺構	位置								口径	底径	器高		
図35	244	SX-01	覆土中層	SX01-3	13	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		8.7			
	245	SX-01	覆土下層	SX01-4	29	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		8.6			
	246	SX-01	覆土中層	SX01-3	7	平安	須恵器	高台杯	底部	1/1		8.7			
	247	SX-01	覆土中層	SX01-3	8	平安	須恵器	高台杯	底部	1/1		8.8			
	248	SX-01	覆土中層	SX01-3	11	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		8.8			
	249	SX-01	覆土中層	SX01-3	9	平安	須恵器	高台杯	底部	1/1		8.8			
	250	SX-01	覆土上層	SX01-2	8	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		9			
	251	SX-01	覆土下層	SX01-4	22	平安	須恵器	高台杯	底部	1/1		9.1			
	252	SX-01	覆土上層	SX01-2	10	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		9			
	253	SX-01	検出面	SX01-1	1	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		9			
	254	SX-01	覆土下層	SX01-4	27	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		9.4			
	255	SX-01	覆土上層	SX01-2	4	平安	須恵器	高台杯	底部	1/1		9.2			
	256	SX-01	覆土下層	SX01-4	30	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		9.2			
	257	SX-01	覆土中層	SX01-4	21	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		9.6			
	258	SX-01	覆土下層	SX01-4	25	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		9.6			
	259	SX-01	覆土中層	SX01-3	17	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		9.8			
	260	SX-01	覆土中層	SX01-3	15	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		10.4			
	261	SX-01	覆土下層	SX01-4	20	平安	須恵器	高台杯	底部	1/1		10.7			
	262	SX-01	覆土下層	SX01-4	21	平安	須恵器	高台杯	底部	1/1		11.4			
	263	SX-01	覆土中層	SX01-3	20	平安	須恵器	高台杯	底部	1/2		12.4			
	264	SX-01	覆土下層	SX01-4	7	平安	須恵器	杯	全形	1/2	12.2	6.3	3.9		
	265	SX-01	覆土下層	SX01-4	8	平安	須恵器	杯	全形	1/2	12.8	6.9	4		
	266	SX-01	覆土中層	SX01-3	17	平安	須恵器	杯	口縁	1/2	12.6	7.6	3		
	267	SX-01	覆土下層	SX01-4	10	平安	須恵器	杯	全形	1/2	12.6	6.6	3.8		
	268	SX-01	覆土下層	SX01-4	14	平安	須恵器	杯	全形	1/2	13.2	7	4.1		
	269	SX-01	覆土下層	SX01-4	13	平安	須恵器	杯	全形	1/2	13.2	7.2	4.1		
	270	SX-01	覆土中層	SX01-3	18	平安	須恵器	杯	口縁	1/4	13	6.7	3.7		
	271	SX-01	覆土下層	SX01-4	15	平安	須恵器	杯	全形	1/2	14	7	3.8		
	272	SX-01	覆土下層	SX01-4	5	平安	須恵器	杯	全形	1/2	14	7.7	3.8		
	273	SX-01	覆土上層	SX01-2	1	平安	須恵器	杯	全形	1/2	13.7	6.6	3.3		○
	274	SX-01	覆土下層	SX01-4	1	平安	須恵器	杯	全形	1/1	12.7	6.5	3.6		○
	275	SX-01	覆土中層	SX01-3	1	平安	須恵器	杯	全形	2/3	13	6.6	4		○
	276	SX-01	覆土下層	SX01-4	3	平安	須恵器	杯	全形	2/3	13.2	7.1	4.2		○
	277	SX-01	覆土下層	SX01-4	11	平安	須恵器	杯	全形	1/2	13.6	7.6	3.7		
278	SX-01	覆土下層	SX01-4	6	平安	須恵器	杯	全形	1/2	13.2	6.2	4.3			
279	SX-01	覆土中層	SX01-3	4	平安	須恵器	杯	全形	1/2		6.2	3.5	篋書	○	
280	SX-01	覆土中層	SX01-3	2	平安	須恵器	杯	全形	2/3	13.5	8	4		○	
281	SX-01	覆土中層	SX01-3	4	平安	須恵器	杯	全形	1/2	14	7.3	3.7			
282	SX-01	覆土下層	SX01-4	9	平安	須恵器	杯	全形	1/2	13.4	7	3.75			
283	SX-01	覆土下層	SX01-4	2	平安	須恵器	杯	全形	2/3	13.7	6.95	4.1		○	
284	SX-01	覆土中層	SX01-3	3	平安	須恵器	杯	全形	1/2	13.7	7.5	3.8			
285	SX-01	覆土下層	SX01-4	4	平安	須恵器	杯	全形	2/3	13.8	7	4.1		○	
286	SX-01	覆土下層	SX01-4	12	平安	須恵器	杯	全形	1/2	14.2	6.6	3.6	灯明 墨書	○	
287	SX-01	覆土下層	SX01-4	12	平安	須恵器	杯	全形	2/3	13.7	7.6	3.55	刻書 灯明	○	
図36	288	SX-01	覆土下層	SX01-4	3	平安	須恵器	杯	全形	1/2	13.2	6.3	4	墨書	
	289	SX-01	覆土中層	SX01-3	1	平安	須恵器	杯	全形	1/1	13.4	6.6	5	墨書	○
	290	SX-01	覆土下層	SX01-4	2	平安	須恵器	杯	全形	2/3	13	7.1	3.9	墨書 底部鈍切	○
	291	SX-01	覆土下層	SX01-4	5	平安	須恵器	杯	底部	2/3		6.4		墨書	○
	292	SX-01	覆土上層	SX01-2	1	平安	須恵器	杯	全形	2/3	13.7	7	4.1	墨書	
	293	SX-01	覆土中層	SX01-3	3	平安	須恵器	杯	全形	2/3	13.4	6.5	4.4	墨書	○
	294	SX-01	覆土上層	SX01-2	2	平安	須恵器	杯	底部	1/1		6.4		墨書	
	295	SX-01	覆土下層	SX01-4	4	平安	須恵器	杯	底部	2/3		6.6		墨書	
	296	SX-01	覆土下層	SX01-4	1	平安	須恵器	杯	全形	2/3	13.5	7.1	3.9	墨書	○
	297	SX-01	覆土中層	SX01-3	2	平安	須恵器	杯	全形	2/3	14	7.5	4.6	墨書	○
	298	SX-01	覆土中層	SX01-4	6	平安	須恵器	杯	底部	2/3		6.5		墨書 底部鈍切	○
	299	SX-01	覆土下層	SX01-4	7	平安	須恵器	杯	底部	2/3		6.6		墨書 篋書	
	300	SX-01	覆土下層	SX01-4	19	平安	須恵器	杯	底部	1/1		6.4		底部鈍切	
	301	SX-01	覆土下層	SX01-4	20	平安	須恵器	杯	底部	1/2		7			
	302	SX-01	覆土中層	SX01-3	15	平安	須恵器	杯	底部	1/2		6.9			
	303	SX-01	検出面	SX01-1	2	平安	須恵器	杯	底部	2/3		7.4			
	304	SX-01	検出面	SX01-1	3	平安	須恵器	杯	底部	1/2		7			

図版	番号	出土遺構		遺物注記 (整理 No.)	抽出 No.	時代	種別	器種	部位	遺存	寸法 (cm)			成形・調整・その他	写真
		遺構	位置								口径	底径	器高		
図36	305	SX-01	覆土中層	SX01-3	10	平安	須恵器	杯	底部	1/2		7.6			
	306	SX-01	覆土上層	SX01-2	4	平安	須恵器	杯	底部	1/2		5.2		匱書	
	307	SX-01	覆土中層	SX01-3	16	平安	須恵器	杯	底部	1/1		6.6			
	308	SX-01	検出面	SX01-1	1	平安	須恵器	杯	底部	1/1		6			
	309	SX-01	覆土上層	SX01-2	6	平安	須恵器	杯	底部	1/2		5.3			
	310	SX-01	覆土下層	SX01-4	24	平安	須恵器	杯	底部	1/2		5.6			
	311	SX-01	覆土中層	SX01-3	13	平安	須恵器	杯	底部	1/2		6.6			
	312	SX-01	覆土上層	SX01-2	3	平安	須恵器	杯	底部	2/3		5.5		匱書	
	313	SX-01	覆土中層	SX01-3	6	平安	須恵器	杯	底部	1/1		6.2			
	314	SX-01	覆土下層	SX01-4	16	平安	須恵器	杯	底部	1/1		6.9			
	315	SX-01	覆土中層	SX01-3	5	平安	須恵器	杯	底部	1/1		6.7			
	316	SX-01	覆土上層	SX01-2	5	平安	須恵器	杯	底部	1/2		8			
	317	SX-01	覆土下層	SX01-4	25	平安	須恵器	杯	底部	1/2		6			
	318	SX-01	覆土下層	SX01-4	11	平安	須恵器	杯	底部	1/2		6		匱書	
	319	SX-01	覆土上層	SX01-2	7	平安	須恵器	杯	底部	1/2		6.1			
	320	SX-01	覆土中層	SX01-3	7	平安	須恵器	杯	底部	1/1		5.9			
	321	SX-01	覆土中層	SX01-3	9	平安	須恵器	杯	底部	2/3		7.2			
	322	SX-01	覆土中層	SX01-3	5	平安	須恵器	杯	底部	1/3		6.2		匱書	
	323	SX-01	覆土上層	SX01-2	3	平安	須恵器	杯	底部	1/1		6.9			
	324	SX-01	覆土上層	SX01-2	4	平安	須恵器	杯	底部	1/1		5.6			
	325	SX-01	覆土中層	SX01-3	14	平安	須恵器	杯	底部	1/2		6.8			
	326	SX-01	覆土下層	SX01-4	21	平安	須恵器	杯	底部	1/2		7.2			
	327	SX-01	覆土下層	SX01-4	18	平安	須恵器	杯	底部	1/1		7.4			
	328	SX-01	覆土中層	SX01-3	8	平安	須恵器	杯	底部	1/1		5.1			
	329	SX-01	覆土上層	SX01-2	2	平安	須恵器	杯	底部	1/1		6.9			
	330	SX-01	覆土上層	SX01-2	8	平安	須恵器	杯	底部	1/2		7			
	331	SX-01	覆土中層	SX01-3	11	平安	須恵器	杯	底部	1/2		6.9			
	332	SX-01	覆土下層	SX01-4	23	平安	須恵器	杯	底部	1/2		6.6			
	333	SX-01	覆土下層	SX01-4	22	平安	須恵器	杯	底部	1/2		6.5			
	334	SX-01	覆土中層	SX01-3	12	平安	須恵器	杯	底部	1/2		6.5			
	335	SX-01	覆土下層	SX01-4	17	平安	須恵器	杯	底部	1/1		6.3			
	336	SX-01	覆土上層	SX01-2	1	平安	須恵器	高杯	脚部	2/3		13.6			
337	SX-01	覆土中層	SX01-3	1	平安	須恵器	高杯	脚部	1/2						
338	SX-01	覆土下層	SX01-4	1	平安	須恵器	高杯	脚部	1/2						
339	SX-01	覆土下層	SX01-4	2	平安	須恵器	高杯	脚部	1/2						
340	SX-01	覆土下層	SX01-4		平安	須恵器	稜椀	口縁部	小片	18.2					
341	SX-01	覆土下層	SX01-4		平安	須恵器	稜椀	稜~底	小片					○	
342	SX-01	覆土下層	SX01-4		平安	須恵器	双耳杯	口縁部	小片	13				○	
343	SX-01	覆土下層	SX01-4		平安	須恵器	双耳杯	耳部	小片					○	
344	SX-01	覆土下層	SX01-4		平安	須恵器	双耳杯	耳部	小片					○	
345	SX-01	覆土下層	SX01-4		平安	須恵器	円面硯	脚部	1/7		20			○	
346	SX-01	覆土下層	SX01-4		平安	須恵器	不明	口縁部	1/3	11.8					
347	SX-01	覆土下層	SX01-4		平安	須恵器	不明	脚部	1/3		14				
348	SX-01	覆土下層	SX01-4		平安	須恵器	香炉	脚部	1/8		12				
349	SX-01	覆土下層	SX01-4	3	平安	須恵器	壺	底部	1/1		10.7				
350	SX-01	覆土上層	SX01-2	2	平安	土師器	杯	底部	2/3		6.2		外一部ケズリ 内黒		
351	SX-01	覆土上層	SX01-2	3	平安	土師器	杯	底部	1/2	14.4	6.2	5	回転糸切 内黒		
352	SX-01	覆土中層	SX01-3	1	平安	土師器	杯	底部	2/3		8.4		回転糸切 内黒		
353	SX-01	覆土中層	SX01-3	4	平安	土師器	杯	底部	1/2		6.1		回転糸切 内黒		
354	SX-01	覆土中層	SX01-3	3	平安	土師器	杯	底部	1/2		7		回転糸切 内黒		
355	SX-01	覆土中層	SX01-3	2	平安	土師器	杯	底部	2/3		6.1		内黒		
356	SX-01	覆土下層	SX01-4	6	平安	土師器	杯	底部	2/3		6.6		内黒 底部に匱書		
357	SX-01	覆土上層	SX01-2	5	平安	土師器	高台杯	底部	1/1		6.3		内黒		
358	SX-01	覆土上層	SX01-2	6	平安	土師器	甕	底部	2/3		6.4		外一部ケズリ 底部匱切		
359	SX-01	覆土上層	SX01-2	4	平安	土師器	甕	底部	1/2		6.6		外一部ケズリ 底部匱切		
360	SX-01	覆土下層	SX01-4	3	平安	土師器	甕	底部	2/3		4.9				
361	SX-01	覆土中層	SX01-3	5	平安	土師器	甕	口~胴	1/3	15.8					
362	SX-01	覆土下層	SX01-4	2	平安	土師器	甕	底~胴	1/2		5.6		回転糸切		
363	SX-01	覆土下層	SX01-4	1	平安	土師器	甕	底部	1/2		6.2				
364	SX-01	覆土下層	SX01-4	4	平安	土師器	甕	底部	1/1		3.9				
365	SX-01	覆土下層	SX01-4	5	平安	土師器	甕	底部	1/1	31.4	19.8	7.3			

図版	番号	出土遺構		遺物注記 (整理 No.)	抽出 No.	時代	種別	器種	部位	遺存	寸法 (cm)			成形・調整・その他	写真
		遺構	位置								口径	底径	器高		
	366	SX-01	覆土下層	SX01-4	7	平安	土師器	鉢	底～口	1/2					
	367	SX-01	覆土上層	SX01-2	1	平安	弥生土器	杯	底部	1/2	4.9		赤彩		
図38	368	SX-02		SX02	1	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径2.6		
	369			1検-2	1	平安	須恵器	摘蓋	摘	1/1			摘径3.1		
	370		4検-2	1	平安	土師器	杯	底部	2/3		5.9		回転糸切 内黒		

凡例 口：口縁部 底：底部 胴：胴部 稜：稜部 外：外面 内：内面 ハケ：ハケメ調整 灯明：灯明皿 内黒：内面黒色処理 回転糸切：底部回転糸切調整
円筒：円筒形土製品

表4 桐原宮北遺跡 (AKMK) その他の遺物観察表

図版	番号	遺構	位置	遺物注記	時期	種別	名称	備考	写真
	371	SB02	覆土	SB02-1	古墳後期	土製品	紡錘車	上部径3.5cm 下部径4.8cm 全高2.7cm 最大孔径0.6cm	○
	372	SB09	覆土	SB09-1	平安	土製品	土錘	全長5cm 最大幅1.9cm 最大孔径0.8cm 表面ナデ	○
	373	SX01	覆土下層	SX01-4	平安	土製品	土錘	全長5.65cm 最大幅2cm 最大孔径0.5cm 表面ナデ	○
	374	SX01	覆土中層	SX01-3	平安	土製品	土錘	全長5.4cm 最大幅2.2cm 最大孔径0.65cm 表面ナデ	○
	375	SX01	覆土下層	SX01-4	平安	土製品	脚部片	残存長6.3cm 脚部最大径4.2cm 表面ケズリ	○
	376	SK18	覆土	SK18-2	平安	土製品	羽口	残存長9.3cm 最大径7.2cm 最大孔径2.1cm 溶解物付着	○
	377	SK18	覆土	SK18-2	平安	土製品	羽口	残存長5.7cm 溶解物付着	○
	378	SK18	覆土	SK18-2	平安	土製品	羽口	残存長5.1cm 溶解物付着	○
	379	SK18	覆土	SK18-2	平安	石製品	石鏃	黒曜石 全長1.8cm (腸袂を含む) 0.64g	○
	380	検出面	1区	1検-2	縄文	石製品	石鏃	珪質頁岩 全長3cm 重量1.77g	○
図39	381	検出面	2区	2検-1	縄文	石製品	打製石斧	頁岩 残存長8.7cm 最大幅5cm 113.74g	○
	382	SB03	取上 No.2	SB03-No.2	平安	石製品	凹石	安山岩 全長21.2cm 全幅19.2cm 孔径9.5cm 孔深約6cm	○
	383	SB03	取上 No.2	SB03-No.2	平安	石製品	凹石	安山岩 全長20.7cm 全幅14.2cm 孔径8.1cm 孔深約3cm	○
	384	検出面	4区	4検-1	中世?	石製品	硯	全長13.2cm 全幅6.1cm 重量216.87g 背面に加工痕	○
	385	SX01	覆土上層	SX01-2	平安	鉄製品	刀子	残存長11.7cm 茎長7.6cm 茎厚0.45cm 16.01g	○
	386	SB10		SB10-1	平安	鉄製品	刀子	残存長7.2cm 茎厚0.45cm 16.85g 中央に目釘孔	○
	387	SX01	覆土中層	SX01-3	平安	鉄製品	紡錘車	残存長5.7cm 残存幅2cm 残存厚0.2cm 13.23g	○
	388	SK18	覆土	SK18-2	平安	鉄製品	鉄鎌	残存長3.1cm、残存幅5.7cm 22.94g	○
	389	検出面	2区	2検-1	平安	銭貨	北宋銭	元祐通寶 径2.4cm 3.69g	
	390	SK18	覆土	SK18-2	平安	その他	鉄滓	残存長8.6cm 残存幅6.2cm 167.45g 赤褐色	○
391	SK18	覆土下層	SK18-3	平安	その他	鉄滓	残存長5.5cm 残存幅4.1cm 58.42g 赤褐色	○	
392	1号西	取上-No.5	SB-02-No.5	古墳後期	獣骨	馬歯	下顎切歯、左臼歯 24.3g	○	

遺物写真①

写真番号は実測図番号と対応する。



遺物写真②



遺物写真③

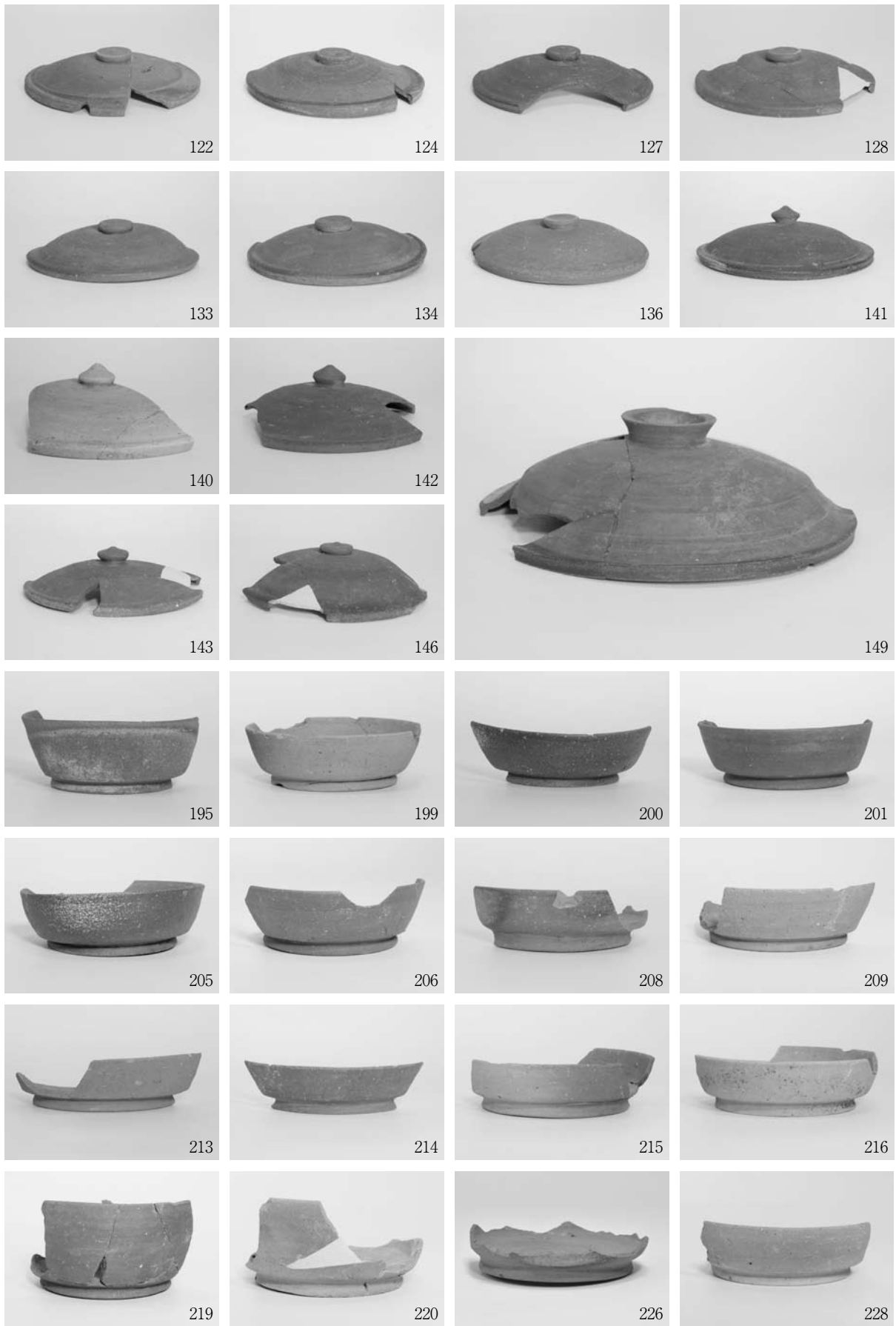


遺物写真④

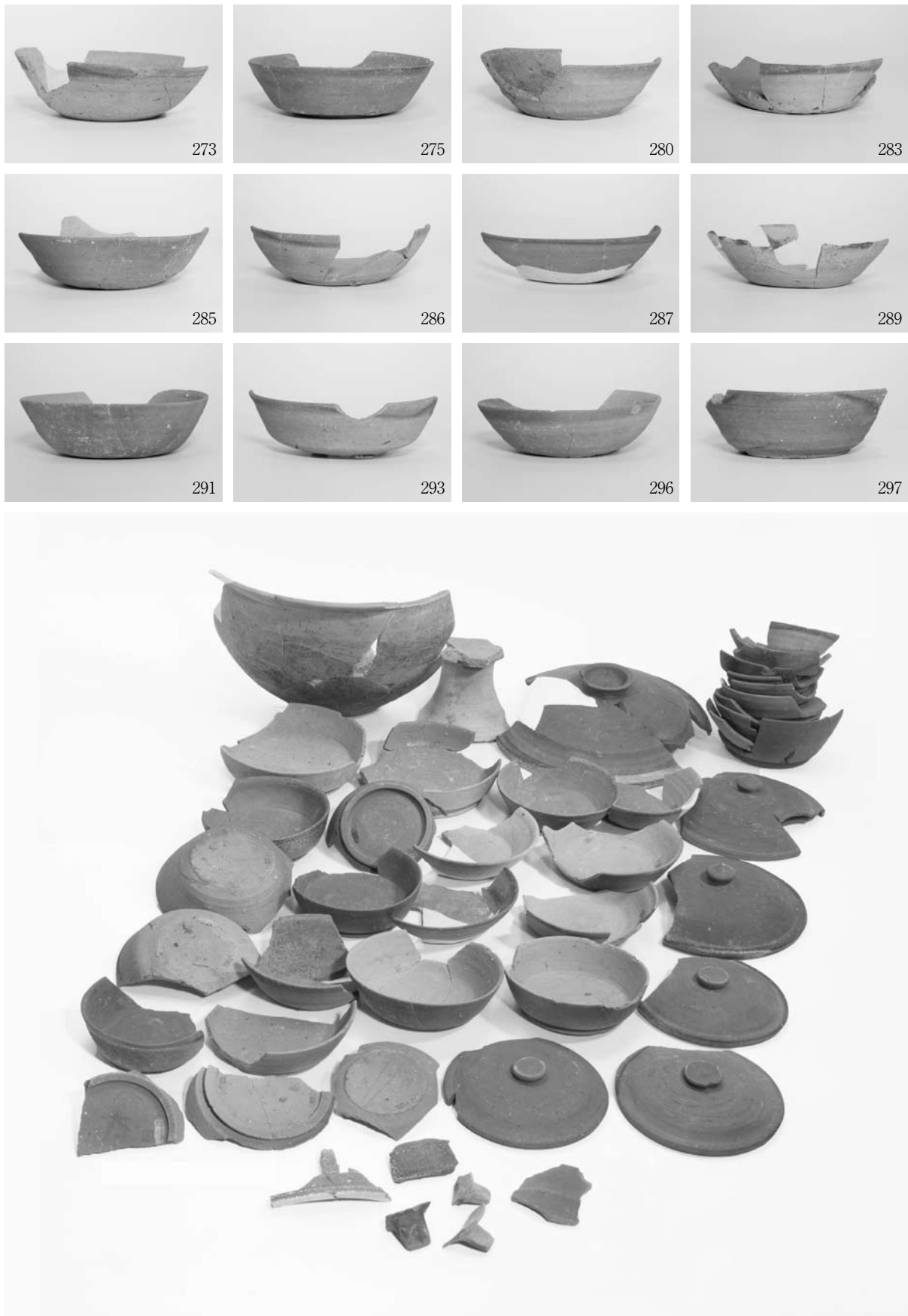


1号方形周溝墓出土 高杯・蓋

遺物写真⑤

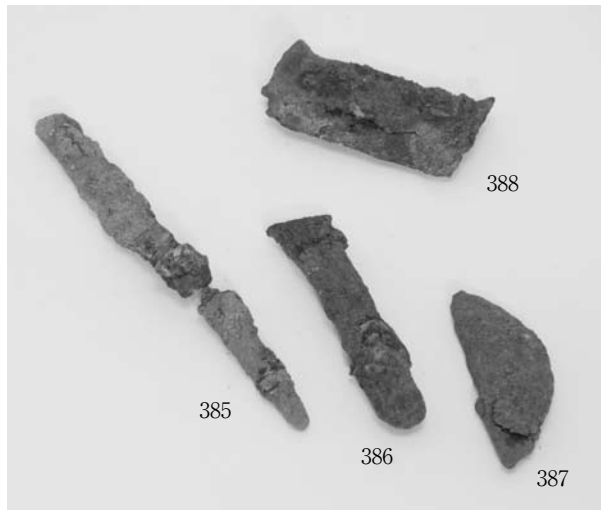
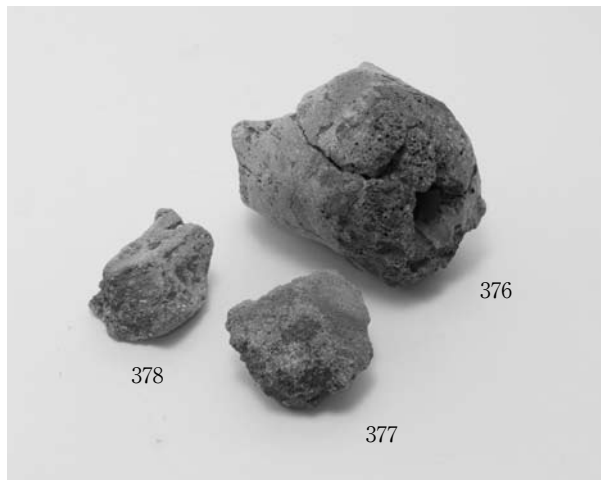


遺物写真⑥

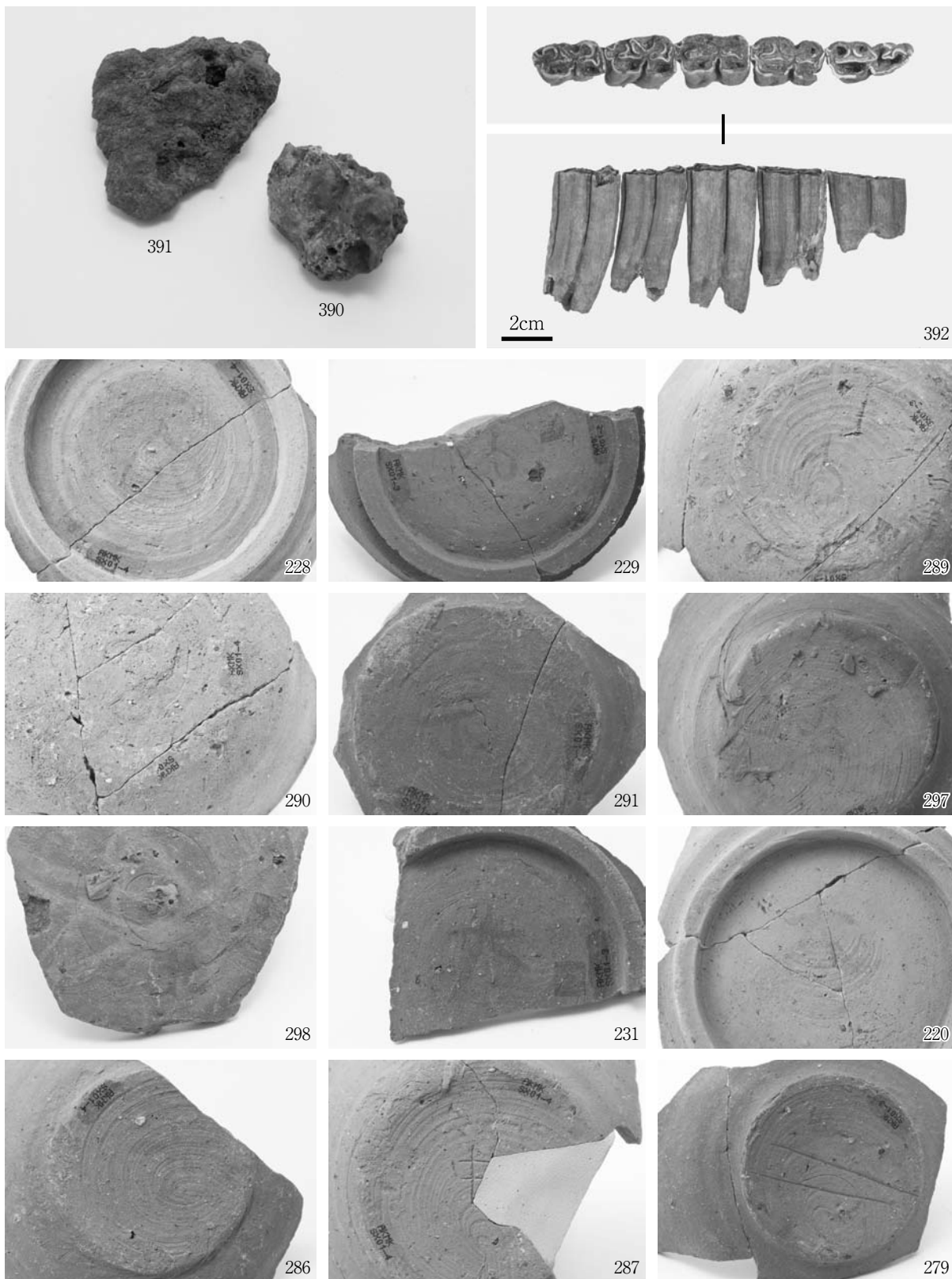


1号不明遺構主要遺物

遺物写真⑦



遺物写真⑧



報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん きりはらみやきたいせき							
書名	浅川扇状地遺跡群 桐原宮北遺跡							
副書名	「桐原の里」住宅地造成工事に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第130集							
編著者名	青木和明 平林大樹							
編集機関	長野市教育委員会 文化財課 埋蔵文化財センター							
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106							
発行年月日	2012 (平成24) 年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きりはらみやきたいせき 桐原宮北遺跡	ながのながの市 きりはら みやきたい 宮北853-1他	20201	A-099	36° 39' 56"	138° 12' 52"	20100802 ～ 20101022	1800 m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
桐原宮北遺跡	集落	縄文時代			土器・石器			
		弥生時代後期～ 古墳時代前期	竪穴住居	1軒	土器			
			方形周溝墓	2基				
			土坑	3基				
		古墳時代後期	竪穴住居	2軒	土器・獣歯			
平安時代	竪穴住居	8軒	掘立柱建物	1棟	土器・灰釉陶器 金属製品			
	土坑	9基	井戸状遺構	2基				
	溝状遺構	1本						
中世	土坑	4基	溝状遺構 (居館堀?)			土器・石製品		
要約	<p>調査地は浅川扇状地の扇中部に属し、南東方向に向かう緩やかな傾斜地に位置する。傾斜地の地形は、さらに微細な起伏によって谷部と尾根部に分かれ、尾根部を中心として分布している遺構・遺物を検出した。</p> <p>遺構は各時代にわたるものであるが、その分布状態は疎らで重複関係も稀であり、竪穴住居の存在は少数にとどまっていることから、調査範囲に限れば、居住域としての利用は各時代を通して積極的ではなかったものと理解される。その中で、平安時代の土器が多量に投棄された幅員12mの溝状遺構や径4mの井戸状遺構など、特殊な遺構の存在が注意され、一般集落とは別の土地利用のあり方が想起される。</p> <p>なお、古墳時代後期の竪穴住居から検出された馬歯については、後代の混入でないとすれば、古墳時代の馬匹の形質を知る上で貴重な資料となる。</p>							

長野市の埋蔵文化財第130集

浅川扇状地遺跡群

桐原宮北遺跡

—「桐原牧の里」住宅地造成工事に伴う発掘調査—

平成24年3月31日 発行

編集 長野市教育委員会
発行 文化財課 埋蔵文化財センター
印刷 鬼灯書籍株式会社